

○鞭 矢を盛つて背に負ふ器。

○打物 太刀刀の類

○腹巻 鎧の一種。

○犬居に 犬のやうに四つ這ひに。

○兵野に伏すときは云々 孫子に「鳥起者伏也、獸駭者覆也」
○知らましかば 知つてゐたならば。

○たまるべき 留まるべき。

○輿力同心 協力。
○驅り催す間 軍勢を徵集したので。

○鹿子木大炊助 貞昭。
○後攻 後詰。後方に控へたる軍勢。
○九國二島 九州本土と壹岐、對馬。

熊共、人影に驚いて、城の前なる篠原を、二三十つれてぞ落ちたりける。城中の兵共始めは夜討の入るよと心得て、櫓々に兵共弦音して、抛續松塀より外へ投出し、静まり返つて見えけるが、「夜討にてはなくて後の山より熊の落ちて通りけるぞ、止めよ殿原。」と呼ばはりければ、我先に射て取らんと、弓押張り鞆掻き著け、三百餘騎の兵共、おち行く熊の跡を追ひて、遙かなる籠へ下りければ、城に残る兵纒かに五十餘人になりけり。夜は既に明けぬ。城戸は皆開きたり。なじかは少しも擬議すべき、二十七人の者共、打物の鞘を廻して打つて入る。城の本人佐和善四郎並に郎等三人、腹巻取つて肩に投げ懸け、城戸口に下り合ひて、一足も引かず戦ひけるが、善四郎膝口切られて犬居に伏せば、郎等三人前に立塞ぎ暫し支へて討死す。其の間に佐和善四郎は己が役所に走り入り、火を懸けて腹掻き切つて死にけり。其の外四十餘人ありける者共は、一防ぎも防がず青杉城へ落ちて行く。熊狩しつる兵共は熊をも追はず跡へも歸らず、散りふになつてぞ落ち行きける。憑み切つたる鼓崎城を落さるゝのみならず、佐和善四郎忽ちに討たれにければ、外二つの城も皆一日あつて落ちにけり。兵、野に伏す時は飛雁行を亂るといふ、兵書の詞を知らましかば、熊故に城をば落されじと、世の嘲りになりけり。其の後越後守、石見勢を相從へて國中へ打出でたるに、攻められては落ち得じとやおもひけん、石見國中に、三十二箇所ありける城共、皆聞落して、今は唯三角入道が籠つたる三隅一つぞ残りける。こ

の城山嶮しく用心深ければ、縦令力攻めに攻むる事こそ叶はずとも、援けの兵も近國になりし、知行の所領もなければ、何時までか怵へて城にもたまるべき。唯四方の峯々に向城を取つて、二年三年にも攻め落せとて、寄手の構へ密しければ、城中の兵氣たゆみて、憑む方なくぞ覺えける。

直冬朝臣蜂起の事附將軍御進發の事

中國は大畧靜謐の體なれども、九州又蜂起しければ、九月二十九日、肥後國より都へ早馬を立てて注進しけるは、「兵衛佐直冬、去月十三日當國に下著あつて、河尻肥後守幸俊が館に居し給ふ處に、宅磨別當太郎守直輿力同心して國中を驅り催す間、御方に志を通ずる族ありと雖も、其の責に堪へずして悉く附き従はずといふ者なし。然る間河尻が勢雲霞の如くなつて宇都宮三河守が城を圍むに、一日一夜合戦して討たる、者百餘人、創を蒙る兵數を知らず。遂に三河守城を攻め落され、未だ死生の境を知り分かず、宅磨、河尻、彌大勢になつて鹿子木大炊助を取巻く間、後攻の爲に少貳が代官宗利近國を相催すと雖も、九國二島の兵共、大半兵衛佐殿に心を通ずる間、催促に従ふ輩多からず、事已に難儀に及び候、急ぎ御勢を下さるべし。」とぞ申しける。將軍此の注進に驚いて、「さても誰をか討手に下すべき。」と執事武藏守に問ひ給ひければ、師直、「遠國の亂を鎮めんが爲には、末々の

○上様 尊氏を尊敬して云ふ。

○確執 仲違ひ。

御一族、乃至師直なんどこそ罷り下るべきにて候へども、これはいかにも上様の自ら御下り候て、御退治なくては叶ふまじきにて候。其の故は九國の者共が兵衛佐殿に付き奉ることとは、唯將軍の君達にて御座候へば、内々御志を通ぜらるゝことや候はんと存するものにて候なり。天下の人家に相違して、直に御退治の御合戦候はば、誰か父子の確執に天の罰を顧みぬ者候べき。將軍の御旗下にて、師直命を輕んずるほどならば、九國中國悉く御敵に與すといふとも、何の恐れか候べき。たゞ夜を日に繼いで御下り候へ。」と、強ちに勧め申しければ、將軍一議にも及び給はず、都の警固には宰相中將義詮を殘し置き奉りて、十月十三日征夷大將軍正二位大納言源尊氏卿、執事武藏守師直を召し具し、八千餘騎の勢を率し、兵衛佐直冬誅罰の爲とて、先づ中國へとぞ急ぎ給ひける。

錦小路殿南方へ落ち給ふ事

將軍、已に明日西國へ立たるべしと聞えける其の夜、左兵衛督入道慧源は、石堂右馬助頼房許りを召し具して、いづちとも知らず落ち給ひにけり。これを聞きて世の危みを思ふ人、「すはや天下の亂出で來ぬるは、高家の一類今に滅びん。」とぞ嘯きける。事の様を知らぬ其の方様の人々女性などは、「あな淺ましや、こはいかになりぬる世の中ぞや。御供に參りたる人もなし。御馬も皆腰に繋がれたり。徒跣にては何處へか一足も落ちさせ給ふべ

○すはや それや。
○其の方様の人々 直義の家の人々を指す。

○あなこさんくし あ、仰山だ。

○鬼海 鬼界が島。

○鏃 矢の根。

○三日が内を出づべからず 三日ミたない内である。

○早且 早朝。

○筑紫 九州。

き。これは唯武藏守の計らひとして、今夜忍びやかに殺し奉るものなり。」と、聲も惜しまず泣き悲しむ。仁木細川の人々も執事の屋形へ馳せ集まつて、「錦小路殿落ちさせ給ひて候事、後の禍遠からずと覺え候へば、暫く都に御逗留あつて在所をも能く尋ねらるべくや候らん。」と申されければ、師直「あなこさんくし、縦令如何なる吉野十津河の奥、鬼海高麗の方へ落ち給ひたりとも、師直が世にあらん程は誰か其の人に與し奉るべき。首を獄門の木に曝し、骸を匹夫の鏃に止め給はん事、三日が内を出づべからず。其の上將軍御進發の事、已に諸國へ日を定めて觸れ遣はしぬ。相圖相違せば事の煩ひ多かるべし。暫くも逗留すべき處にあらず。」とて、十月十三日の早旦に師直遂に都を立つて、將軍を先立て奉り、路次の軍勢驅り具して、十一月十九日に備前の福岡に著き給ふ。爰にて四國中國の勢を待ちけれども、海上は波風荒れて船も通はず、山陰道は雪降り積つて馬の蹄も立たざれば、馳せ參る勢多からず。さては年明けてこそ筑紫へは向はめとて、將軍備前の福岡にて徒らに日をを送られける。

持明院殿より院宣をなさるゝ事

左兵衛督入道慧源は、師直が西國へ下らんとしける頃ほひ、潛に殺し奉るべき企てありと聞えしかば、其の死を遁れんが爲に忍んで先づ大和國へ落ちて、越智伊賀守を憑まれた

- 隠れたる氣色もなし その蹤跡も人の知る所になつた。
- 天氣ならでは 院宣なり救詔なりを蒙らずしては。
- 仔細なく 障りなく。
- 斑鳩宮 聖徳太子
- 守屋 物部氏。
- 聖猷 天子のはかりご。
- 國俊 藤原國房の子。

りければ、近邊の郷民ども同心に合力して、路々を切り塞ぎ四方に關を居るて、誠に貳心なげにぞ見えたりける。後一日あつて、石堂右馬助頼房以下、少々志を存する舊好の人々馳せ参りければ、早隠れたる氣色もなし。其の聞え都鄙の間に區々なり。何様天氣ならでは私の本意を達し難しとて、先づ京都へ人を上せ、院宣を伺ひ申されければ、仔細なく聽て宣下せられ、剩へ望まざるに鎮守府將軍に補せらる。其の詞にいはいはく、

被_レ院宣_ニ稱_ハ斑鳩宮之誅_ニ守屋_ヲ、朱雀院之戮_ニ將門_ヲ、是豈非_ニ捨惡持善_ノ聖猷_ニ哉。
爰_ニ退_シ治_シ兇徒_ヲ、欲_ス息_ム父叔_ノ兩將之鬱念_ヲ、叡感甚_ダ不_レ少_{カラ}。仍_テ補_シ鎮守府將軍_ニ、被_レ任_ニ左兵衛督_ニ畢_シ、早_ク率_テ九國_ニ島竝_ニ五畿七道之軍勢_ヲ企_テ上洛_ヲ、可_レ令_ニ守_ニ護_セ天下_ヲ者、依_テ院宣_ニ執達_{如シ}件_ノ。

觀應元年十月二十五日

權中納言國俊奉_ス

足利左兵衛督殿

慧源禪巷南方合體の事附漢楚合戰の事

左兵衛督入道、都をば仁木、細川、高家の一族どもに背かれて浮かれ出でぬ。大和、河内、和泉、紀伊國は、皆吉野の王命に従つて、今更武家に附き従ふべしとも見えざりけれ

○後榮 後日の榮達

○先朝 後醍醐天皇

○乾臨 天子の臨鑑

○政勸 天下の勸當

○往 既往即ち過去

○負刑 刑は苦。刑を負ひて罪を受ける

し。

ば、漢にもつかず磯にも離れたる心地して、進退歩みを失へり。越智伊賀守、かくては何様難儀なるべしと覺え候。唯吉野殿の御方へ御まゐり候て、先非を改め、後榮を期する御謀を廻らさるべしとこそ存じ候へ。」と申しければ、「尤も此の議然るべし。」とて、聽て專使を以て、吉野殿へ奏達せられけるは、

元弘始、先朝爲_ニ逆臣_ニ被_レ遷_ニ皇居_ヲ於_ニ西海_ニ、宸襟被_レ惱_マ候時、雖_モ有_リト應_テ救命_ニ起_ス義兵_ノ輩_上、或_ハ爲_ニ敵_ニ被_レ圍_マ、或_ハ戰_ヒ負_ケテ屈_シ機_ヲ、空_ク志_ヲ處_ニ、慧源苟_{クモ}勸_メ尊氏卿_ノ企_テ上洛_ヲ、應_テ救_ニ決_シ戰_ヲ、歸_シ天下_ヲ於_ニ一統_ノ皇化_ニ候事、乾臨定_メ被_レ殘_ニ叡感_ヲ候_ハ。其後依_テ義貞等_ガ諷_ニ、無_{クシテ}罪罷_リ成_ル救勸_ノ身_ト、君臣空_ク隔_ニ胡越_ノ之地_ヲ、一類悉_ク殘_ス朝敵_ノ名_一條_、歎_イテ有_リ餘_リ處_也。臣_ガ罪雖_ニ誠_ニ重_シト、天恩不_レ咎_メ往_ヲ、負_メ荆_ノ下_ニ被_レ免_ニ其_ノ咎_ヲ、則_チ蒙_リ救免_ノ綸言_ヲ、靜_メ四海_ノ之逆亂_ヲ、可_レ戴_ニ聖朝_ノ之安泰_ヲ候。此旨内々得_ニ御意_ヲ、可_レ令_ニ奏聞_ニ給_フ候。恐惶謹言。

十二月九日

沙彌慧源

進上 四條大納言殿

と委細の書状を捧けて、降参のよしを申されける。則ち諸卿参内して、この事如何あるべきと僉議ありけるに、先づ洞院左大將實世公申されけるは、「直義入道が申す處、甚だ以て

○天威 天子の威光

○天聽を掠め奉る 天皇を欺き奉る。

○鳳闕 皇居。

○併しながら 専ら

○臍を嚙むとも益なからん 悔ゆともかひがないだらう。

○指南 手本。

○北畠准后禪閣 廟。

偽れり。相傳譜代の家人、師直師泰が爲に都を追ひ出され身の措き處なき間、聊か天威を借りて己が宿意を達せん爲に、天聽を掠め奉るものなり。二十餘年の間一人を始め進らせりて百司千官悉く鳳闕の雲を望み、空しく飛鳥の翅を鍛がる、事、併しながら直義入道が惡逆に依らずや。然るに今幸ひに軍門に降らん事を請ふ、これ天の與ふ處なり。時に乗じてこれを誅せずんば後の禍ひ臍を嚙むとも益なからん。唯速かに討手を差遣はして首を禁門の前に曝さるべしとこそ存じ候へ。」と申されける。次に二條關白左大臣殿暫く思案して仰せられけるは、「張良が三畧の詞に、惠を推し恩を施せば士力日々に新たにして戦ふ時は風の發するが如しといへり。これ己が罪を謝する者は忠貞懈らず誠を以て事を盡す、卻つて貳心なき故なり。されば章邯楚に降つて秦忽ちに破れ、管仲罪を許して齊治まる事、尤も今の世に指南たるべし。直義入道御方に參る程ならば、君天下を保たせ給はん事萬歲これより始まるべし。唯元弘の舊功を捨てられず、官職に復して召使はる、より外の議はあらじとこそ覺え候へ。」と異議區々にこそ申されけれ。諫臣兩人の異議、得失互に備ふ是非分ち難し。君も欲慮を傾けられ、末座の諸卿も言を出さで良久しくある處に、北畠准后禪閣諭を引いて申されけるは、「昔秦の代己に傾かんとせし時、沛公は沛郡より起り項羽は楚より起る。六國の諸侯の秦を背く者彼の將に付き従ひしかば、共に其の威漸く振つて、沛公が兵十萬餘騎、漢の濇陽の東に軍だちし、項羽が勢は四十萬騎、定陶を攻めて雍丘の西に

○孫心 史記本紀に「孫心民間爲人牧羊、立以爲楚懷王。」
○約諾 申し合はせを互に承諾して。

至る。沛公、項羽相共に古の楚王の末孫心といひし人、民間に下つて羊を牧ひしを、取立てて義帝と號し、其の御前にて、先づ咸陽に入つて秦を亡ぼしたらん者、必ず天下に王たるべしと約諾して、東西にわかれて攻め上る。かくて項羽己に鉅鹿に至る時、秦の左將軍章邯、百萬騎にて相待ちける間、項羽自ら二十萬騎にて河を渡つて後、船を沈め釜甌を破つて廬舎を燒く。これは敵大勢にて御方小勢なり。一人も生きては返らじと心を一にして戦はずば、千に一つも勝つ事あらじと思ふ故に、思ひ切つたる心中を士卒に知らしめん爲なり。是に於て秦の將軍と九たび遇ひて百たび戦ひ、忽ちに秦の副將軍蘇角を討つて王離を生虜りしかば、討たる、秦の兵四十餘萬人、章邯重ねて戦ふ事を得ず、終に項羽に降つて還つて秦をぞ攻めたりける。項羽又新安城の戦ひに打勝つて首を切る事二十萬、凡て項羽が向ふ處破れずといふ事なく、攻むる城は落ちずといふ事なかりしかども、至る所ごとに美女を愛し酒に淫し、財を貪り地を屠りしかば、路次に數月の滯りありて、未だ都へは攻め入らず。漢の元年十一月に、函谷關にぞ著きにける。沛公は無勢にして而も道難處を経しかども、民を憐み人を撫する心深うして、財をも貪らず人をも殺さざりしかば、支へて防ぐ城もなく、降らすといふ敵もなく、道開けて事安かりしかば、項羽に三月先立つて咸陽宮へ入りにけり。然れども沛公志天下にありしかば、秦の宮室をも燒かず、驪山の寶玉をも散らさず、剩へ降れる秦の子嬰を守護し奉りて、天下の約を定めん爲に、還

○一字 一屋。
 ○人魚の油 異物志に「人魚似人形」尺餘不_レ堪_レ食……按今帝王用_三漆燈家中_一則火不_レ滅。」
 ○千官 一本「高官」孟_三子_一に「仲尼曰、始作_レ俑者其無_レ後乎。」俑は殉葬に用ゐる木偶。後_三は後_一。不仁なことをすれば後裔が絶えるであらうかの意。
 ○文宣王 孔子(仲尼)の諡號。
 ○執し 執著し。
 ○九泉 黄泉。

つて函谷へ兵を差遣はし、項羽を咸陽へ入れ立てじと關の戸を堅く閉ぢたりける。數月あつて項羽咸陽へ入らんとするに、沛公の兵函谷の關を閉ぢて項羽を入れず。項羽大きに怒つて當陽君に二十萬騎の兵を差副へ、函谷關を打ち破つて咸陽宮に入りけり。則ち降れる子嬰皇帝を殺し奉りて咸陽宮に火をかけたれば、方三百七十里に作り並べたる宮殿樓閣一字も残らず、三月まで火消えず、驪山の神陵忽ちに灰塵となるこそ悲しけれ。此の神陵と申すは、秦の始皇帝崩御成りし時、はかなくも人間の富貴を冥途まで御身に從へんと思して、樓殿を作り瑩き山川を飾りなせり。天には金銀を以て月日を十丈に鑄させて懸け、地には江海を形取りて銀水を百里に流せり。人魚の油十萬石、銀の御錠に入れて長時に燈を挑けたれば、石壁暗しと雖も青天白日の如くなり。此の中に三公已下の千官六千人、宮門守護の兵一萬人、後宮の美人三千人、樂府の妓女三百人、皆生きながら神陵の土に埋れて、苔の下にぞ朽ちにける。始めて俑を作る人は後無からんかと文宣王の誠めしも、今こそ思ひ知られたれ。始皇帝此の如く執し覺して様々の詔を殘さる、神陵なれば、さこそは其の妄執も留まり給ふらん、項羽情なくこれを掘り崩して殿閣悉く燒き拂ひしかば、九泉の寶玉二度人間に返るこそ哀れなれ。此の時項羽が兵は四十萬騎新豐の鴻門にあり。沛公が兵十萬騎咸陽の霸上にあり。其の間相去る事三十里、沛公項羽に未だ相見えず。是に於て范增といへるは、項羽が老臣、項羽に口説いていひけるは、「沛公沛郡にありし時、

○知音 知己。
 ○落さばや 逃した

其の振舞を見しかば、財を貪り美女を愛する心尋常に越えたりき。今咸陽に入りて後、財をも貪らず美女をも愛せず。これ其の志天下にある者なり。我人を遣はして竊に彼の陣中の體を見するに、旗の文に龍虎を書けり。これ天子の氣に非ずや。速かに沛公を討たずんば、必ず天下沛公の爲に傾けらるべし。」と申しければ、項羽實にもと聞きながら、我が勢の強大なるを憑みて、何程の事かあるべきと思ひ侮つてぞ居たりける。斯かる處に沛公が臣下に曹無傷といひける者、潛に項羽の方へ人を遣はして、沛公天下に王たらんとする由をぞ告げたりける。項羽これを聞きて、此の上は疑ひなしとて四十萬騎の兵共に命じて、夜明けば則ち沛公の陣へ寄せ、一人も餘さず討つべしとぞ下知しける。茲に項羽が季父に項伯といひける人、昔より張良と知音なりければ、此の事を告げ知らせて落さばやと思ひける間、急ぎ沛公の陣へ行き向ひ張良を呼び出して、「事の體已に急なり。今夜急ぎ逃け去つて命許りを助かれ。」とぞ教訓したりける。張良元來義を重んじて、節に臨む時命を思ふ事塵芥よりも輕んぜし者なりければ、何故か事の急なるに當つて、高祖を捨てて逃げ去るべきとて、項伯がいふ處を沛公に告ぐ。沛公大きに驚きて、「抑我が兵を以て項羽と戦はん事、勝負は運に依るべきや。」と問ひ給へば、張良暫く案じて、「漢の兵は十萬騎、楚は四十萬騎なり。平野にて戦はんに、漢勝つ事を得難し。」とぞ答へける。沛公、「さらば我項伯を呼びて、兄弟の交はりをなし婚姻の義を約して、先づ事の無爲ならんずるやうを謀ら

○帷幕 陣屋。

○秋毫も 少しも。

○破らざらましかば
…事を得まじや 破
らなかつたまじしたな
ら…事を得たであら
うや。
○心服 心から服す

○虎口 危険。

ん。』とて項伯を帷幕の内へ呼び給ひて、先づ旨酒を奉じ自ら壽をなして宣ひけるは『初
め我と項王と約をなして先づ咸陽に入らん者を王とせんといひき。我項王に先立つて咸陽
に入る事七十餘日、然れども約を以て我天下に王たらん事を思はず、關に入りて秋毫も敢
て近づくる處あらず。吏民を籍し府庫を封じて項王の來り給はん日を待つ。これ世の知る
處なり。兵を遣はして函谷の關を守らせし事は、全く項王を防ぐに非ず、他の盜人の出入
と非常に備へん爲なりき。願くは公速かに歸つて、我が徳に倍かざる處を項王に語つて明
日の戦ひを止め給へ。我則ち旦日項王の陣に行いて自ら罪なき故を謝すべし。』と宣へば、
項伯則ち許諾して馬に策つてぞ歸りにける。項伯則ち項王の陣に行いて具に沛公の謝する
處を申しけるは『抑沛公先づ關中を破らざらましかば、項王今咸陽に入りて枕を高うし
食を安んずる事を得まじや。今天下の大功は併しながら沛公にあり。然るに小人の讒を信
じて功ある人を討たん事大きな不義なり。如かじ沛公と交はりを深うし功を重んじて天
下を鎮めんには。』と、理を盡して申しければ、項羽實にもと心服して顔色快くなりけり。
暫しあれば沛公百餘騎を隨へて項王に見ゆ。仍ち禮謝して曰く『臣項王と力を合はせ
て秦を攻めし時、項王は河北に戦ひ臣は河南に戦ふ。憶はざりき、萬死を秦の虎口に連れ
て、再會を楚の鴻門に遂げんとは。然るに今佞人の讒に依つて臣項王と胡越の隔てあらん
事豈悲しまざるべけんや。』と首を地に著けて宣へば、項羽誠に心解けたる氣色にて『これ

○帶いたる所の太刀
を云々 史記本紀に
「舉所佩玉玦以示
之者三。」見ゆ。
○項莊 項羽の従弟
○壽せよ 祝杯をさ
せよ。

○氣色 顔色。様子。

沛公の左司馬曹無傷が告げ知らせしに依つて頻りに沛公を疑ひき。然らすんば何を以てか
知る事あらん。』と、忽ちに證人を顯はして誠に所存なけなる體、心淺くぞ見えたりける。
項羽頻りに沛公を留めて酒宴に及ぶ。項王と項伯とは東に嚮うて坐し、范增は南に嚮ひた
り。沛公は北に嚮うて坐し、張良は西に嚮ひて侍り。范增は兼てより、沛公を討たん事
今日にあらずんば何時をか期すべきと思ひければ、項羽を内へ入れて、沛公と刺し違へん
爲に、帶いたる所の太刀を拳つて、三度まで目加しけれども、項羽其の心を悟らず唯默然
としてぞ居たりける。范增則ち座を立つて、項羽を呼びて申しけるは『我項王の爲に沛公
を討たんとすれども項王愚かにして之を悟らず。汝早く席に歸つて沛公を壽せよ、沛公
杯を傾けん時、我と汝と劍を抜いて舞ふ眞似をして、沛公を座中にして殺さん。然らすば
汝が輩遂に沛公が爲に亡ほされて、項王の天下を奪はれん事は、一年の中を出づべから
ず。』と涙を流して申しければ、項莊一議に及ばず。則ち席に歸つて、自ら酌を取つて沛公
を壽す。沛公杯を傾くる時、項莊『君王今沛公と飲酒す。軍中樂をせざる事久し。請
ふ臣等劍を抜いて太平の曲を舞はん。』とて、項莊劍を抜いて立つ。范增も諸共に劍を指翳
して沛公の前に立合ひたり。項伯彼等が氣色を見て、沛公を討たせじと思ひければ、『我も
共に舞ふべし。』とて同じく又劍を抜いて立つ。項莊南に向へば項伯北に立つ。范增沛公に
近づけば項伯身を以て立隠す。之に依つて樂已に徹らんとするまで沛公を討つ事能はず。

○樊噲 沛邑の人。

○交戟の衛士 武装した護衛兵。

○羅刹 獄卒。

○七尾 七頭。○庭 家。

少し隙ある時に張良門前に走り出でて誰かあると見るに、樊噲つと走り寄つて、座中の體如何と問ひければ、張良「事甚だ急なり。今項莊劍を抜いて舞ふ。其の意常に沛公に在り。」と答へければ、樊噲「これ已に喉に迫るなり。速かに入りて沛公と同じく命を失はんにはしかじ。」とて、兜の緒を締め、鐵の楯を挟みて、軍門の内へ入らんとす。門の左右に交戟の衛士五百餘人、戈を支へ太刀を抜いてこれを入れじとす。樊噲大きに忿つて、其の楯を身に横へ門の關の木七八本押し折つて、内へつと走り入れれば、倒るゝ扉に打倒され、鐵の楯につき倒されて、交戟の衛士五百人地に伏して皆起き上らず。樊噲遂に軍門に入りて、其の帷幕を褰けて目を瞋らかし、項王をはたと睨んで立ちけるに、頭の髮上に上りて兜の鉢をおひ貫き、獅子の怒り毛の如く巻いて百千萬の星となる。皆逆に裂けて、光百鍊の鏡に血をそぎたるが如く、其の長九尺七寸ありて忿れる鬼鬚左右に分れたるが、鎧突して立つたる體、如何なる惡鬼羅刹もこれには過ぎじとぞ見えたりける。項王これを見給ひて、自ら劍を抜き懸けて跪いて「汝何者ぞ。」と問ひ給へば、張良「沛公の兵に樊噲と申す者にて候なり。」とぞ答へける。項羽其の時に居直つて、「これ天下の勇士なり。彼に酒を賜はん。」とて、一斗を盛る。卮を召し出して樊噲が前におき、七尾許りなる麤の肩を肴にとつて出されたり。樊噲楯を地に覆せ劍を抜いて麤の肩を切つて、少しも残さず嚙み食ひて卮に酒をたぶくと受けて三度傾け、卮を闇いて申しけるは、「夫れ秦王虎狼の心

○秋毫も敢て云々 少しも私する所がない。

○思ふ程 思ふ存分

○刀俎 庖丁ごまな板。

○白璧 白き玉。

○一雙 二個。

○問道 近道。

○龍蹄 駿馬。

ありて人を殺し民を害する事休む時なし。天下これに依つて秦を背かずといふ者なし。爰に沛公と項王と同じく義兵を擧げ、無道の秦を亡ぼして天下を救はん爲に、義帝の御前にして血をすゝりて約せし時、先づ秦を破つて咸陽に入らん者を王とせんといひき。然るに今沛公項王に先立つて咸陽に入る事數月、然れども秋毫も敢て近づくる所あらず。宮室を封閉して以て項王の來り給はん事を待つ。これ豈沛公の仁義にあらずや。兵を遣はして函谷關を守らしめし事は、他の盜人の出入と非常とに備へん爲なりき。其の功の高き事此の如し。未だ封侯の賞あらずして、剩へ有功の人を誅せんとす。これ亡秦の惡を續いで自ら天の罰を招くものなり。」と、少しも憚らず項王を睨んで申せば、項王答ふるに言なくして唯首を低れて赤面す。樊噲は斯様に思ふ程云ひ散らして、張良が末座に著く。暫くありて沛公厠に行く眞似して、樊噲を招いて出で給ふ。潛に樊噲に向つて、「先に項莊が劍を抜いて舞ひつる志偏に吾を討たんと計るものなり。座久しうして歸らざば事危きに近し。これより急ぎ我が陣へ歸らんと思ふが、辭せずして出でん事禮にあらず如何すべき。」と宣へば、樊噲「大行は細謹を顧みず、大禮は辭讓を必せず、今の如き人は方に刀俎なり、我は魚肉なり、何ぞ辭する事をせんや。」とて、白璧一雙と玉の卮一雙とを張良に與へて留め置き、驪山の下より問道を経て、龍蹄に策を進め給へば、靳強、紀信、樊噲、夏侯嬰四人、自ら楯を挟み戈を採つて、馬の前後に相隨ふ。其の道二十餘里、嶮しきを凌ぎ絶えた

○玉斗 玉の杯。

○豎子 小僧。罵つて云ふ語。

○成敗 處理。

るを渡つて、半時を過ぎず霸王の陣に行き到りぬ。初め沛公に随ひし百餘騎の兵共は、猶項王の陣の前に並び居て、張良未だ鴻門にあれば人みな沛公の歸り給へるを知らず。暫くありて張良座に返つて謝して曰く、「沛公酔ひて杯を酌むに堪へず、退出し給ひ候ひつるが、臣良をして、謹んで足下にこれを獻ぜよと申し置かる。」とて、先づ白璧一雙を奉りて、再拜して王の前にぞ置きたりける。項王白璧を受けて、「誠に天下の重寶なり。」と感悦して、座上に置いて自愛し給ふ事類なし。其の後張良又玉斗一雙を捧けて范増が前にぞ置きたりける。范増大きに忿つて、玉斗を地に投げ劍を抜いて突き推き、項王をはたと睨みて、「嗟豎子與に謀るに足らず、項王の天下を奪はん者は必ず沛公なるべし。奈何せん吾が屬今これが爲に虜とならん事。白璧は重寶なりと雖も豈天下に替へんや。」とて、怒る眼に涙を流し半時許りぞ立ちたりける。項王猶も范増が心を悟らず、いたく酔ひて帳中に入り給へば、張良百餘騎を随へて霸王に歸りぬ。沛公の軍門に到つて、項王の方へ返忠しつる曹無傷を斬つて、首を軍門に懸けらる。斯かりし後は沛公項王互に相見ゆる事なし。天下は唯項羽が成敗に随つて、賞罰共に明らかならざりしかば、諸侯萬民諸共に、沛公が功の隠れて、天下の主たらざることをぞ悲しみける。其の後項羽と沛公と天下を争ふ氣已に顯はれて、國々の兵、兩方に屬せしかば、漢楚二つに分れて四海の亂止む時なし。沛公をば漢の高祖と稱す。其の手に屬する兵には、韓信、彭越、蕭何、曹參、陣平、張良、樊

○周勃 廉直の人。

○陳餘 賢臣の聞えある人。

○三匹 三重。

噲、周勃、鯨布、盧縮、張耳、王陵、劉賈、酈商、灌嬰、夏侯嬰、傅寬、劉敬、靳強、吳芮、酈食其、董公、紀信、轅生、周苛侯公、隨何、陸賈、魏無知、叔孫通、呂項、呂巨、呂青、呂安、呂祿以下の呂氏三百餘人都合其の勢三十萬騎、高祖の方にぞ屬しける。楚の項羽は元來代々將軍の家なりければ、相隨ふ兵八千人あり。其の外いま馳せ著きたる兵には、櫟陽長史欣、都尉董翳、塞王司馬欣、魏王豹、瑕丘申陽、韓王成、殷王司馬邛、趙王歇、常山王張耳、義帝柱國共敖、遼東韓廣、燕將臧荼、田市、田都、田安、田榮、成安君陳餘、萬君將梅鋗、雍王章邯、是は河北の戦ひ破れて後、三十萬騎の勢にて項羽に降つて屬せしかば、項氏十七人、諸侯五十三人、都合其の勢三百八十六萬騎、項王の方にぞ加はりける。漢の二年に項王城陽に至つて、高祖の兵田榮と戦ふ。田榮が軍破れて降人に出でければ、其の老弱婦女に至るまで、二十萬人を土の穴に入れて埋めてこれを殺す。漢王又五十六萬人を率して彭城に入る。項羽自ら精兵三萬人を將るて胡陵にして戦ふ。高祖又打負けければ、楚則ち漢の兵十餘萬人を生虜つて彭水の淵にぞ沈めける。彭水これが爲に流れず。高祖二度戦ひ負けて靈壁の東に至る時、其の勢纒かに三百餘騎なり。項王の兵三萬騎、漢王を圍みぬる事三匹、漢遁るべき方もなかりける處に、俄に風吹き雨荒くして、白日忽ちに夜よりも尙暗かりければ、高祖數十騎と共に敵の圍みを出でて、豊沛へ落ち給ふ。項王これを追うて沛郡へ押寄せければ、高祖の兵共爰に支へ彼處に防いで、討死す

○周呂侯 呂后の兄
 ○勝つに乗つて 勝ちに乗じて。
 ○廣武 滎陽縣西二十里にある。

○北面にして 臣として北面して。
 ○羞 すひもの。
 ○欺 かけられはあざけつたので。

○丁壯 壯年の者。
 ○轉漕 水陸の運送

○雌雄 勝負。

る者二十餘人、沛郡の戦ひにも又漢王打負け給ひければ、高祖の父太公、楚の兵に虜はれて項王の前に引出さる。漢王又周呂侯と蕭何が兵を并せて二十萬餘騎、滎陽に到る。項王勝つに乗つて八十萬騎、彭城より押寄せて相戦ふ。此の時漢の戦ひ纔かに利ありと雖も、項王更に物ともせず漢楚互に勢ひを振つて未だ重ねて戦はず、共に廣武に陣を張り河を隔ててぞ居たりける。或時項王の陣に高き組を作つて、其の上に漢王の父太公を置きて高祖に告げて曰く、「これ沛公が父に非ずや。沛公今首を延べて楚に降らば太公と汝が命を助けん。沛公若し楚に降らば、急に太公を烹殺すべし。」とぞ申しける。漢王これを聞きて、大きに哈うて曰く、「吾項羽と北面にして命を懷王に受けし時、兄弟たらん事を誓ひき。然れば吾が父は即ち汝が父なり。今汝父を烹殺さば幸ひに我に一杯の羹をわかつて。」と、欺かれければ、項王大きに怒つて即ち太公を殺さんとしけるを、項伯堅く諫めければ、「よしさらば暫し。」とて、太公を殺す事をば止めてけり。漢楚久しく相支へて未だ勝負を決せず、丁壯は軍旅に苦しみ老弱は轉漕に疲る。或時項羽自ら甲冑を著し戈を取り、一日に千里を走る騾といふ馬に打乗つて、たゞ一騎河の向うの岸に控へて宣ひけるは、「天下の士卒戦ひに苦しむ事己に八箇年、これ我と沛公と唯兩人を以ての故なり。漫に四海の人民を憐れまさんよりは、我と沛公と獨身にして雌雄を決すべし。」と招いて、敵陣を睨んでぞ立つたりける。爰に漢皇帷幕の中より出でて、項王をせめて宣ひけるは、「夫れ項王自ら義なくし

○關中 函谷關の中 帝都咸陽の所在地 一帯を云ふ。

○私にせり 私有にした。

○聞く 政治を聞く

○いたづがはしく わづらはしく。

○梃楚 杖答。

○箠 矢を盛る器。

て天罰を招く事其の罪一にあらず。始め項羽と與に命を懷王に受けし時、先づ入りて關中を定めたらん者を王とせんといひき。然るを項羽忽ちに約を背いて、我を蜀漢に主たらしむ。其の罪一つ。宋義、懷王の命を受けて卿子冠軍となる處に、項羽狼りに其の帷幕に入りて、自ら卿子冠軍の首を斬つて、懷王我をして之を誅せしめたりと偽つて令を軍中に出す。其の罪二つ。項羽趙を救ひて戦ひ利ありし時、還つて懷王に報せず、境内の兵を掃ひて自ら關に入る。其の罪三つ。懷王堅く令すらく、秦に入らば民を害し財を貪る事なかれと。項羽數月移れて秦に入りし後、秦の宮室を焼き、驪山の塚を掘りて其の寶玉を私にせり。其の罪四つ。又降れる秦王子嬰を殺して、天下に蔓る。其の罪五つ。詐りて秦の子弟を新安城の坑に埋みて殺せる事二十萬。其の罪六つ。項羽諸將を善き地に王として故主を逐ひ討ちたり。叛逆これより起る。其の罪七つ。懷王を彭城に移して韓王の地を奪ひ、并せて梁楚に王として自ら天下を預り聞く。其の罪八つ。項羽人をして懷王を江南に殺せり。其の罪九つ。此の九つの罪は天下の指す所、道路目を以て惡むものなり。大逆無道の甚だしき事、天豈公を誡め刑せざらんや。何ぞいたづがはしく、項羽と獨身にして戦ふ事を致さん。公が力山を抜くと雖も我が義の天に合へるには如かじ。然らば刑餘の罪人をして甲兵金革をすて、梃楚を製して、項羽を撃ち殺すべし。」と欺いて、百萬の士卒、同音に箠を敲いてどつと笑ふ。項羽大きに怒つて自ら強弩を引いて漢王を射る。其の矢河の面四

○くつまき 矢幹に鏃をつけた所。
○下針をも射る 小さい的でもよく射る響。

○辟易 しりごみ。

○大牢の具へ 牛羊豕をそなへた饗應。
○引出物 贈り物。

町餘を射越して漢王の前に控へたる兵の、鎧の草摺より引敷の板の裏表四重をかけ射徹し、高祖の鎧の胸板に、くつまき責めてぞ立つたりける。漢の兵に樓煩といひけるは、強弓の矢繼早、馬の上の達者にて、三町四町が中のもをば、下針をも射る程のものなりけるが、漢王の當の矢を射んとて矢頃過ぎてかけ出でたりけるを、項羽自ら戟を持つて立向ひ、目を瞋らかし大音聲を揚げて『汝何者なれば、我に向つて弓を引かんとはするぞ。』と怒つてちやうとにらむ。其の勢ひに辟易して、さしもの樓煩目敢て物を見ず、弓をも引き得ず人馬共に振り戦きて、漢王の陣へぞ逃げ入りける。漢王創を蒙つて癒ゆるを持つ程に、其の兵皆氣を失ひしかば、戦ふごとく楚勝つに乘らずと云ふ事なし。これ唯范増が謀より出でて、漢王常に圍まれしかば、陳平張良等、如何にもして此の范増を討たんとぞ謀りける。或時項王の使者漢王の方に来れり。陳平之に對面して、先づ酒を勸めんとしけるに、大牢の具へをなして山海の珍を盡し旨酒泉の如く湛へて、沙金四萬斤、珠玉、綾羅、錦繡以下の重寶を、山の如く積み上げて、引出物にぞ置きたりける。陳平が語る詞ごとに、使者敢て心得ず、默然として答ふる事なかりける時に、陳平詐り驚いて『吾公を以て范増が使なりしと思ひて密事を語りつ。今項王の使なることを知つて、悔ゆるに益なし。これ命を傳ふる者の誤りなり。』といひて、様々に積み置きける引出物を皆取返し、大牢の具へを取入れて、卻つて飢口にだにもあきぬべき、惡食をぞ具へける。使者歸つて此

○返忠 敵に忠をつくすこと。

○鳩毒 鳩といふ鳥の羽を酒にひたして作る毒藥。

○血を吐きて云々 史記に「疽發背死。」
○はぐみ 養ひ。

の由を項王に語る。項王これより范増が漢王と密議を謀つて、返忠をしけるよと疑ひて、これが權を奪ひて誅せん事を謀る。范増これを聞き、一言も遂に陳謝せず、『天下の事大きに定まりぬ。君王自ら之を治め給へ。我已に年八十餘、命の中に君が亡びんを見ん事も悲しかるべし。唯願はくは我が首を刎ねて市朝に曝さるゝか、然らずんば鳩毒を賜うて死を早くせん。』と請ひければ、項王彌瞋つて鳩毒を吞ませらる。范増鳩を吞みて後未だ三日を過ぎざるに血を吐いてこそ死にけれ。楚漢相戦つて己に八箇年自ら相當る事七十餘度に及ぶまで、天下楚を背くと雖も項羽度毎に勝つに乗りし事は、唯楚の兵の猛く勇めるのみにあらず。范増謀を出して民をはぐみ、士を勇め敵の氣を察し、勞せる兵を助け化を普く施して、人の心の和せし故なり。されば范増死を賜ひし後、諸侯悉く楚を負きて漢に屬する者甚だ多し。漢楚共に滎陽の東に至つて久しく相支へたる時に、漢は兵盛んに食多くして楚は兵疲れ食絶えぬ。此の時漢の陸賈を楚に使はして曰く、『今日より後は天下を中分して、鴻溝より西をば漢とし東をば楚とせん。』と和を請ひ給ふに、項王悦びて其の約を堅くし給ふ。仍て先に生捕つて戦ひの弱き時には、これを烹殺さんとせし漢王の父太公を赦して、漢へぞ送られける。軍勢皆萬歳を呼ばふ。かくて楚は東に歸り漢は西に歸らんとしける時、陳平張良共に漢王に申しけるは、『漢今天下の大半を有ち諸侯皆附き隨ふ。楚は兵疲れて食盡きたり、これ天の楚を亡ぼす時なり。此の時討たずんば唯虎を養つて自ら

患へを遣し候ものなるべし。漢王此の諫につきて即ち諸侯に約し、三百餘萬騎の勢にて項王を追ひ懸け給ふ。項羽僅か十萬騎の勢を以て固陵に返し合はせて漢と相戦ふ。漢の兵四十餘萬人討たれて引退く。これを聞きて韓信、齊國の兵三十萬騎を率して、壽春より廻つて楚と戦ふ。彭越、彭城の兵二十萬騎を率して、城父を経て楚の陣へ寄せ、敵の行く前を遮りて陣を張る。大司馬周殷、九江の兵十萬騎を率して、楚の陣へ押寄せ水を阻つて取籠むる。東南西北悉く百重千重に取巻きたれば、項羽落つべき方なくて、垓下の城にぞ籠られける。漢の兵これを圍める事數百重、四面皆楚歌するを聞きて項羽今宵を限りと思はれければ、美人虞氏に向つて、涙を流し詩を作つて悲歌慷慨し給ふ。虞氏悲しみに堪へず、劍を賜ひて自ら其の刃に貫かれて伏しければ、項羽今は浮世に思ふ事なしと悦びて、夜明けければ、討ち残されたる兵二十八騎を伴ひて、先づ四面を圍みぬる漢の兵百萬餘騎を懸け破り、烏江といふ川の邊に打出で給ひ、自ら涙を抑へて其の兵に語つて曰く、「吾兵を起してより以來、八箇年の戦ひに、自ら逢ふ事七十餘戰、當る所は必ず破る、撃つ所は皆服す。未だ嘗めより一度も敗北せず遂に覇として天下を有てり。然れども今勢ひ盡き力衰へて漢の爲に亡ほされぬる事、全く戦ひの罪にあらず、唯天我を亡ほすものなり。故に今日の戦ひに、我必ず快く三度打勝つて、しかも漢の大將の首を取り、其の旗を靡かして、誠に我が言ふ處誤らざる事を汝等にしらすべし。」とて、二十八騎を四手に分け、漢の

○核下の城 沛郡にある。

○四面皆楚歌する

四面の寄手が皆楚の歌を歌ふ即ち楚の人が皆項羽に叛いて漢軍に投じた事。

○烏江 和州にある

○霸 霸者即ち諸侯中の頭。

○山東にして 山東に於て。

○我が言ふ所に非ずや 自分が言つた通りではないか。
○亭の長 郡郷の長者。

○傾け 倒し。

兵百萬騎を四方に受けてひかへたる處に、先づ一番に漢の將軍淮陰侯、三十萬騎にて押寄せたり。項羽二十八騎を後に立てて、眞前に懸け入つて、自ら敵三百餘騎切つて落し、漢の大將の首を取つて鋒に貫いて、本の陣へ馳せ返り、山東にして見たまへば、二十八騎の兵、八騎討たれて二十騎になりけり。其の勢を又三所に控へさせて、近づく敵を待ち懸けたるに、孔將軍二十萬騎、費將軍五十萬騎にて東西より押寄せたり。項王又大きに喚いて山東より馳せ下り、兩陣の敵を四角八方へ懸け散らし、逃ぐる敵五百餘人を斬つて落し、又大將都尉が頭を取り、左の手に提けて、本の陣へ馳せ返り、其の兵を見給ふに僅か七騎になりけり。項羽自ら漢の大將軍三人の首を鋒に貫きて指しあげ、七騎の兵に向つて、「如何に汝等我が言ふ所に非ずや。」と問ひ給へば、兵皆舌を翻して、「誠に大王の御言の如し。」と感じける。項羽已に五十餘箇所創を被りてければ、「今はこれまでぞ、さらば自害をせん。」とて、烏江の邊に打臨み給ふ。爰に烏江の亭の長といふ者、舟を一艘漕ぎ寄せて、「此の川の向うは項王の御手に屬して、所々の合戦に討死仕りし兵どもの故郷にて候。地狭しと雖も其の人数十萬人あり。此の舟より外は渡すべき淺瀬もなく、又橋もなし。漢の兵到るとも、何を以てか渡る事を得ん。願はくは大王急ぎ渡りて命をつぎ、重ねて大軍を動かして、天下を今一度覆し給へ。」と申しければ、項王大きに「哈つて、「天我を亡ほせり、我如何か渡る事をせん。我昔江東の子弟八千人と此の河を渡りて秦を傾け、

○たびたりける 賜
ひたりける。

○赤泉侯 名は揚喜

○立ちすくみにこそ
死に云々 立往生な
さつた。
○萬機の政 天下の
政事。

遂に天下に覇として賞未だ士卒に及ばざる處に、又高祖と戦ふ事八箇年、今其の子弟一人も還る者なくして、我獨り江東に歸らば、縱令江東の父兄憐みて我を王とすとも、我何の面目あつてかこれに見ゆることを得ん。彼縱令言はずとも、我獨り心に愧ぢざらんや。」とて、遂に河を渡し給はざれども、亭の長が志を感じて、驩といひける馬の一日に千里を翔るを、唯今まで乗り給ひたるを下して、亭の長にぞたびたりける。其の後歩立になつて、唯三人猶忿つて立ち給へる所へ、赤泉侯騎將として二萬餘騎が眞前に進み、項王を生捕らんと馳せ近づく。項王目を噴らかし聲を發して、「汝何者なれば我を討たんとは近づくぞ。」と忿つて立向ひ給ふに、さしもの赤泉侯其の人こそあらめ、心なき馬さへ振り戦いて、小膝を折つてぞ伏したりける。爰に漢の司馬呂馬童が遙かに控へたりけるを、項王手を舉げて招き、「汝は吾が年來の知音なり。我聞く、漢我が首を以て千金の報萬戸の邑に購ふと、我今汝が爲に首を與へて、朋友の恩を謝すべし。」といふ。呂馬童涙を流して敢て項王を討たんとせず。項王、「よしやさらば我と吾が頸を掻き切つて、汝に與へん。」とて、自ら劍を抜いて己が首を掻き落し、左の手に差擧げて立ちすくみにこそ死に給ひけれ。項王遂に亡びて、漢七百の祚を保ちしことは、陳平張良が謀にて、僞つて和睦せし故なり。其の智謀今又當れり。然れば唯直義入道が申す旨に任せて先づ御合體あらば、定めて君を御位に即け進らせて、萬機の政を四海に施されんか。聖德普くして、士卒悉く歸服し奉らば、

○同心 同意。

○綸言 天子の仰せ
○温故知新 論語爲
政篇「子曰、温故知
新、可ニ以爲師矣。」
と見ゆ。

○景命 大命。
○正平五年 北朝の
觀應元年に當る。

其の威忽ちに振ひて逆臣等を亡ほされんに、何の仔細か候べき。」と、次の才學と覺えて、言巧みに申されければ、諸卿實にもと同心して、即ち救免の宣旨をぞ下されける。

被ニ綸言一稱ク、温故知新者、明哲之所好也。撥テ亂ヲ復スル正ニ者、良將之所レ先ニズル也。而ルニ不忘ニ元弘之舊功ヲ、奉ル歸ニ皇天之景命ニ、歡感之至、尤モ足ニ褒賞スルニ。早ク揚義兵ヲ、可シ運ニ天下靜謐之策ヲ。者 綸旨如此。仍テ執達如レ件ノ。

正平五年十二月十三日

左京權大夫正雄奉

謹上 足利左兵衛督入道殿

とぞなされける。これぞ誠に君臣永く不快の基、兄弟忽ち向背の初めと覺えて、あさましかりし世間なり。

卷第二十九

宮方京攻めの事

- 宮方 天皇方。南朝方。
- 洛中邊土 京中や片田舎。
- 面々に 各自に。
- 謳歌の説 風聞。
- 頻並 頻繁。
- 左右 さかくの返事。
- 觀應二年 南朝の正平六年。

暫時の智謀事成りしかば、三條左兵衛督入道慧源と吉野殿と御合體あつて、慧源は大和の越智が許に坐しければ、和田、楠を始めとして大和、河内、和泉、紀伊國の宮方ども、我もくと三條殿に馳せ参る。これのみならず、洛中邊土の武士共も、面々に参ると聞えしかば、無貳の將軍方にて、楠退治の爲に、石河河原に向城を取つて居られたりける畠山阿波將監國清も、其の勢千餘騎にて馳せ参る。謳歌の説巷に満ちて、南方の勢已に京へ寄すると聞えければ、京都の警固にておはしける宰相中將義詮朝臣より早馬を立てて、備前の福岡に、將軍九州下向の爲とて坐しける所へ、急を告げらる、事頻並也。これに依つて將軍より飛脚を以て、越後守師泰が、石見の三角城退治せんとて居たりけるを、其の國は免も角もあれ、先づ京都一大事なれば、夜を日に繼いで上洛すべき由を告げられける。飛脚の行き歸る程日數を経ければ、師泰が参否の左右を待つまでもなしとて、將軍急ぎ福岡を立て、二千餘騎にて上洛し給ふ。入道左兵衛督此の由を聞きて、さらば京都に勢のつかぬ前に、先づ義詮を攻め落せとて、觀應二年正月七日、七千餘騎にて八幡山に陣を取

- 相催し 徵集し。
- 夜を日に繼ぎて 晝夜兼行で。
- 橋 雪の時はくはきもの。
- 著到をつけて 軍勢の到着を帳簿に註して。

- 宗徒の人々 主たつた人々。
- 事故なく 無事に
- 御開き候ひて 御退きあつて。

る。桃井右馬權頭直常、其の頃越中の守護にて在國したりけるが、かねて相圖を定めたりければ、同じき正月八日越中を立つて、能登、加賀、越前の勢を相催し、七千餘騎にて夜を日に繼いで攻め上る。折節雪夥しく降つて、馬の足も立たざりければ、兵を皆馬より下し、橋を懸けさせ、二萬餘人を前に立てて、道を踏ませて過ぎたるに、山の雪氷つて鏡の如くなれば、中々馬の蹄を勞せずして、七里半の山中をば馬人容易く越えはてて、比叡山の東坂本にぞ著きにける。足利宰相中將義詮は其の比京都におはしけるが、八幡山、比叡坂本に大敵をうけて、油斷すべきにあらず、著到をつけて勢を見よとて、正月八日より、日々に著到をつけられけり。初日は三萬騎と註したりけるが、翌日は一萬騎に減ず。翌日は二千騎になる。これは如何様御方の軍勢敵になると覺ゆるぞ。道々に關を居るよとて、淀、赤井、今道、關山に關を居るたれば、關守ともに打連れて、我もくと敵に馳せつきける程に、同じき十二日の暮程には、御内外様の御勢五百騎に足らずとぞ註したる。さる程に十三日の夜より、桃井山上に陣を取りぬと見えて、大箒を焼けば、八幡山にも相圖の箒を焼き續けたり。これを見て、仁木細川以下宗徒の人々評定あつて、「合戦は始終の勝こそ肝要にて候へ。この小勢にてかの大敵にあはんこと、千に一つも勝つことを得がたく覺え候。其の上將軍已に西國より御上り候なれば、今は攝津國邊にも著かせたまひて候らん。たゞ京都を事故なく御開き候て、將軍の御勢と一つになり、則ち京都へ寄せられ

○思ふ圖に 思ひ通り。

○天台山 比叡山。

○入洛 入京。

○欺かざる 侮らない。

○狼藉 亂暴。

○一定 きつこ。

○擬議 猶豫。

○所存 考へ。

○料簡 考へ。

候はば、などか思ふ圖に合戦一度せでは候べき。」と申されければ、義詮卿、義は宜しきに從ふに如かじ。」とて、正月十五日の早旦に、西國を差して落ち給へば、同じき日の午の刻に、桃井都へ入りかはる。治承の古平家都を落ちたりしかども、木曾は猶天台山に陣を取つて十一日まで都へ入らず。これ全く入洛を急がざるにあらず、敵を欺かざる故なり。又は軍勢の狼藉を静めん爲なりき。武畧に長せる人は、慎む處斯様にこそ堅かるべけれ。今直常敵の落ちぬといへばとて、人に兵糧をもつかはせず、馬に糠をもかはせず、楚忽に都へ入り替る事其の要何事ぞや。敵若し僞つて引退き、卻つて寄せ來ることあらば、直常一定打負けぬといはぬ人こそなかりけれ。又桃井を引く者は、敵御方勝負を決すべきならば、争でか敵を欺かざるべき。未だ落ちぬ先にも入洛すべし。まして敵落ちなば、何しにすこしも擬議すべき。如何にも入洛を急ぎてこそ、日比の所存も達しぬべけれ。若し敵僞つて引退き、又歸り寄する事あらば、京都にて骸を曝したらん事何か苦しかるべき。又軍勢の狼藉は、入洛の遅速に依るべからず。其の上深き料簡もおはすらんと、申す族も多かりけり。

將軍上洛の事附阿保、秋山河原軍の事

義詮心細く都を落ちて、桂河を打渡り、向明神を南へ打過ぎさせ給はんとするところ

○窮子の他國より云 法華經の信解品に見ゆ。

○將軍父子 尊氏と義詮。

○今比叡 妙法院の邊で阿彌陀峯の麓。

○河原 賀茂の河原

に、物集女の前西岡の東西に當りて、馬煙夥しく立つて、勢の多少は未だ見え、旗二三十旒翻して、小松原より懸け出でたり。義詮馬を控へて、これは若し八幡より搦手に廻る敵にてやあるらん。」とて、先づ人を見せに遣はされたれば、八幡の敵にてはあらで、將軍と武藏守師直、山陽道の勢を驅り具し、二萬餘騎を率して上洛し給ふにてぞありける。義詮を始め奉つて、諸軍勢に至るまで、唯窮子の他國より歸つて、父の長者に逢へるが如く、悦びあふこと限りなし。さらば臆て取つて返して洛中へ打寄せ、桃井を攻め落せと、將軍父子の御勢都合二萬餘騎を桂川より三手に分けて、大手は武藏守を大將として、仁木兵部大輔頼章、舍弟右馬權助義長、細川阿波將監清氏、今川駿河守、五千餘騎四條を東へ押寄する。佐々木佐渡判官入道は、手勢七百餘騎を引分けて、東寺の前を東へ打通りて、今比叡の邊に控へ、大手の合戦半ばならん時、思ひも寄らぬ方より、敵の後へ懸け出でんと、旗竿を引側め笠符を巻き隠し、東山へ打上る。將軍と宰相中將殿は、一萬餘騎を一手に合はせ、大宮をのほりに打通り、二條を東へ法勝寺の前に打出でんと、相圖を定めて寄せ給ふ。これは桃井東山に陣を取りたりと聞きければ、四條より寄する勢に向つて、合戦は定めて河原にてぞあらんすらん。御方僞つて京中へ引退かば、桃井定めて勝つに乗つて進まんか。其の時道譽桃井が陣の後へ驅け出でて、不意に戦ひを致さば前後の大敵に遮られて、進退度を失はん時、將軍の大勢北白河へ驅け出でて、敵の後へ廻る程ならば、桃井

○引かではやはか戦ふも退かずしてはさうして戦ひ得ようや。
 ○骨箱 蝶番ひを以て折り畳み出来るやうにした箱。

○懸引き 進退。

○母衣 背に負うて矢を防ぐもの。

○先途 大切の所。

○五枚兜 鎧五枚の兜。

○鐵形 兜の前立て

○石突 端の金具。

○白瓦毛 黄に白みの勝つた毛色。

○こまぐしき 仰山な。

猛しといふとも引かではやはか戦ふと、謀を廻らす處なり。案の如く中の手大宮にて旗を下して、直に四條河原へ驅け出でたれば、桃井は東山を後にあて賀茂河を前に界ひて、赤旗一揆、扇一揆、鈴附一揆、二千餘騎を三所に控へて、射手をば面に進ませ、骨箱二三百帖つき並べて、敵か、らば共に懸り合ひて、廣みにて勝負を決せんと、静まり返つて待ちかけたなり。兩陣旗を上げて、鬨の聲をば揚げたれども、寄手は搦手の勢の相圖を待つて未だ懸らず。桃井は八幡の勢の攻め寄せん程を待つて、態と事を延ばさんとす。互に勇氣を勵ます程に、或は五騎十騎馬を驅け居る驅け廻し、懸引き自在に當らんと、馬を乗り浮ぶるもあり。或は母衣袋より母衣取出して、爰を先途の戦ひと思へる氣色顯はれて、最後と出で立つ人もあり。斯かる處に、桃井が扇一揆の中より、長七尺許りなる男の、ひけ黒に血眼なるが、緋緘の鎧に五枚兜の緒を締め、鐵形の間に、紅の扇の月日出したるを残らず開いて夕陽に耀かし、檜木の棒の一丈餘りに見えたるを、八角に削つて兩方に石突入れ、右の小脇に引側めて、白瓦毛なる馬の太く逞しきに、白沫かませて、唯一騎河原面に進み出でて、高聲に申しけるは、「戰場に臨む人ごとに、討死を志さずといふ者なし。然れども今日の合戦には、光政殊更死を輕んじて、日來の廣言を實にもと人にいはれんと存するなり。其の名人に知らるべき身にて候はぬ間、餘りにことぐしき様に候へども名字を申すにて候なり。これは清和源氏の後胤に、秋山新藏人光政と申すものにて候。王

○弓箭 弓矢。

○黄石公子房に云々 黄石公が張良に兵書を授けたこと云ふ。

○手柄 手なみ。

○連錢葦毛 葦毛に錢を並べたやうな紋のある毛色。

○鱗 魚鱗。

氏を出でて遠からずといへども、己に武畧の家に生れて、數代唯弓箭を把つて、名を高くせん事を存せし間、幼稚の昔より長年の今に至るまで、兵法を弄び嗜む事隙なし。但し黄石公子房に授けし所は、天下のためにして、匹夫の勇にあらざれば、吾未だ學ばず、鞍馬の奥僧正谷にて愛宕高雄の天狗共が、九郎判官義經に授けし所の兵法に於ては、光政これを残らず傳へ得たる處なり。仁木細川高家の御中に、吾と思はん人々名のつてこれへ御出で候へ。花やかなる打物して見物の衆の睡り醒さん。」と呼ばはつて、勢ひ傍を拂つて西頭に馬をぞ控へたる。仁木、細川、武藏守が内に、手柄を顯はし名を知られたる兵多しと雖も、如何思ひけん、互に目を賦つて我これに懸け合つて勝負をせんといふ者もなかりける處に、丹の黨に阿保肥前守忠實といひける兵、連錢葦毛なる馬に厚總懸けて、唐綾緘の鎧龍頭の兜の緒を締め、四尺六寸の貝鎧の太刀を抜いて、鞘をば河中へ投げ入れ、三尺二寸の豹の皮の尻鞘かけたる金作りの小太刀帶き副へて、唯一騎大勢の中より懸け出でて、「事珍らしく耳に立てても承る秋山殿の御詞かな。これは執事の御内に阿保肥前守忠實と申す者にて候。幼稚の昔より東國に居住して、明暮は野山の獸を追ひ、江河の鱗を漁つて業とせし間、張良が一卷の書をも呉氏孫氏が傳へし所をも、曾て名をだに聞かず。されども變化時に應じて敵の爲に氣を發する處は、勇士の己と心に得る道なれば、元弘建武以後三百餘箇度の合戦に、敵を靡け御方を助け、強きを破り堅きを砕く事その數を知ら

○白引の精兵 矢を番うて射す唯口頭で強弓を誇る兵。

○相近 両方から近づくこと。

○弓手 左手。

○馬手 右手。

○打物 刀太刀類。

○矢面 矢の飛び来る正面。

○はさら繪 粗末な繪。

○白河 洛東。

す、白引の精兵、畠水練の言におづる人あらじ。忠實が手柄の程試みて後、左様の廣言をば吐き給へ。」と高らかに呼ばはりて、閑々と馬をぞ歩ませたる。兩陣の兵あれ見よとて、軍を止めて手を拳る。數萬の見物衆は、戰場ともいはず走り寄つて、かたづを呑みてこれを見る。誠に今日の軍の花は、唯これに如かじとぞ見えたりける。相近になれば阿保と秋山とにつこと打笑ひて、弓手に驅け違へ馬手に開き合つて、秋山はたと打てば、阿保うけ太刀になつて請け流す。阿保持つて開いてしとと切れれば、秋山棒にて打ち側く。三度逢ひ三度別ると見えしかば、秋山は棒を五尺ばかり切り折られて、手本僅かに残り、阿保は太刀を鐔本より打折られて、帶添の小太刀ばかり憑みたり。武藏守これを見て、「忠實は打物取つて手はききたれども、力量なき者なれば、力増りに逢ひて始終は叶はじと覺ゆるぞ、あれ討たすな。秋山を射て落せ。」とぞ下知せらる。究竟の精兵七八人河原面に立渡つて、雨の降るが如く散々に射る。秋山件の棒を以て、只中を指して當る矢二十筋まで打落す。忠實も情ある者なりければ、今は秋山を討たんとせせず、剩へ御方より射る矢を制して矢面にこそ塞りけれ。斯かる名人を無代に射殺さんする事を惜しみて、制しけるこそやさしけれ。かくて兩方打退きて、諸人の目をぞさましける。されば其の比、靈佛靈社の御手向、扇團扇のばさら繪にも、阿保秋山が河原軍とて書かせぬ人はなし。其の後合戦始まつて、桃井が七千餘騎、仁木細川が一萬餘騎と、白河を西へまくり東へ追ひ靡け、七八度が

○あらけて 別れ別れになつて。

○引色 負け色。

○羽林 唐の官名でわが左右近衛府に當る。こゝは左近衛中將義詮を指す。

○東坂本 比叡山の東麓。

程驅け合ひたるに、討たる、者三百人、創を被る者數を知らず。兩陣互に戦ひ屈して馬を控へて息を繼ぐ處に、かねての相圖を守つて、佐々木判官入道道譽七百餘騎にて、思ひも寄らぬ中靈山の南より、関をどつと作つて桃井が陣の後へ驅け出でたり。桃井が兵これに驚きあらけて、二手に分けて相戦ふ。桃井は西南の敵に破り立てられて、兵引色に見えける間、兄弟二人わざと馬より飛んで下り、敷皮の上に著座して、「運は天にあり、一足も引く事あるべからず。唯討死をせよ。」とぞ下知しける。去る程に日已に夕陽に及んで、戦ひ數刻になりぬれども、八幡の大勢は曾て攻め合はせず、北國の兵氣疲れて暫く東山に引上けんとしける處に、將軍竝に羽林の兩勢五千餘騎、二條を東へ驅け出でて、桃井を山上へ又引返させじと、跡を隔ててぞ取巻きける。桃井終日の合戦に入り替る勢もなく、戦ひ疲れたる上、三方の大敵にかこまれて、叶はじと思ひけん、粟田口を東へ山科越に引いて行く。されども尙東坂本までは引返さず、其の夜は關山に陣を取つて、大篝を燒きてぞ居たりける。

將軍親子御退失の事附井原石窟の事

將軍都へ立歸り給ひて、桃井合戦に打負けぬれば、今は八幡の御敵共も、大畧將軍へぞ馳せ參らんと、諸人推量を廻らして、今はかうと思はれけるに、案に相違して、十五日の

○膝合はせてしめし合はせて。

○吉凶は糺へる繩の如く、文選二十卷に「吉凶如糾繩、憂喜相紛擾。」

○東嶺、京都の東山、井原石籠、丹波國、井原郷にある。

○輪島の織云々、高く飛ぶ鳥が誤つて絲にかつたが幸に絲から逃れ出たといふ意。

○相公、尊氏を指す。○座さまさず、不斷に護摩を焼いて祈ること。僧座の常に温まれる故である。

夜半ばかりに、京都の勢大半落ちて八幡の勢にぞ加はりける。「こはそも何事ぞ。戦ひに利あれば、御方の兵、彌敵になる事は、能く早尊氏を背く者多かりける。かくては洛中にて再び戦ひを致し難し。暫く西國の方へ引退いて、中國の勢を催し、東國の者共に牒じ合はせて、卻つて敵を攻めばや。」と、將軍頻りに仰せあれば、諸人「然るべく覺え候。」と同じて、正月十六日の早旦に丹波路を西へ落ち給ふ。昨日は將軍都に立歸つて桃井戦ひに負けしかば、洛中にはこれを悦び八幡には聞いて悲しむ。今日は又將軍都を落ち給ひて桃井戦ひに入り替ると聞えしかば、八幡にはこれを悦び洛中には潛に悲しむ。吉凶は糺へる繩の如く、哀樂時を易へたり。何を悦び何事を歎くべしとも定めずして、將軍は昨日都を東嶺の曉に霞と共に立隔たり、今日は旅を山陰の夕の雲に引別れて、西國へと赴き給ひけるが、名將一處に集まらんことは計畧なきに似たりとて、御子息宰相中將殿に、仁木左京大夫頼章、舍弟右京大夫義長を相副へて二千餘騎、丹波の井原石籠に留めらる。此の寺の衆徒、元來無貳の志を存せしかば、軍勢の兵糧、馬の糠藁に至るまで、山の如く積み上げたり。此の所は岩高く峯聳えて、四方皆峻嶒なれば、城郭の便りも心安く覺えたる上、萩野、波伯部、久下、長澤、一人も残らず馳せ參つて、日夜の用心隙なかりければ、他日窮困の軍勢共、唯翰鳥の繳を出でて鰻魚の水を得たるが如くにて、暫く心をぞ休めける。相公登山し給ひし日より、岩籠寺の衆徒、座さまさずに勝軍毘沙門の法をぞ行ひける。七日に

○薩埵、菩薩。佛果を能求する人。

○利生方便、衆生を利益する手段。

○須彌、須彌山。○鬼門、東北隅。○摧伏、勢を摧いて伏せしめること。○御宇、御代。

○有司、官人。

○天台山、比叡山。

當りたりし日、當寺の院主雲曉僧都、卷数を捧けて參りたり。相公則ち僧都に對面し給ひて、當寺開山の事の起り、本尊靈驗を顯はし給ひし様など、様々問ひ給ひける次に、「さても何れの薩埵を歸敬し、如何なる秘法を修してか、天下を鎮め大敵を亡ぼす要術に叶ひ候べき。」と宣ひければ、雲曉僧都畏まつて申しけるは、「凡そ、諸佛薩埵の利生方便區々にして、彼を是し此を非するおほえ、應用無邊に候へば、何れを優り何れを劣りたりとは申し難く候へども、須彌の四方を領して、鬼門の方を守護し、摧伏の形を現じて、専ら勝軍の利を施し給ふ事は、毘沙門の徳に若くは候べからず。これ我が寺の本尊にて候へばとて、謂れなく申すにて候はず。古、玄宗皇帝の御宇、天寶十二年に安西と申す所に軍起つて、數萬の官軍戦ふ度毎に打負けずといふ事なし。『今は人力の及ぶ處にあらす如何すべき。』と玄宗有司に問ひ給ふに、皆同じく答へて申さく、「これ誠に天の擁護に係らざるは鎮むる事を得難し。唯不空三藏を召されて、大法を行はせらるべきか。」と申しける間、帝則ち不空三藏を召して毘沙門の法を行はせられるに、一夜の中に鐵の牙ある金鼠百萬安西に出で来て、謀叛人の太刀、刀、甲冑、矢の筈、弓の弦に至るまで、一つも残らず食ひ破り食ひ切り、剩へ人をさへ咀み殺し候ひける程に、兇徒これを防ぎかねて、首をのべて軍門に降りしかば、官軍矢の一つをも射ずして若干の賊徒を平らけ候ひき。又吾が朝には朱雀院の御宇に、金銅の四天王を天台山上に安置し奉つて、將門を亡ぼされぬ。聖德太子毘沙門

の像を刻んで、兜の眞甲に戴きて、守屋の逆臣を誅せらる。此等の奇特世の知る處、人の仰ぐ處にて候へば、御不審あるべきにあらず。然るに今武將幸ひに多門示現の靈地に御陣を召され候事、古の佳例に違ふまじきにて候へば、天下を一時に鎮められて、敵軍を千里の外に掃はれ候はん事、何の疑ひか候べき。」と、誠に憑もしけに申されたりければ、相公信心を發されて、丹波國小川莊を寄附せられ、永代の寺領にぞなされける。

越後守石見より引返す事

越後守師泰は、此の時まで三角城を退治せんとて猶石見國に居たりけるを、師直が許より飛脚を立てて、「攝津國播磨の間に合戦事已に急なり。早く其の國の合戦を聞きて馳せ上らるべし。若し中國の者共斯かる時の弊えに乗つて、道を塞がんする事もやあらんずらんと存じ候間、武藏五郎をかねて備後へ差遣はす。中國の蜂起を鎮めて、待ち申すべし。」とぞ告けたりける。越後守此の使に驚いて石見を立て上れば、武藏五郎其の相圖を違へじと播磨を立て、備後の石崎にぞ著きにける。將軍は八幡比叡山の敵に襲はれて、播磨の書寫坂本へ落ち下り、越後守は三角城を攻めかねて、引退くと聞えしかば、上杉彈正少弼八幡より船路を経て、備後の鞆へあがる。これを聞きて備後、備中、安藝、周防の兵共、我劣らじと馳せつきける程に、其の勢雲霞の如くにて、靡かぬ草木もなかりけり。去る程

○弊えに乗つて 疲に乗じて。

○書寫坂本 姫路の西北一里半、書寫山なり。山中に圓教寺あり。

○魚鱗 縦陣の名。
○鶴翼 横陣の名。
○汗馬 汗を出せる勞馬。
○内兜 兜内。顔面。

に武藏五郎、越後守を待ち附けて、中國には暫しも逗留せず、馳て上洛すと聞えければ、上杉取る物もとありあへず、跡を追つて打留めよとて、その勢二千餘騎、正月十三日の早旦に、草井地より打立つて、跡を追つてぞ寄せにける。越後守は夢にもこれを知らず、片時も行末を急ぐ道なれば、匹馬に鞭を進めて勢山を打越えぬ。小旗一揆、河津、高橋、陶山兄弟は、遙かに後陣に引殿れて、未だ龍山の此方に支へたり。先陣後陣相隔たつて勢の多少も見分かねば、上杉が先懸の五百餘騎、一の後陣に打ちける陶山が百餘騎の勢を目に懸けて、楯の端を敲いて関を作る。陶山元來軍の陣に臨む時、假にも人に後を見せぬ者共なれば、関の聲を合はせて、矢一筋射違ふるほどこそあれ、大勢の中へ懸け入つて攻めければ、魚鱗鶴翼の陣、旌旗電戟の光、須臾に變化して、萬方に相當れば、野草紅に染みて汗馬の蹄血を蹴たて、河水派せかれて、士卒の骸忽ち流れを絶つ。斯かりけれども、前陣は隔たつて知らず、後陣には續く御方もなし。唯今を限りと戦ひけるほどに、陶山又次郎高直、脇の下、内兜、吹返しの迦れ、三所突かれて討たれにけり。弟の又五郎これを見て、哀れよからんずる敵に組んで、刺し違へばやと思ふ處に、火絨の鎧に紅の母衣懸けたる武者一騎、相近に寄り合ひたり。「誰ぞ。」と問へば、土屋平三と名のる。陶山莞爾と笑ひて、「敵をば嫌ふまじ、よれ組まん。」といふ儘に、引組んで二匹が中へどうと落つる。落ちつく處にて陶山上になりければ、土屋を取つて押へて頸をかかんとするを見て、道口七郎

○ねぢ頸 刀を用る
ず頸をねぢ切るこ
○ひつしきの板 鎧
の後の革筋。

○逸物 普通には名
馬だがこゝは好都合
の意。

○深手 重傷。

○念なく 容易に。

落ち合つて陶山が上に乗懸る。陶山下なる土屋をば左の手に押へ、上なる道口をかい搦んで、ねぢ頸にせんと振り返つて見ける處を、道口が郎等落ち重なつて陶山がひつしきの板を疊み上げ、あけ様に三刀刺したりければ、道口土屋は助かつて陶山は命を止めたり。陶山が一族郎等これを見て、「何の爲に命を惜しむべき」とて、長谷與一、原八郎左衛門、小池新兵衛以下の一族若黨共、大勢の中へ破つては入り、破つては入り、一足も引かず皆切死にこそ死ににけれ。上杉若干の手の者を打たせながら、後陣の軍には勝ちにけり。宮下野守兼信は、初め七十騎にて中の手にありけるが、後陣の軍に御方打負けぬと聞いて、何時の間にか落ち失せけん、唯六騎になりにけり。兼信四方を屹と見て、「よし／＼有るにかひなき大臆病の奴原は、足纏ひになるに、落ち失せたるこそ逸物なれ。敵未だ人馬の息を休めぬ前に、いざやか、らん。」といふまゝに、六騎馬の鼻を雙べて驅け入る。これを見て、小旗一揆に、河津、高橋、五百餘騎喚いて懸りける程に、上杉が大勢跡より引き立つて一度も遂に返さず、混引きに引きける間、上杉深手を負ふのみにあらず、討たる、兵三百餘騎、劔を蒙る者數を知らず。其の道二里が間には、鎧、腹巻、小手、脇當、弓矢、太刀、刀を捨てたること、足の踏み所もなかりけり。備中の合戦には、越後守師泰念なく打勝ちぬ。これより播磨までは、道のほど異なる事あらじと思ふ所に、美作國の住人、埴和角田の者共相集まつて七百餘騎、杉坂の道を切り塞いで、越後守を打留めんとす。たゞ

今備中の軍に打勝つて、勢ひ天地を凌ぐ河津高橋が兩一揆、一矢をも射させず、抜きつれて懸りける程に、敵一たまりもたまらず、谷底へまくり落されて、大畧皆討たれにけり。兩國の軍に事故なく打勝つて、越後守師泰、武藏五郎師夏、喜悅の眉を開き、觀應二年二月一日に、將軍の陣を取つておはしける書寫坂本へ馳せ參る。

光明寺合戦の事附師直怪異の事

去る程に八幡より、石堂右馬權頭を大將にて、愛會伊勢守、矢野遠江守以下五千餘騎にて書寫坂本へ寄せんとて下向しけるが、書寫坂本へは越後守が大勢にて著きたる由を聞いて、播磨の光明寺に陣を取つて、尙八幡へ勢をぞおはれける。將軍此の由を聞き給ひて、光明寺に勢をつけぬ前に、先づこれを打散らさんとて、同じき三月三日將軍書寫坂本を打立つて、一萬餘騎の勢を率し、光明寺の四方を取巻き給ふ。石堂城を堅めて光明寺に籠りしかば、將軍は引尾に陣を取り、師直は泣尾に陣をとる。名詮自性の理、寄手のため、何れも忌々しくこそ聞えけれ。同じき四日より矢合して、寄手高倉の尾より攻め上れば、愛會は二王堂の前に支へて相戦ふ。城中には死生知らずのあふれ者共、此を先途と命を捨てて戦ふ。寄手は功高く祿重き大名共が、唯御方の大勢を憑むばかりにて、誠に吾一大事と思ひ入つたる事なければ、毎日の軍に、城の中勝つに乗らずといふ事なし。赤松律

○石堂右馬權頭 頼房。
○愛會伊勢守 遠充
○矢野遠江守 行泰
○名詮自性の理 唯識論の文で名は本来自性の體を顯はす理引尾泣尾の名の忌はしいことを言ふ。
○矢合 開戦の合圖に互に射合ふ矢。
○あふれ者 無賴漢
○先途 大切な所。

○景嗣 行景の弟。

○心落ちに落ちんずる 臆した心が生じて攻めないのに城を落ちようとする。

○あらあつや あつや。熱や。

○三熱の焰 食、腹、痰の三つ。

○閻伽井 閻伽は佛に供すべき水。

○はか／＼しからじ はき／＼と行くまゝ。

師則祐は、七百餘騎にて泣尾へ向ひたりけるが、遙かに城の體を見て、「敵は無勢なりけるを、一攻め攻めて見よ。」と下知しければ、浦上七郎兵衛行景、同五郎左衛門景嗣、吉田彈正忠盛清、長田民部承資真、菅野五郎左衛門景文、さしも岨しき泣尾の坂を攻め上つて、垣楯の際まで著きたりける。此の時に自餘の道々よりも寄手同時に攻め上る程ならば、城をば一息に攻め落すべかりしを、何となくとも今宵か明日か心落ちに落ちんずる城を骨折に攻めては何かすべきとて、數萬の寄手徒らに見物して居たりければ、浦上七郎兵衛を始めとして、攻め入る寄手一人も残らず垣楯の下に射伏せられて、元の陣へぞ引返しける。手合の合戦に敵を退けて城中聊か氣を得たりといへども、寄手は大勢なり、城の構へ未だ拵へず、始終如何あるべからんと、石堂上杉安き心もなかりける處に、伊勢の愛曾が召使ひける童一人、俄に物に狂ひて、十丈許り飛び上りて跳りけるが、「吾に伊勢大神宮乗り居させ給ひて、此の城守護のために、三本杉の上に御座あり。寄手縱令如何なる大勢なりとも、吾かくてあらん程は城を落さる、事あるべからず。悪行身を責め、師直師泰等、今七日が中に滅びんずるをば知らずや。あらあつや堪へ難や。いで三熱の焰さまさん。」とて、閻伽井の中へ飛び漬りたれば、實にも閻伽井の水湧き返つてわかせる湯の如し。城中の人人これを聞きて渴仰の首を傾けずといふ事なし。寄手の赤松律師も此の事を傳へ聞きて、さては此の軍はか／＼しからじと、氣に障りて思ひける處に、子息肥前權守朝範が、兜を

○あり難し 難い。

○一人もすく時は 一人でも滅する時は 巽 東南。

○翩翩 ひるがへるさま。

枕にして少しまどろみたる夢に、寄手一萬餘騎同時に垣楯の際に寄せて火をかけしかば、八幡山金峯山の方より、山鳩數千飛び來つて翅を水に浸して、櫓垣楯に燃えつく火を打消すとぞ見えたりける。朝範聽て此の夢を則祐に語る。則祐これを聞きて、「さればこそ此の城を攻め落さん事あり難しと思ひつるが、果して神明の擁護ありけり。哀れ事の難儀にならぬ前に引きて歸らばや。」と思ひける處に、美作より敵起つて、赤松へ寄する由聞えければ、則祐光明寺の陣を捨てて白旗城へ歸りにけり。軍の習ひ、一騎も勢の加はる時には人の心勇み、一人もすく時は、兵の氣たのむ習ひなれば、寄手の勢次第に減するを見て、武藏守が兵共彌軍懈つて、皆帷幕の中に休息して居たりける處に、巽の方より怪しげなる雲一羣立出でて風に隨つて飛揚す。百千萬の鳶鳥其の下に飛び散つて、雲居る山の風早み、散り亂れたる木の葉の空にのみして行くが如し。近づくに隨つてこれを見れば、雲にも霞にもあらず、無文の白旗一旒天より飛び降るにてぞありける。これは八幡大菩薩の擁護の手を加へ給ふ奇瑞なり。此の旗の落ち留まらんずる方ぞ軍には打勝たんずらんとて、寄手も城中も手を又へ禮をなして、祈念を致さずといふ人なし。此の旗城の上に飛び上り飛び下りて暫く翩翩しけるが、梢の風に吹かれて又寄手の上に翻る。數萬の軍勢頭を地に著けて、吾が陣に天降らせ給へと信心を凝す處に、飛鳥十方に飛び散つて、旗は忽ちに師直が幕の中にぞ落ちたりける。諸人同じく見て、「めでたし。」と感じける聲、暫しは靜ま

○みながら 皆ながら、残らずすべて。

りも得ざりけり。師直兜を脱いで、左の袖に受け留め、三度禮して委しくこれを見れば、旗にはあらで、何ともなき反古を三三枚續ぎ集めて、裏に二首の歌をぞ書きたりける。吉野山峯のあらしのはけしさに高きこすゑの花ぞちりゆく

限りあれば秋も暮れぬと武藏野の草はみながら霜がれにけり

師直傍の人に、「此の歌の吉凶何れぞ。」と問ひければ、聞く人ごとに、あなあさましや、高き梢の花ぞ散り行くとあるは、高家の人亡ぶべき事にやあるらん。然も吉野山峯の嵐のはけしさにとあるも、先年藏王堂を焼かれたりし罪、一人にや歸すらん。武藏野の草はみながら霜枯れにけりとあるも、名字の國なれば、旁以て不吉なる歌と、忌々しくは思ひけれども、「めでたき歌どもにてこそ候へ。」とぞ會釋しける。

小清水合戦の事附瑞夢の事

去る程に其の日の暮程に、攝津國の守護赤松信濃守範資、使者を以て申しけるは、「八幡より石堂中務大輔、畠山阿波守國清、上杉藏人大夫を大將にて、七千餘騎を光明寺の後攻のためにとて、差下さるゝなり。前には光明寺の城堅く守つて、後に新手的大敵か、りなば、ゆゑしき御大事にて候べし。たゞ先づ其の城をばさしおかれ候て、討手の下向を相支へ、神尾、十林寺、小清水の邊にて御合戦候はば、敵の敗北疑ふ處にあらず。御方一戦

○上杉藏人大夫 義依。

○後攻 後詰め。

○荒手 新手。

○ゆゑしき 甚しき

○平場 平野。

○執事兄弟 師直と師泰。

○御立ち 御出立。

○湯山 攝津國有馬の温泉のある山。

○上杉左馬助 朝房

○御影道 攝津國。

○自餘の それ以外

○雀松原 武庫町近くの松原。

に利を得ば、敵所々に軍すといふとも、いつまでか休へ候べき。これ唯一舉に戦ひを決して、萬方に勝つ事を計る處にて候べし」と、追ひく早馬を打たせて、一日に三度までこそ申されけれ。將軍を始め奉つて師直師泰に至るまで、實にも聞ゆる如くならば、敵は小勢なり、御方はこれに十倍せり。岨しき山の城を攻むればこそ叶はね、平場に懸け合つて勝負を決せんに、御方勝たすといふ事あるべからず。さらば此の城を開きて、先づ向うなる敵に懸れとて、二月十三日、將軍も執事兄弟も、光明寺の麓を御立ちあつて兵庫の湊川へ馳せ向はる。畠山阿波守國清は、三千餘騎にて播磨の東條にありけるが、此のことを聞いて、さては何處にてもあれ、執事兄弟のあらん所へこそ向はめとて、湯山を南へ打越えて、打出の北なる小山に陣をとる。光明寺に楯籠りける石堂右馬頭、上杉左馬助も光明寺をば打捨てて皆畠山が陣へ馳せ加はる。同じき十七日の夜、將軍執事の勢二萬餘騎御影濱に押寄せ、追手搦手二手に分けらる。「軍は追手より始めて戦ひ半ばならん時、搦手の濱の南より押寄せて、敵を中に取籠めよ。」と下知せられける。薬師寺次郎左衛門公義は、今度の戦ひ如何様大勢を憑みて御方爲損じぬと思ひければ、いよく我が大事と氣を勵ましけるにや、自餘の勢に紛れじと、絹三幅を長さ五尺に縫ひ合はせて、兩方に赤き手を著けたる旗をぞ差したりける。一族の手勢二百餘騎、雀松原の木陰に控へて、追手の軍今や始まると待つ處に、かねての相圖なれば、河津左衛門氏明、高橋中務英光、大旗一揆の六

○平頸 馬の前足から頸に至る迄の間。
○草わき 馬の胸のあたり。

○手負 負傷者。
○鞭に鐙を合はせて 鞭に鐙を合はせて用ゐる。馬を急がす事。
○御方 味方。

千餘騎、畠山が陣へ押寄せて関を作る。畠山が兵静まり返つて、態と関の聲も合はせず、此處の藪陰、彼處の木陰に立ち隠れて、指攻め引攻め散々に射けるに、面に立つ寄手數百人、馬より眞倒に射落されければ、後陣は引足になつて進み得ず。河津左衛門これを見て、「矢軍ばかりにては叶ふまじきぞ、抜いて懸れ。」と下知して、弓をば藪へがらりと投げ棄てて、三尺七寸の太刀を抜いて、敵の羣りたる中へ會釋もなく驅け入らんと、一段高き岸の上へ驅け上りける處に、十方より鏃を汰へて射ける矢に、馬の平頸草わき、弓手の小肘、右の膝口、四所まで篤深に射られて、馬は小膝を折つてどうと伏す。乗手は朱になつて下り立ちたり。これを見て畠山が二百餘騎喚いて懸りければ、跡に控へたる寄手の大勢共新手を入れ替へて戦はんとせず、手負を助けんとせず、鞭に鐙を合はせて一度にばつとぞ引きたりける。石堂右馬頭が陣は、是より十餘町を隔てたれば、未だ御方の打勝つたるをも知らず、「打出濱に旗の三旋見えたるは、敵か御方か見て歸れ。」といはれければ、原三郎左衛門義實只一騎、馳せ向つてこれを見るに、三幅の小旗に赤き手を兩方に著けたり。さては敵なりと見課せて馳せ歸りけるが、徒らに馬の足を疲らかさじと思ひけん、扇を舉げて御方の勢をさし招き、「濱の南に控へたる勢は敵にて候ぞ。しかも追手の軍は御方打勝ちたりと見え候。早懸らせ給へ。」と、聲を舉げてぞ呼ばはりける。元より氣早なる石堂上杉の兵共、これを聞いて何かは少しも思惟すべき。七百餘騎の兵共、馬の轡を

○藤田小次郎 頼定
○猪俣彈正左衛門 行法。

○其の末 其の子孫

並べて喚いて懸りけるに、薬師寺が跡に控へたる執事兄弟の大勢共、未だ矢の一つをも射懸けられず、捨鞭を打つてぞ逃けたりける。梶原孫六、同彈正忠二人は追手の勢の中にあつて、心ならず御方に引立てられ六七町落ちたりけるが、後代の名をや恥ぢたりけん、唯二騎引返して大勢の中へ懸け入る。暫しが程は二人一所にて戦ひけるが、後には別々になつて、唯命を限りとぞ戦ひける。孫六は敵三騎切つて落して、裏へつと懸け抜けたる。續く御方もなく、又見とがむる敵もなかりければ、紛れて助からんと思ひて、笠符を取つて袖の下に收め、西宮へ打通つて、夜に入りければ、小船に乗つて將軍の陣へぞまゐりける。彈正忠は偏に敵に紛れもせず、懸け入りては戦ひく、七八度まで馬煙を立てて戦ひけるが、藤田小次郎と猪俣彈正左衛門と、二騎に取籠められて討たれにけり。後に「あはれ剛の者や、誰といふものならん。名字を知らばや。」とてこれを見るに、梅花を一枝折つて箆の上に著けたり。さては元暦の古、一谷の合戦に、二度の懸して名を揚けし梶原平三景時が、其の末にてぞあるらんと、名のらで名をぞ知られる。薬師寺二郎左衛門公義は御方の追手搦手二萬餘騎、崩れ懸つて引けども少しも騒がず、二百五十騎の勢にて、石堂上杉が七百餘騎の勢を山際までまくりつけて、續く御方を待つ處に、一騎も控へたる兵なければ、又浪打際に控へて居たるに、石堂畠山が大勢共、「手著けたる旗は薬師寺と見ゆるぞ、一人も餘すな。」とて追つ懸けたり。公義が二百五十騎、敵後に近附けば、一度に

○已上 以上。
 ○輪違 高家の紋。
 ○松田左近將監 重明。
 ○抜き連れて 太刀を抜身にした大勢が一緒に。

○天地各別 天地隔絶の差。
 ○念なく たやすく

馬を屹と引返して戦ひ、敵先を遮れば、一同にわつと喚いて懸け破り、打出濱の東より御影濱の松原まで、十六度まで返して戦ひけるに、或は討たれ或は敵に驅け散らされ、一所に控へたる勢としては、彈正左衛門義冬、勘解由左衛門義治、已上十六騎になりけり。兵共暫く馬の息を繼がせて傍を屹と見たるに、輪違の笠符著けたる武者一騎、馬を白砂に馳せ倒して、敵七騎に取籠められたり。彈正左衛門義冬これを見て、「これは松田左近將監と覺ゆる。目の前にて討たる、御方を助けずといふ事やあるべき。」とて、六騎抜き連れて懸れば、七騎の敵引退きて松田は命を助かつてけり。松田藥師寺七騎になつて暫し控へたる處に、彼等が手の者共此處彼處より馳せつきて、又百騎許りになりければ、石堂畠山が先懸して兵を三町許り追ひ返したるに、敵も勇氣や疲れけん、其の後よりは追はざりければ、軍はこれにて止みにけり。藥師寺は鎧に立つ處の矢少し折りかけて湊川へ馳せ歸りたれば、敵の旗をだにも見ずして引返しつる二萬餘騎の兵共、勇氣を失ひ、落つる方を求めて、唯泥に酔ひたる魚の小水に息づくに異ならず、さても今日の合戦をつらく案ずるに、勢の多少兵の勝劣、天地各別なり。何事にかこれ程に念なく打負くべき。これ直事に非ずと思ふに合はせて、其の前の夜、武藏五郎、河津左衛門と、少しも替らず二人見たりける夢こそ不思議なれ。所はいづくとも知らず渺々たる平野に、西には師直師泰以下、高家の一族其の郎從數萬騎打集まつて、轡を雙べて控へたり。東には錦小路禪門、石堂

○小守勝手明神 吉野の鎮守。
 ○甲斐の黒駒 甲斐國産の黒駒。
 ○白鞍 銀の鞍。
 ○跡見赤檣 馬子に屬して守屋を殺した人。
 ○秦河勝 聖德太子の臣。
 ○いら、けて 怒らして。

畠山、上杉民部大輔、千餘騎にて相向ふ。兩陣鬩を合はせて、其の戦ひ未だ半ばならざる時、石堂畠山が勢旗を卷いて引退く。師直師泰勝つに乗つて追つ驅くる處に、雲の上より錦の旗一旒差揚げて、勢の程百騎許り驅け出でたり。左右に分れたる大將を誰ぞと見れば、左は吉野の金剛藏王權現、頭に角生ひて八の足ある馬に召されたり。小守勝手明神、金の鎧に鐵の楯を引側めて、馬の前後に従ひ給ふ。右は天王寺の聖德太子、甲斐の黒駒に白鞍置いて召されたり。蘇我馬子大臣甲冑を帶し、妹子大臣、跡見赤檣、秦河勝、弓箭を取つて眞前に進む。師直師泰以下の一族ども、太子の御勢を小勢と見て、中に取籠めて討たんとするに、金剛藏王御目をいら、けて、「あれ射て落せ。」と下知し給へば、小守、勝手、赤檣、河勝、四方に颯と走り散り、同時に引きて放つ矢、師直、師泰、武藏五郎、越後守將監が眉間の眞中を徹して、馬より倒に地を響かして落つると見て、夢は則ち醒めにけり。朝に此の夢を語つて、今日の軍如何あらんずらんと危みけるが、果して軍に打負けぬ。此の後とても、斯くては恐もしくも思はずと、聞く人心に思はぬはなし。此の夢の記録吉野の寺僧所持して、其の隠れなきことなり。

松岡城周章の事

小清水の軍に打負けて、引退く兵二萬餘騎、四方四町に足らぬ松岡城へ、我もくと

○杏の子 杏底にう
った鉦。

○事名づけて かこ
つけて。

○面々に 各自に。

○福良渡 淡路國。

○さび返つて 静ま
りかへつて。

○響庭命鶴 氏直。

○佐竹加賀 利氏。

○限りごさんなれ
限りにこそあるなれ

○小具足 籠手、驅
當の類。

○高豐前五郎 師友。

師直の子。

こみ入りけるほどに、杏の子を打つたるが如くにて、少しも働くべき様もなかりけり。か
くては叶ふまじ、宗徒の人々より外は内へ入るべからずとて、人の郎從若黨たる者は、皆
そとへ追ひ出して、四方の城戸を下したれば、元來落ち心地のつきたる者ども、これに事
名づけて、「悪み甲斐なき執事の有様かな。さては誰が爲にか討死をもすべき。」と、面々に
つぶやきて打連れ、落ち行く。今は定めて路々に敵あつて、落ち得じと思ふ人は、或は
釣する海人に紛れて、破れたる蓑を身に纏ひ、福良渡、淡路の迫門を、船にて落つる人も
あり。或は草刈男に奪れつ、竹の簀を肩にかけ、須磨の上野生田の奥へ、蹠にて逃ぐる
人もあり。運の傾く癖なれども、臆病神のつきたる人程見苦しき者はなし。夜已に深け
れば、さしもせき合ひつる城中さび返つて、更に人ありとも見えざりけり。將軍執事兄弟
を召し近づけて宣ひけるは、「いふかひなき者共が、唯一軍に負けたればとて、落ち行く事
こそ不思議なれ。さりととも響庭命鶴、高橋、海老名六郎は、よも落ち去らじな。」と問ひ給
へば、「それも早落ちて候。」「長井治部少輔、佐竹加賀は早落ちつるか。」「いやそれも皆落
ちて候。」「さては残る勢幾程かある。」「今は御内の御勢、師直が郎從、赤松信濃守が勢、
彼是五百騎に過ぎ候はじ。」と申せば、將軍、「さては世の中今夜を限りごさんなれ、面々に
其の用意あるべし。」とて、鎧をば脱いで押除け小具足許りになり給ふ。これを見て高武藏
守師直、越後守師泰、武藏五郎師夏、越後將監師世、高豐前五郎、高備前守、遠江次郎、

○掛羅 禪家の袈裟

○殿侍 遠侍の如く
諸士の控へ居る室。

○思ひざし 心に願
ふ所があつて、特別
にある人を名ざして
杯を差すこと。

○鳥の將に死云々
論語泰伯篇に見ゆ。

○庭訓 父の訓へ。

○力なく 據なく。

○猶子 養子。

彦部、鹿目、河津以下、高家の一族七人、宗徒の侍二十三人、十二間の客殿に二行に座
を列ねて、各諸天に焼香し、鎧直垂の上をば取つて抛け除け、袴許りに掛羅懸けて、將軍
御自害あらば御供申さんと、腰の刀に手をかけて、静まり返つてぞ居たりける。殿侍に
は、赤松信濃守範資上座して、一族若黨三十二人、膝を屈して並み居たりけるが、「いざや
最後の酒盛して、自害の思ひざしせん。」とて、大きな酒樽に酒を湛へ、銚子に杯取副へ
て、家城源十郎師政酌をとる。信濃守の次男信濃五郎直頼が、此の年十三にて此の内にあ
りけるを、父呼び出し、「鳥の將に死なんとする時其の鳴く事哀し。人の將に死なんとする
時其の言ふ事善しといへり。吾が一言汝が耳に留まらば、庭訓を忘れず、身を慎みて先祖
を恥ぢしむる事なかるべし。將軍已に御自害あらんする間、範資も御供申さんするなり。
日來の好みを思はば家の子若黨共も、皆吾とともに力なく死に赴かんとぞ思ひ定めたるら
ん。但し汝は未だ幼少なり。今共に腹を切らすとも、人強ちに指をさす事あるまじ。則祐
已に汝を猶子にすべき由、かねて約束ありしかば、赤松へ歸つて則祐を眞の父と悪みて、
生涯を其の安否に任するか、然らずば又僧法師にもなりて、吾が後生をも訪らひ汝が身を
も助かるべし。」と、泣くく庭訓を残して涙を押拭へば、座中の人々實にもと、同じく涙
を流しけり。直頼つくくくと父の遺訓を聞いて、扇取直して申しけるは、「人の幼少のほど
と申すは、五つや六つや乃至十歳に足らぬときにてこそ候へ。我已に善悪を覺る程になつ

○沙彌 新人門の僧
 ○喝食 小僧。
 ○聖道に云々 天台
 眞言なきの僧になる
 ならば。
 ○おくれ進らせては
 死に後れ申しては
 ○色代 挨拶。
 ○奥次郎左衛門尉
 重次。
 ○岡本次郎左衛門
 重久。
 ○無明の酒 妙法聖
 念經に「勿飲無明
 酒」無明は過去の煩
 惱の本性を蔽ひ、爲
 に邪見妄執を起して
 事理に闇いこと。
 ○夜部 昨夜。

て、適此の座に在り合はせながら、御自害を見捨てて一人故郷へ歸つては、誰をか父と
 憑み、誰にか面を向くべき。又禪僧になつたらば、沙彌喝食に指をさされ、聖道になりた
 らば、兒共に笑はれずといふことあるべからず。縦令又如何なる果報あつて、後の榮花を
 開き候とも、おくれ進らせては、ながらふべき心地もせず。色代は時に依る事にて候。腹
 切の最期の杯にて候へば、誰にか論じ申さまし。我先づ飲みて思ひざし申さん。」とて、
 前なる杯を少し取傾くる體にて、糟谷新左衛門尉保連にさし給へば、三度飲みて、糟谷
 新左衛門尉伊朝、奥次郎左衛門尉、岡本次郎左衛門、中山助五郎、次第に飲み下す。無明
 の酒の酔の中に、近づく命ぞ哀れなる。

師直師泰出家の事附藥師寺遁世の事

斯かる處に、東の城戸を荒らかに敲く人あり。諸人驚いて「誰ぞ。」と問へば、夜部落ち
 たりと沙汰せし饗庭命鶴丸が聲にて、「御合體になつて、合戦はあるまじきにて候ぞ。楚忽
 に御自害候な。」とぞ呼ばはりける。こはそも何とある事ぞやとて急ぎ城戸を開きたれば、
 命鶴將軍の御前に參つて、「夜部事のよしをも申さで、罷り出で候ひしかば、早落ちたりと
 ぞ思召し候ひつらん。御方の軍勢の氣を失ひ、色を損じたる體を見候ひしに、斯くては戦
 ふとも勝ちがたし、落つとも延びさせたまはじと覺え候ひつる間、畠山阿波將監が陣へ罷

○人倫 人間。

○持戒持律の僧 道
 徳堅固の僧。
 ○落さばや 逃げ延
 びさせたい。
 ○然るべし 適當で
 あらう。

り向ひ候て、御合體のよしを申して候へば、錦小路殿も、たゞ暮々其の事をのみこそ仰せ
 候へ。執事兄弟の不義も、たゞ一往思ひ知らするまでにて候へば、執心深く誅伐せらる、
 までの儀も候まじ。親にも超えてむつまじきは、同氣兄弟の愛なり。子にも劣らずなつか
 しきは、多年主従の好なり。禽獸もみな其の心あり。況んや人倫に於てをや。縦令合戦に
 及ぶとも、情なき沙汰を致すなど、八幡より賜はりて候御文數通候とて、取出して見せら
 れ候ひつる。」と、命鶴委細に申しければ、將軍も執事兄弟も、さては仔細あらじとて、其
 の夜の自害は留まりてけり。さて三條殿は御兄弟の御事なれば、將軍をこそ惡しと思召
 さすとも、師直去年の振舞をば、尙も惡しと思召さぬ事あるべからず。實にも頭を延べて
 參るくらゐならば、出家をして參るか、然らずんば將軍を赤松の城へ遣り進らせて、師直
 は四國へや落つると評定ありけるを、藥師寺次郎左衛門公義「など斯様に力なき事をば仰
 せ候ぞ。六條判官爲義が、己が咎を謝せんために、入道になつて出で候ひしをば、義朝子
 の身としてだにも、首を刎ね候ひしぞかし。縦令御出家候て、如何なる持戒持律の僧とな
 らせ給ひて候とも、三條殿の御意もやすまり、上杉畠山の一族達も、憤りを散じ候べし
 とは覺え候はず。剃髮の骸墨染の衣の袖に血を淋ぎて、憂名を後代に残し候はんこと、唯
 口惜しかるべき事にて候はずや。將軍を赤松の城へ入れ進らせて、師直を四國へ落さばや
 と承り候事も、都て然るべしとも覺え候はず。細川陸奥守も、三條殿の召に依つて、大

○はかしくは

○すかね前に 滅じ

ない以前に。

○言を残さず 云ひ

残すことなく。

○落居 落著。

○嗚呼豎子云々 鴻

門の會に范増が項羽

を罵つた語で豎子は

小僧といふ程の意。

○高名 功名。

○しかじ 越したこ

こはあるまい。

○佛種は縁より起る
法華經に「佛種自
縁起是故説一乘。」
○無下に ひやく。
○覺えたる 思はれ
たる。

○執事兄弟 師直と
師泰。

○播州 播磨守。

○さりとも それに
しても。

勢早三石に著きて候と聞え候へば、將軍こそ攝州の軍に負けて、赤松へ引かせ給ふと聞いて、打止め奉らんと思はぬことや候べき。又四國へ落ちさせ給はん事も叶ふべからず。用意の船も候はで、此處彼處の浦々にて、渡海の順風を待つて御渡り候はんには、敵追つ懸けて寄せ候はば、誰か矢の一つをも、はかしく射出す人候べき。御方の兵共の有様は、昨日の軍に曇りなく見透かされ候ものを、人に剛臆なく、氣に進退ありと申す事候間、人の心の習ひ、敵に打懸らんとする時は、心武くなり、一足も引くとなれば、心臆病になる者にて候。たゞ御方の勢の未だすかね前に、一向討死と思召し定めて、一度敵に懸りて御覽候より外は、餘議あるべしとも覺え候はず。」と、言を残さず申しけれども、執事兄弟只降參出家の議に落居しければ、公義涙をはらゝ流して、「嗚呼豎子與に謀るに堪へすと、范増がいひけるもことわりかな。運盡きぬる人の有様程、あさましきものはなかりけり。我此の人と死を共にしても、何の高名かあるべき。しかじ憂世を捨てて、此の人々の後生を訪はんには。」と、俄に思ひ定めて、

とればうし取らねば人の數ならず捨つべきものは弓矢なりけり

と、かやうに詠じつ、自ら髻おしきりて、墨染に身を替へて、高野山へぞ上りける。

三間の茅屋千株の松風、殊に人間の外の天地なりけりと、心もすみ身も安く覺えければ、

高野山うき世の夢もさめぬべしそのあかつきをまつのあらしに

と詠みて、暫しは閑居幽隱の人とぞなりたりける。佛種は縁より起る事なれば、かやうに次を以て、浮世を思ひ捨てたるは、やさしく優なる様なれども、越後中太が義仲を諫めかねて、自害をしたりしには、無下に劣りてぞ覺えたる。

師直自害の事附諏訪五郎が事

高播磨守は師直が猶子なりしを、將軍の三男左馬頭殿の執事になして、鎌倉へ下りしかば、上杉民部大輔と相共に東國の管領にて、勢ひ八箇國に振へり。西國こそかやうに師直を背く者多くとも、東國はよも仔細あらじ、事の眞に難儀ならば、兵庫より船に乗つて、鎌倉へ下りて師直と一つにならんと、執事兄弟潛に評定せられける處に、二十五日の夜半ばかりに、甲斐國より時衆一人來つて、忍びやかに、「去年の十二月に、上杉民部大輔が養子に、左衛門藏人、父が代官にて上野の守護にて候ひしが、謀叛を起して高倉殿方を仕るよし聞えしかば、父民部大輔これを誅伐せん爲に下向の由を稱して、上野に下著して、則ち左衛門藏人と同心して、武藏國へ打越え、坂東の八平氏武藏の七黨を附け従ふ。播州師直これを聞かれ候て、八箇國の勢を催さるゝに、更に一騎も馳せ寄らず。斯くては叶ふまじ。さらば左馬頭殿を先立て進らせて上杉を退治せんとて、僅かに五百騎を率して、上野へ發向候ひし路次にて、さりとも貳心あらじと恐み切つたる兵ども心變りして、左馬

○三戸七郎 氏鎮。

頭殿を奪ひ奉る間、左馬頭殿の御後見三戸七郎は、其の夜同士打せられて半死半生に候ひしが、行方を知らずなり候ひぬ。これより上杉には彌勢加はり、播州師冬には附き隨ふ者候はざりし間、一歩も落ちて此方の様をも聞かばやとて、甲斐國へ落ちて、洲澤城に籠られ候ところに、諏訪下宮祝部六千餘騎にて打寄せ、三日三夜の合戦に、敵御方の手負討死其の數を知らず。敵皆大手へ向ふにより、城中の勢大器大手におり下つて、防ぎ戦ふ隙を得て、山の案内者うしろへ廻つて、かさより落し懸る間、八代某一足も引かず討死仕り、城已に落ちんとし候時、御烏帽子子に候ひし諏訪五郎、初めは祝部に屬して城を攻め候ひしが、城の弱りたるを見て、『抑我執事の烏帽子子にて、父子の契約を致しながら、世擧つて背けばとて、不義の振舞をば如何か致すべき。曾參は車を勝母の郷に復し、孔子は渴を盗泉の水に忍ぶといへり。君子は其れ爲ざる處に於て名をだにも恐る。況んや義の違ふところに於てをや。』とて、祝部に最後の暇をうて城中へ入り、卻つて寄手を防ぐ事、身命を惜しまず。去る程に城の後より破れて、敵四方より込み入りしかば、諏訪五郎と播州とは手に手を取違へ、腹掻き切つて伏し給ふ。此の外義を重んじ名を惜しむ侍共六十四人、同時に皆自害して、名を九原の上の苦に残し、骸を一戦の場の土に曝さる。其の後

○烏帽子子 元服の時烏帽子親に冠を被らせられ名をつけられたもの。
○諏訪五郎 眞親。
○曾參云々 孔子家語に見ゆ。孝道を重んじて勝母の名を忌みたること。
○孔子は云々 陸士衡の猛虎行に見ゆ。これも盗泉の名を忌みたること。
○九原 墓場。

は東國北國残りなく、高倉殿の御方になつて候。世は今はさてとこそ見えて候へ。」と、泣く泣く執事にぞ語られける。筑紫九國は兵衛佐殿に従ひ附きぬと聞ゆ。四國は細川陸奥守

○氣色 顔色。

○提鞘 剃髮者の帶するもので形は守刀の如く柄も鞘も木で作る。下鞘とも書く。

○今生 此の世。
○欺かぬ あざけらぬ。

○蓮の葉笠 蓮の葉の如く二つに折れた笠。

○中々 却つて。
○さがらす 後れず
○あはひ 間。

師直以下誅せらるゝ事附仁義血氣勇者の事

同じき二十六日に、將軍已に御合體にて上洛し給へば、執事兄弟も、おなじく遁世者に打紛れて、無常の岐に策をうつ。折節春雨しめやかに降りて、數萬の敵此處彼處に控へたる中を打通れば、それよと人に見知られじと、蓮の葉笠を打ちかたづけ、袖にて顔を引隠せども、中々紛れぬ天が下、身のせばき程こそ哀れなれ。將軍に離れ奉りては、道にても如何なる事かあらんずらんと危みて少しもさがらず、馬を早めて打ちけるを、上杉畠山の兵共、かねて議したる事なれば、路の兩方に百騎、二百騎、五十騎、三十騎、處々に控へて待ちける者共、すはや執事よと見てければ、將軍と執事とのあはひを次第に隔てんと鷹角一揆七十餘騎、會釋色代もなく、馬を中へ打ちこみくしける程に、心ならず押隔てら

○修羅 阿修羅。印度の鬼神。
 ○帝釋 天神。
 ○蓮花の穴 蓮の莖の穴。
 ○天人の五衰 天人も臨終には五つの衰へ(身光不現、華鬘萎頓、兩腋汗流、體便臭穢、不樂木座)を免かれぬといふ。
 ○歡喜苑 起世經に「善見大城北門之外經二十由旬」有大園林、名曰歡喜、周圍一千由旬。諸の天人此の中に入れは自然に歡喜の心生ず。
 ○千鍾の祿 左氏傳の註に「釜十爲鍾六斛四升也」。
 ○馬さくりの水 馬蹄で跳ねまはす水。
 ○三浦八郎 澄知。

れて、武庫川の邊を過ぎける時は、將軍と執事とのあはひ、河を隔て山を阻て、五十町許りになりけり。哀れなるかな、盛衰利那の間に替れること、修羅帝釋の軍に負けて、藕花の穴に身を隠し、天人の五衰の日に逢ひて、歡喜苑にさまよふらんも斯くやと思ひ知られたり。此の人天下の執事にてありつる程は、如何なる大名高家も、其の笑める顔を見ては、千鍾の祿、萬戸の俣を得たる如く悦び、少しも心にあはぬ氣色を見ては、薪を負ひて焼原を過ぎ、雷を戴いて大江を渡るが如く恐れき。いかに況んや將軍と打並べて、馬を進め給はんずるその中へ、誰か隔て先立つ人あるべきに、名も知らぬ田舎武士、云ふばかりなき人の若黨どもに押隔てられ、馬さくりの水を蹴懸けられて、衣深泥にまみれぬれば、身を知る雨の止むときなく、涙や袖をぬらすらん。執事兄弟武庫川を打渡つて、小堤の上を過ぎける時、三浦八郎左衛門が中間二人走り寄つて、「これなる遁世者の、顔を藏すは何者ぞ。其の笠ぬけ。」とて、執事の著られたる蓮葉笠を引切つて捨つるに、頬冠りはづれて片顔の少し見えたるを、三浦八郎左衛門「哀れ敵や、願ふ所の幸ひかな。」と悦びて、長刀の柄をとり延べて、胴中を切つて落さんと、右の肩先より左の小脇まで、鋒さがりに切り附けられて、あつといふ處を、重ねて二打うつ、打たれて馬よりどうと落ちければ、三浦馬より飛んで下り、首を掻き落して、長刀の鋒に貫いて差上げたり。越後入道は半町ばかり隔たりて打ちけるが、これを見て馬を驅け退けんとしけるを、跡に打ち

○打ちけるが 馬を打つたが。
 ○吉江小四郎 時宣
 ○打刀 後世の武士が用ゐた大小の大きな方の刀を云ふ。
 ○井野彌四郎 幸成
 ○小田左衛門 惟則
 ○山口入道 俗名は師茂。師直の弟。
 ○小林又次郎 教房。
 ○佐々宇六郎 久元
 ○高山又次郎 子經
 ○阿佐美三郎 助久
 ○鹿目平次 直方。
 ○身の上みや 自分の身の上に関することごと。
 ○御事 貴君。
 ○僻事 間違ひごみ

る吉江小四郎、槍を以て胛骨より左の乳の下へ突き徹す。突かれて槍に取附き、懐に差したる打刀を抜かんとしける處に、吉江が中間走り寄り、鏡の鼻を返して引落す。落つれば首を掻き切つて、あぎとを喉へ貫き、とつ附けに著けて馳せて行く。高豊前五郎をば、小柴新左衛門これを打つ。高備前守をば、井野彌四郎組んで落ちて首を取る。越後將監をば、長尾彦四郎先づ馬の諸膝切つて、落つる所を二太刀うつ。打たれて少し弱る時、押へて臆て首を斬る。遠江次郎をば小田左衛門五郎斬つて落す。山口入道をば小林又次郎引組んで刺し殺す。彦部七郎をば、小林掃部助後より太刀にて切りけるに、太刀影に馬驚いて深田の中へ落ちにけり。彦部引返して、「御方はなきか、一所に馳せ寄つて、思ひ／＼に討死せよ。」と呼ばはりけるを、小林が中間三人走り寄りて、馬より倒に引落し踏まへて首を斬つて、主の手にこそ渡しけれ。梶原孫六をば佐々宇六郎左衛門これを討つ。山口新左衛門をば高山又次郎斬つて落す。梶原孫七は十餘町前に打ちけるが、跡に軍あつて執事の討たれぬるやと人のいひけるを聞きて、取つて返して打刀を抜いて戦ひけるが、自害を半ばにしかけて、路の傍に伏したりけるを、阿佐美三郎左衛門、年來の知音なりけるが人手にかけんよりはとて、泣く／＼首を取りてけり。鹿目平次左衛門は、山口が討たる、を見て、身の上と思ひけん、跡なる長尾三郎左衛門に抜いてかゝりけるを、長尾少しも騒がず、「御事の身の上にては候はぬ者を、僻事し出して、命失はせ給ふな。」といはれて、

○肘のかゝり 肘の關節。

○痛手 重傷。

○塵取 輕便な一種の乗物の名。

○西左衛門 則基

○やんごごなき 貴

○御覺え 御寵愛。

○あつかひ もてなし。

をめぐりと太刀を指して、物語して行きけるを、長尾中間にきつと目くばせしたれば、中間二人鹿目が馬にひつそうて、「御馬の杓切つて捨て候はん。」とて、抜いたる刀を取直し、肘のかゝりを二刀刺して、馬より取つて引落し、主に首をばかかせけり。河津左衛門は、小清水の合戦に痛手を負ひたりける間、馬には乗り得ずして、塵取にかかれて、遙かの跡に來けるが、執事こそ己に討たれさせ給ひつれと、人のいふを聞きて、とある辻堂のありけるに、輿舁き居るさせ、腹搔き切つて死ににけり。執事の子息武藏五郎をば、西左衛門四郎これを生虜つて、高手小手に縛めて、其の日の暮るゝをぞ相待ちける。此の人は二條前關白太政大臣の御妹、やんごごなき御腹に生れたりしかば、容貌人に勝れ心様優にやさしかりき。されば將軍も御覺え他に異に、世の人ときめき合へる事限りなし。才あるも才なきも、其の子を悲しむは人の父たる習ひなり。況んや最愛の子なりしかば、塵をも足に踏ませじ荒き風にもあてじとて、あつかひ、いつき、かしづきしに、いつの間盡き終てたる果報ぞや。年未だ十五に滿たず、荒き武士に生虜られて、暮るゝを待つ間の露の命、消えん事こそ哀れなれ。夜に入りければ、縛めたる繩をときゆるして已に斬らんとしけるが、此の人の心の程を見んとて、「命惜しく候はば、今夜速かに鬚を切つて僧か念佛衆かにならせ給ひて、一期心安く暮させ給へ。」と申しければ、先づ其の返事をばせて、「執事は何とならせ給ひて候とか聞え候。」と問ひければ、西左衛門四郎、「執事は早討たれさせ給ひ

○三途 地獄道、畜生道、餓鬼道。

○分々の敵に云々 其の身相應の敵に出あつて。
○うたてかりける不覺 甚しかつた恥辱

○心も發らぬ世を背く 佛心も發らないの出家する。
○仁義の勇者云々 孟子卷三に見ゆ。

て候なり。」と答ふ。「さては誰がために暫しの命をも惜しみ候べき。死出の山三途の大河とかやをも、共に渡らばやと存じ候へば、たゞ急ぎ首を召され候へ。」と、死を請うて敷皮の上居直れば、斬手涙を流して、暫しは目をも持上げず、後に立ちて泣き居たり。斯くてさてあるべきにあらねば、西に向ひ念佛十遍ばかり唱へて、遂に首を打落す。小清水の合戦の後、執事方の兵共十方に分散して、残る人なしといひながら、今朝松岡城を打出つるまでは、まさしく六七百騎もありと見えしに、此の人々の討たるゝを見て何地へか逃げ隠れけん、今討たるゝ處十四人の外は、其の中間下部に至るまで、一人もなくなりけり。十四人と申すも、日來皆度々の合戦に、名を揚げ力を逞しくしたる者共なり。縦令運命盡きなば、始終こそ叶はずとも、心を同じうして戦はば、なか分々の敵に合つて死せざるべきに、一人も敵に太刀を打著けたる者なくして、斬つては落され押へては首を搔かれ、無代に皆討たれつる事、天の譴とは知りながら、うたてかりける不覺かな。夫れ兵は仁義の勇者、血氣の勇者とて二つあり。血氣の勇者と申すは、合戦に臨むごとに勇み進んで臂を張り強きを破り堅きを砕く事、鬼の如く忿神の如く速かなり。然れども此の人若し敵の爲に利を以て含め、御方の勢を失ふ日は、速るゝに便りあれば、或は降人になつて恥を忘れ、或は心も發らぬ世を背く。此くの如くなるは則ちこれ血氣の勇者なり。仁義の勇者と申すは必ずしも人と先を争ひ、敵を見て勇むに高聲多言にして勢ひを振ひ臂を張らざれ

○雌雄 勝負。

○仁者は必ず云々
論語憲問篇に見ゆ。

○文宣王 孔子。

ども、一度約をなして憑まれぬる後は、貳心を存せず心を變ぜずして大節に臨み志を奪はれず、傾く所に命を輕んず。此くの如くなるは則ち仁義の勇者なり。今の世聖人去つて久しく、梟惡に染まる事多ければ、仁義の勇者は少なし。血氣の勇者はこれ多し。されば異朝には漢楚七十度の戦ひ、日本には源平三箇年の軍に、勝負互に易りしかども、誰か二度と降人に出でたる人ありし。今元弘以後君と臣との争ひに、世の變ずる事僅かに兩度に過ぎざるに、天下の人五度十度、敵に屬し御方になり、心を變ぜぬは稀なり。故に天下の争ひ止む時なくして、合戦雌雄未だ決せず。これを以て、今師直師泰が兵共の有様を見るに、日來の名譽も高名も、皆血氣にほこる者なりけり。さらすばなどか此の時に、千騎二千騎も討死して、後代の名を揚げざらん。仁者は必ず勇有り、勇者は必ず仁あらずと、文宣王の聖言、實にもと思ひ知られたり。

卷第三十

將軍御兄弟和睦の事附天狗勢汰への事

○志合する則は云々
文選第卅九に「意合則胡越爲昆弟。」
○連枝 兄弟。
○錦小路殿 高倉殿
とも三條殿とも云ひ
何れも是利直義の事
○確執 仲違ひ。
○被官 所屬の官。

志合する則は胡越も地を隔てず。況んや同じく父母の懷抱を出でて浮沈を共にし、一日も咫尺を離れざるは、連枝兄弟の御中なり。一日師直師泰等が、不義を罰するまでにてこそあれ、何事にか骨肉を離る、心あるべきとて、將軍と高倉殿と御合體ありければ、將軍は播磨より上洛し、宰相中將義詮は丹波の石籠より上洛し、錦小路殿は八幡より入洛し給ふ。三人廳で會合し給ひて、一獻の禮ありけれども、此の間の確執さすが、傍いたき心地して、互の言少なく無興氣にてぞ歸られける。高倉殿は元來仁者の行ひを假つて、世の譏りを憚る人なりければ、いつしか廳で天下の政を執つて、威を振ふべき其の機を出されねども、世の人重んじ仰ぎ奉る事、日來に勝れて、其の被官の族、事に觸れて氣色は増さずといふ事なし。車馬門前に立列なつて出入身を側め、賓客堂上に羣集して、揖讓禮を慎めり。此くの如くめでたき事のみある中に、高倉殿最愛の一子今年四つになり給ひけるが、今月二十六日俄に失せ給ひければ、母儀を始め奉り上下萬人泣き悲しむ事限りなし。さても西國東國の合戦、符を合はせたるが如く同時に起つて、師直師泰兄弟父子の首、皆

○下火 火葬の際に火をかけること。

○棠棣花 詩經に「棠棣之華不韞々」此の花は兩々相背いて咲き後には合するので兄弟各別のやうだが遂には一體となるのに比して云ふ。

○用ふる時は云々 文選に「用之則爲虎、不用則爲鼠。」

○東方朔 西漢の孝武帝時代の人。

○織芥 事の微細なこゝ。

○附鳳の勢ひ云々 人の威を借つて己の私事を肆にする事。文選卅七の註に「附鳳攀龍放集、天衢。」

○失はばや 命をくだりたい。

○天魔波旬 惡魔。

京都に上りければ、等持寺の長老旨別源、葬禮を取營みて下火の佛事をし給ひけるに、昨夜春園風雨暴し、和枝吹落ス棠棣花。

といふ句のありけるを聞きて、皆人感涙をぞ流しける。此の二十餘年執事の被官に身を寄せて、恩顧に誇る人幾千萬ぞ、昨日まで烏帽子の折り様、衣紋のため様をまねて、「これこそ執事の内の人よ。」とて、世に重んぜられん事を求めしに、今日はいつしか引替へて貌を裏し面を側めて、「すはや御敵方のものよ。」とて、人に知られん事を恐懼す。用ふる時は則ち鼠も虎と爲り、用ひざるときは則ち虎も鼠と爲るといひ置きし、東方朔が虎鼠の論、誠に當れる一言なり。將軍兄弟こそ、誠に織芥の隔てもなく、和睦にて所存もなくおはしけれ。其の門葉にあつて、附鳳の勢ひを貪つて、攀龍の望みを期する族は、人の時を得たるを見ては猜み、己が威を失へるを顧みては、憤りを含まずといふ事なし。されば石堂、上杉、桃井は、様々の讒を構へて、將軍に附き従ひ奉る人々を失はばやと思ひ、仁木、細川、土岐、佐々木は、種々の謀を運らして、錦小路殿に、又人もなげに振舞ふ者共を滅ぼさばやとぞ巧みける。天魔波旬は斯かる所を伺ふものなれば、如何なる天狗共の態にてかありけん、夜にだに入りければ、何處より馳せ寄るとも知らぬ兵共、五百騎三百騎、鹿谷、北白川、阿彌陀峯、紫野の邊に集まつて、勢ぞろへをする事度々に及ぶ。これを聞きて將軍方の人、「あはや高倉殿より寄せらる、は。」とて肝をひやし、高倉殿方の人、「い

○成敗 政事。
○膝合せ しめし合せ。

○石堂入道 俗名は義房。頼茂の子。

○宰相中將殿 義詮
○勢を催すか 軍勢を徵集するか。

か様將軍より討手向けらる、は。」とて用心を致す。禍ひ利欲より起つて、息むことを得ざれば、終に己が分國へ下つて、本意を達せんとや思ひけん、仁木左京大夫頼章は病ひと稱して有馬の湯へ下る。舍弟の右馬權助義長は伊勢へ下る。細川刑部大輔頼春は讃岐へ下る。佐々木佐渡判官入道道譽は近江へ下る。赤松筑前守貞範、甥の彌次郎師範、舍弟信濃五郎範直は、播磨へ逃げ下る。土岐刑部少輔頼康は、憚る氣色もなく白晝に都を立つて、三百餘騎ひたすら合戦の用意して、美濃國へぞ下りける。赤松律師則祐は、初めより上洛せで赤松に居たりけるが、吉野殿より、故兵部卿親王の若宮を大將に申し下し進らせて、西國の成敗を司つて、近國の勢を集めて、吉野、戸津川、和田、楠と牒合せ、己に都へ攻め上らばやなど聞えければ、又天下三つに分れて、合戦息む時あらじと、世の人安き心もなかりけり。

高倉殿京都退去の事 附殿の紂王の事

同じき七月晦日、石堂入道、桃井右馬權頭直常二人、高倉殿へまるつて申しけるは、「仁木、細川、土岐、佐々木、皆己が國々へ逃げ下つて、謀叛を起し候なる。これも何様將軍の御意を請け候か、宰相中將殿の御教書を以て、勢を催すかにてぞ候らん。又赤松律師が大塔若宮を申し下して、宮方を仕ると聞え候も、實は事を宮方に寄せ、勢を催して後、宰

○無沙汰 不行届。

○富樫介 名は高家

○禪門 佛門に入つた男子の稱。こゝは直義を指す。

○四十八箇所の篝 篝は辻々の警衛に設けられた兵。

○公家被官 朝廷所屬の官。

○褒貶の短冊 褒貶の歌合の短冊。

相中將殿へ参らんとぞ存じ候らん。御勢も少なく御用心も無沙汰にて都に坐し候はん事如何とこそ存じ候へ。たゞ今夜の紛れに、篠峯越に北國の方へ御下り候て、木目荒血の中山を差塞がれ候はば、越前に修理大夫高経、加賀に富樫介、能登に吉見、信濃に諏訪下宮祝部、みな無貳の御方にて候へば、この國々へは如何なる敵か足をも踏み入れ候べき。甲斐國と越中とは我等が已に分國として、相交はる敵候はねば、旁以て心安かるべきにて候。先づ北國へ御下り候て、東國西國へ御教書を成し下され候はんには、誰か應じ申さぬ者候べき。」と、また餘儀もなく申しければ、禪門少しの思案もなく、「さらばやがて下るべし。」とて、取る物もとりあへず、御前にあり合うたる人々ばかりを召し具して、七月晦日の夜半許りに、篠峯越に落ち給ふ。騒がしかりし有様なり。これを聞きて、御内の者は申すに及ばず、外様の大名國々の守護、四十八箇所の篝三百餘人、在京人、畿内近國四國九州より、此の間上り集まりたる軍勢共、我もくと跡を追つて落ち行きけるほどに、今は公家被官の者より外、京中に人ありとも更に見えざりけり。夜明けければ、宰相中將殿將軍の御屋形へ参られて、「今夜京中のひしめき、直事に非ずと覺えて候。落ち行きたる兵共大勢にて候なれば、若し立歸つて寄する事もや候はんすらん。」と申されければ、將軍些とも騒ぎ給はず、「運は天にあり、何の用心かすべき。」とて、褒貶の短冊取出し、心閑かに詠吟し、打囀いてぞ坐しける。高倉殿已に越前の敦賀津にましくて、著判をつけられる

○註せり 著判をしるした。

○南家 藤原武智丸の後裔を云ふ。

○儒者 儒學者。

○有範 藤範の子。

○よりく 折々。

○武乙 史記本紀に委し。

○安からぬ 類なこた。

に、初めは一萬三千餘騎ありけるが、勢日々に加はつて六萬餘騎と註せり。此の時若し此の大勢を牽して京都へ寄せたらしましかば、將軍も宰相中將殿も、戦ふまでも坐さじを、そゞろなる長僉議、道も立たぬなま才學に時移りて、數日を徒らに過ぎにけり。抑これ誰が意見に依つて、高倉殿はかやうに兄弟叔父甥の間、合體をしながらさすが無道を誅して、世を鎮めなんとする所を計らひたまふと尋ねれば、禪律の奉行にて召仕はれる南家の儒者、藤原少納言有範が、よりく申しける議を用ひ給ひける故とぞ承る。「さる程に昔般の帝武乙と申しし王の位に即きて、惡を好むこと頻りなり。我天子として一天四海を掌に握ると雖も、猶日月の明暗を心に任せず、雨風の暴く劇しき事を止め得ぬこそ安からねとて、如何にもして天を亡ぼさばやとぞ巧まれける。先づ木を以て人を作つて、これを天神と名づけて帝自らこれと博奕をなす。神眞の神ならず、人代つて賽を打ち石を仕ふ博奕なれば、帝などか勝ち給はざらん。勝ち給へば、天負けたりとて、木にて作れる神の形を手足を切り頭を刎ね、打擲蹂躪して獄門にこれを曝しけり。又革を以て人を作つて血を入れて、これを高き木の梢に懸け、天を射ると號して射るに、血出でて地に洒ぐ事夥し。斯様の惡行身に餘りければ、帝武乙河渭に獵せし時、俄に雷落ち懸りて御身を分々に引裂きてぞ捨てたりける。其の後御孫の小子帝位に即き給ふ。これを般の紂王とぞ申しける。紂王長り給ひて後、智は諫めを拒み、是非の端を飾るに足れり。勇は人に過ぎて、

○錫 水鳥の名。
○不退の樂しみ 移り變ることなき樂しみ。

○あはれ あゝ。

○見はや 見たい。
○鍾湯爐壇 鹽は炭か。地獄のこと。
○焦熱大焦熱 八大地獄の内二つ。

手づから猛獸を拉ぐに難しとせず。人臣に矜るに能を以てし、天下に高ぶるに聲を以てせしかば、人皆己が下より出でたりとて、諫諍の臣をも置かれず、先王の法にも順はず。姐妃といふ美人を愛して、萬事唯これが申す儘に付き給ひしかば、罪なくして死を賜ふ者多く唯積惡のみあり。鉅鹿といふ郷に、廻り三十里の倉を作りて米穀を積み餘し、朝歌といふ所に高さ二十丈の臺を立てて、錢貨を積み滿てり。又沙丘に廻り一千里の苑臺を造りて、酒を湛へて池とし、肉を懸けて林とす。其の中に若く清らかなる男三百人、みめかたち勝れたる女三百人を裸になして、相逐つて婚姻をなさしむ。酒の池には、龍頭鶴首の舟を浮べて長時に醉をなし、肉の林には、北里の舞新姪の樂を奏して不退の樂しみを盡す。天上の姪樂快樂も、これには及ばじとぞ見えたりける。或時后姐妃、南庭の花の夕ばえを詠めて寂寞として立ち給ふ。紂王見るに耐へずして、『何事か御意に叶はぬ事の侍る。』と問ひ給へば、姐妃『あはれ炮烙の法とやらんを見ばやと思ふを、心に叶はぬ事に侍る。』と宣ひければ、紂王『安き程の事なり。』とて、聽て南庭に炮烙を建てて、後の見物にぞなきれける。夫れ炮烙の法と申すは、五丈の銅の柱を二本東西に立てて、上に鐵の繩を張りて、下に炭火をおき、鍾湯爐壇の如くに起して、罪人の背に石を負はせ、官人戈を取つて罪人を柱の上に責め上せ、鐵の繩を渡る時、罪人氣力疲れて爐壇の中に落ち入り、灰燼となつて焦れ死ぬ。焦熱大焦熱の苦患を移せる形なれば炮烙の法とは名づけたり。后こ

○西伯 西方諸侯の長たつた故にかう云ふ。

○嬋娟 美しいさま

○斧鉞 まさかり。
○陽 川の場合には北。山の場合は南。

れを見給ひて、類なき事に興じ給ひければ、野人村老日毎に子を殺され親を失ひて、泣き悲しむ聲休む時なし。此の時周の女王未だ西伯にて坐しけるが、密にこれを見て人の悲しみ世の誇り、天下の亂れとなりぬと歎き給ひけるを、崇侯虎といひける者聞きて殷の紂王にぞ告げたりける。紂王大きに忿つて、即ち西伯を囚へて羑里の獄舎に押籠め奉る。西伯が臣に閔天といひける人、沙金三千兩、大宛の馬百匹、嬋娟幽艶なる女百人をそろへて、紂王に奉りて、西伯の囚はれを乞ひ受けければ、元來色に姪し寶を好む事、後の禍ひをも顧みず、此の一を以ても西伯を免すに足ぬべし、況んやその多きをやと、心飽くまで悦びて、則ち西伯をぞ免しける。西伯故郷に歸つて、我が命の活きたる事をばさしも悦び給はず、唯炮烙の罪に逢つて、咎なき人民共が、毎日毎夜に十人二十人焼き殺さる、事を、我が身に當れる苦しみの如く哀れに悲しく思しければ、洛西の地三百里を、紂王の后に獻じて、炮烙の刑を止められん事をぞ請はれける。后も同じく欲に染む心深く坐しければ、則ち洛西の地に替へて、炮烙の刑を止めらる。剩へ感悦猶これにも足らざりけるにや、西伯に弓矢斧鉞を賜はつて、天下の權を執り武を收めける官を授け給ひければ、唯龍の水を得て雲上に騰るに異ならず。其後西伯渭濱の陽に田せんとし給ひけるに、史編といひける人占ひて申しけるは『今日の獲物は、熊にあらず、熊にあらず、天君に師を與ふべし。』とぞ占ひける。西伯大きに悦んで潔齋し給ふ事七日、渭水の陽に出でて見給ふに、太公望が

○史編 周の太史の名で、トを掌る者。

○羽林 足利義詮。
○相公 足利尊氏。
○禪門 足利直義。

○權道 權謀術數を以て天下を治める事

○高倉入道左兵衛督直義。

半蓑の煙雨水冷じくして、釣を垂る、こと人に替れるあり。これ則ち史編が占ふ所なりとて、車の右に乗せて歸り給ふ。則ち武宣王と仰ぎて、文王これを師とし仕ふる事疎かならず、遂に太公望が謀に依つて西伯徳を行ひしかば、其の子武王の世に當つて、天下の人みな殷を背いて周に歸せしかば、武王遂に天下を執つて子孫永く八百餘年を保ちにき。古の事引いて今の世を見候に、唯羽林相公の淫亂、頗る殷の紂王の無道に相似たり。君仁を行はせ給ひて、これを亡ほされんに何の仔細か候べき」と、禪門をば文王の徳に比し、我が身をば太公望に准へて、折節につけて申しけるを、信ぜられけるこそ愚かなれ。さればとて禪門の行跡、泰伯が有徳の甥、文王に譲りし仁にも非ず。又周公の無道の兄、管叔を討せし義にもあらず。權道霸業、兩つながら缺けたる人とぞ見えたりける。

直義追罰の宣旨御使の事附鴨社鳴動の事

同じき八月十八日、征夷將軍源二位大納言尊氏卿、高倉入道左兵衛督追罰の宣旨を賜はりて、近江國に下著して鏡宿に陣を取る。都を立たる、時までは其の勢纒かに三百騎にも足らざりけるが、佐々木佐渡判官入道譽、子息近江守秀綱は、當國勢三千餘騎を率して馳せ參る。仁木右馬權頭義長は伊賀伊勢の兵四千餘騎を率して馳せ參る。土岐刑部少輔頼康は、美濃國の勢二千餘騎を率して馳せ參りける間、其の勢程なく一萬餘騎に及ぶ。

○末の刻 午後二時の鴨の社の神殿 今下加茂の社殿。

○宰相殿 足利義詮

今は如何なる大敵に戦ふとも、勢の不足とは見えざりけり。去る程に高倉入道左兵衛督、石堂、畠山、桃井三人を大將として、各二萬餘騎の勢を差副へ、同じき九月七日近江國へ打出で、八相山に陣を取る。兩陣堅く守つて其の戦ひを決せず。其の日の末の刻に、都には鴨の社の神殿鳴動する事良久しうして、流鏑矢二筋矢を鳴り響かし、良の方をさして去りぬとぞ奏聞しける。これは何様將軍兄弟の合戦に、吉凶を示さる、怪異にてぞあるらんと、諸人推量しけるが、果して翌日の午の刻に、佐々木佐渡判官入道が手の者共に、多賀將監と秋山新藏人と、楚忽の合戦し出して、秋山討たれにければ、桃井大きに忿つて、重ねて戦ふべきよしを申しけれども、自餘の大將に異議あつて、結局越前國へ引返す。其の後畠山阿波將監國清、頻りに「御兄弟唯御中なほり候て、天下の政務を宰相殿に持たせ進らせられ候へかし」と申しけるを、禪門許容したまはざりければ、國清大きに忿つて、己が勢七百餘騎を引分けて、將軍へぞ參りける。此の外縁を尋ねて降人になり、五騎十騎打連れ、將軍方へと參りける間、かくては越前に坐し候はん事は叶はじと、桃井頻りに勧め申されければ、十月八日高倉禪門又越前を立ちて、北陸道を打通り、鎌倉へぞ下り給ひける。

薩埵山合戦の事

○八相山 近江國。

將軍は八相山の合戦に打勝つて、やがて上洛し給ひけるを、十月十三日、又直義入道誅罰すべきのよし、重ねて宣旨をなされければ、翌日聽て都を立ちて鎌倉へ下り給ふ。ひたすらに洛中に勢を残さざらんも、南方の敵に隙を窺はれつべしとて、宰相中將義詮朝臣をば、都の守護にぞ留められける。將軍已に駿河國に著き給ひけれども、遠江より東、東國北國の勢共、早悉く高倉殿へ馳せ屬いてければ、將軍へははかしくしき勢も參らず。かくて左右なく鎌倉へ寄せん事叶ひ難し。先づ且く要害に陣を取つてこそ勢をも催さめとて、十一月晦日駿河薩埵山へ打上り、東北に陣を張りたまふ。相隨ふ兵には、仁木左京大夫頼章、舍弟越前守義長、畠山阿波守國清兄弟四人、今川五郎入道心省、子息伊豫守、武田陸奥守、千葉介、長井兄弟、二階堂信濃入道、同山城判官、其の勢僅かに三千餘騎には過ぎざりけり。去る程に將軍已に薩埵山に陣を取つて、宇都宮が馳せ參るを待ち給ふ由聞えければ、高倉殿先づ宇都宮へ討手を下さでは難儀なるべしとて、桃井播磨守直常に、長尾左衛門尉、竝に北陸道七箇國の勢をつけて、一萬餘騎上野國へ差向けらる。高倉禪門も同じき日に鎌倉を立ちて、薩埵山へ向ひたまふ。一方には上杉民部大輔憲顯を大手の大將として、二十萬餘騎由井蒲原へ向はせらる。一方には石堂入道、子息右馬頭頼房を搦手の大將として、十萬餘騎宇都部佐へ廻つて押寄する。高倉禪門は寄手の總大將なれば、宗徒の勢十萬餘騎を従へて、未だ伊豆府にぞ控へられける。彼の薩埵山と申すは、三方は嶮岨にて

○憲顯 憲房の子。

○宇都部佐 富士川の上流にある。

○心省 俗名範國。基氏の子。

○伊豫守 貞世。

○薩埵山 東海道の由井と奥津との間にある。

○世良田 上野國。

○爲出して でかし

○機 元氣。

谷深く切れ、一方は海にて岸高く峙てり。敵縱令何萬騎ありとも、近附きがたしとは見ながら、取巻く寄手は五十萬騎、防ぐ兵三千餘騎、しかも馬疲れ糧乏しければ、何時までか其の山に怵へ給ふべきと、哀れなる様に覺えて、掌に入れたる心地しければ、強ち急に攻め落さんともせず、たゞ千重萬重に取巻きたる許りにて、未だ矢軍をだにもせざりけり。宇都宮は、藥師寺次郎左衛門入道元可が勧めに依つて、かねてより將軍に志を存しければ、武藏守師直が一族に、三戸七郎といふ者、其の邊に忍びて居たりけるを大將に取立てて、薩埵山の後攻をせんと企てけるところに、上野國の住人、大胡山上の一族共、人に先をせられじと思ひけん。新田の大島を大將に取立てて、五百餘騎薩埵山の後攻のためとて、笠懸原へ打出でたり。長尾孫六、同平三、三百餘騎にて上野國警固のために、かねてより世良田に居たりけるが、これを聞くと均しく笠懸原へ打寄せ、敵に一矢をも射させず、抜き連れて懸け立てける程に、大島が五百餘騎十方に懸け散らされ、行方も知れずなりにけり。宇都宮これを聞きて、「此の人々、愁なる事爲出して敵に氣をつけつる事よ。」と、興醒めて思ひけれども、「其れに依るべからず。」と機を取直して、十二月十五日宇都宮を立ちて薩埵山へそ急ぎける。相伴ふ勢には、氏家太宰少貳周綱、同下總守、同三河守、同備中守、同遠江守、芳賀伊賀守貞經、同肥後守、紀黨には益子出雲守、藥師寺次郎左衛門入道元可、舍弟修理進義夏、同勘解由左衛門義春、同掃部助助義、武藏國の住人猪俣兵

庫入道、安保信濃守、岡部新左衛門入道、子息出羽守、都合其の勢千五百騎、十六日午の刻に、下野國天命宿に打出でたり。此の日佐野佐貫の一族等五百餘騎にて馳せ加はりける間、兵皆勇み進んで、夜明くれば桃井が勢には目もかけず、打連れて薩埵山へ懸らんと評定しける處に、大將に取立てたる三戸七郎、俄に狂氣になつて自害をして死にけり。これを見て門出悪しとや思ひけん、道にて馳せ著きつる勢共一騎も残らず落ち失せて、始め宇都宮にて一味同心せし勢ばかりになりければ、僅かに七百騎にも足らざりけり。かくては如何あらんと諸人色を失ひけるを、藥師寺入道暫く思案して、「吉凶は糾へる索の如しといへり。これは何様宇都宮の大明神、大將を氏子に授け給はん爲に、斯かる事はいで來るものなり。暫くも御逗留あるべからず。」と申しければ、諸人けにもと氣を直して路も少しの滞りもなく、引懸けく打つ程に、同じき十九日の午の刻に、利根河を打渡つて、那和莊に著きにけり。此にて跡に立ちたる馬煙を、馳せつく御方かと見ればさはあらで、桃井播磨守、長尾左衛門尉、一萬餘騎にて跡について押寄せたり。宇都宮、「さらば陣を張つて戦へ。」とて、小溝の流れたるを前にあて、平々としたる野中に、紀清兩黨七百餘騎は大手に向つて北の端に控へたり。氏家太宰少貳は、二百餘騎中の手にひかへ、藥師寺入道元可兄弟が勢五百餘騎は、搦手に對して南の端にひかへ、兩陣互に相待つて、半時ばかり時を移す處に、桃井が勢七千餘騎、鬨の聲を揚げて、宇都宮に打つてかゝる。長尾左衛門

○吉凶は云々 漢書
賈誼傳に「禍之與福
兮何異糾纏」吉凶
の相轉じ易きを云ふ

○紀清 紀氏之清原
氏。

が勢二千餘騎、魚鱗に連なりて、藥師寺に打つてかゝる。長尾孫六、同平三、二人が勢五百餘騎は皆馬より飛び下り、徒立になつて射向の袖を差しかざし、太刀長刀の鋒をそろへて、閑々と小跳りして、氏家が陣へ打つてかゝる。飽くまで廣き平野の、馬の足に懸る草木の一本もなき所にて、敵御方一萬二千餘騎、東に開け西に靡けて、追つ返しつ半時許り戦ひたるに、長尾孫六が下り立つたる一揆の勢五百餘人、縦横に駆け惱まされて、一人も残らず討たれければ、桃井も長尾左衛門も、叶はじとや思ひけん、十方に分れて落ち行きけり。軍畢つて四五箇月の後までも、戰場二三里が間は草腥くして血野原に淋ぎ、地堆くして骸路徑に横はれり。これのみならず、吉江中務が武藏國の守護代にて勢を集めて居たりけるも、那和の合戦と同じき日に、津山彈正左衛門竝に野與の一黨に寄せられ、忽ちに討たれければ、今は武藏上野兩國の間に敵といふ者一人もなくなつて、宇都宮につく勢三萬餘騎になりけり。宇都宮已に所々の合戦に打勝ち、後攻に廻るよし、薩埵山の寄手の方へ聞えければ、諸軍勢皆一同に、「哀れ後攻の近つかぬ前に薩埵山を攻め落され候へかし。」といひけれども、傾く運にや引かれけん、石堂、上杉、曾て許容せざりければ、餘りに身を揉みて、兒玉黨三千餘騎、極めて嶮しき櫻野より、薩埵山へぞ寄せたりける。此の坂をば今川上總守、南部の一族、羽切遠江守、三百餘騎にて固めたりけるが、坂中に一段高き所のありけるを切り拂ひて、石弓を多く張りたりける間、一度にばつと切つて落

○身を揉みて もご
かしがつて。
○石弓 機械仕掛で
石を敵に投げる兵器

○抜きつれて 打物を抜き連れ立つて。
○宗として はじめとして。

○竹下 足柄の西にある。

○古宇津 今の國府津。

○伊豆府 今の三島

○無爲に 事なく。

○一まじ 一先づ。

す。大石共に先陣の寄手數百人、楯の板ながら打摧がれて、矢庭に死する者數を知らず、後陣の兵これに色めいて、少し引色に見えける處へ、南部羽切抜きつれて懸りける間、大類彈正富田以下を宗として、兒玉黨十七人一所にして討たれけり。此の陣の合戦は斯様なりとも、五十萬騎に餘りたる陣々の寄手ども、同時に皆攻め上らば、薩埵山をば一時に攻め落すべかりしを、何となくとも今に落つべき城を、高名顔に合戦して討たれたるはかなさよ。」と、面々に笑ひ嘲りける心の程こそ淺ましけれ。去る程に同じき二十七日、後攻の勢三萬餘騎、足柄山の敵を追つ散らして、竹下に陣を取る。小山判官も宇都宮に力を合はせて、七百餘騎同じき日に古宇津に著きければ、焼き續けたる篝火の數、夥しく見えける間、大手搦手五十萬騎の寄手共、暫くも忍へず十方へ落ちて行く。仁木越後守義長勝つに乗つて、三百餘騎にて逃ぐる勢を追つ立てて、伊豆府へ押寄せける間、高倉禪門一支へも支へずして、北條へぞ落ち行き給ひける。上杉民部大輔、長尾新左衛門が勢二萬餘騎は、信濃を志して落ちけるを、千葉介が一族共五百騎許りにて追つかけ、早河尻にて打留めんとしけるが、落ち行く大勢に取籠められ、一人も残らず討たれけり。さてこそ其の道開けて、心安く上杉長尾左衛門は、無爲に信濃國へは落ちたりけれ。高倉禪門は餘りに氣を失ひて、北條にも猶たまり得ず、伊豆の御山へ引いて、大息ついて坐しけるが、忍びて何地へも一まど落ちてや見る、自害をやすると案じ煩ひ給ひける處に、又和睦の議あつて、將

軍より様々に御文を遣はされ、畠山阿波守國清、仁木左京大夫頼章、舍弟越後守義長を御迎へに進らせられたりければ、今の命の捨てがたさに、後の恥をや忘れ給ひけん、禪門降人になつて、將軍に打連れ奉りて、正月六日の夜に入りて、鎌倉へぞ歸り給ひける。

慧源禪門逝去の事

斯かりし後は、高倉殿に付き従ひ奉る侍の一人もなし。牢の如くなる屋形の荒れて久しきに、警固の武士を居ゑられ、事に觸れたる悲しみ耳に満ちて心を傷しめければ、今は憂世の中に存らへても、よしや命も何かはせんと思ふに、我が身さへ用なきものに歎き給ひけるが、幾程もなくその年の觀應三年壬辰二月二十六日、忽ちに死去し給ひけり。俄に黃疸といふ病ひに犯され、はかなくならせ給ひけりと、外には披露ありけれども、實には鴆毒の故に、逝去し給ひけりとぞさ、やきける。去々年の秋は師直上杉をばほし、去年の春は禪門師直を誅せられ、今年の春は禪門また怨敵の爲に毒を呑みて、失せ給ひけるこそ哀れなれ。三過門閑老病死、一彈指頃去來今とも、かやうのことをや申すべき。因果歴然の理は、今に始まらざる事なれども、三年の中に日を替へず、酬いけるこそ不思議なれ。さても此の禪門は、随分政道をも心につけ、仁義をも存じ給ひしが、かやうに自滅し給ふ事、如何なる罪の報いぞと案ずれば、此の禪門申さるゝに依つて、將軍鎌倉にて偽り

○去々年 一昨年
蘇東坡の過求樂文長
老已卒の詩句に出づ

○一紙の告文 一枚の請文。
○將軍宮 尊良親王

○冥の照覽 神佛の照覽。

○樂しみ盡きて悲しみ來り 陳鴻の長恨歌傳に「時移事去、樂盡哀來。」

○國衛の郷保 國司の廳の取り扱ふ郷保。古は郷三村との間に保さぬ區劃があつた。

○綺ひ 干涉。

○武臣七德 禁暴、戡兵、保大、定功、安民、和衆、豐賊の七。

て一紙の告文を殘されし故に其の御罰にて、御兄弟の中も悪くなり給ひて、終に失せ給ふか。又大塔宮を殺し奉り、將軍宮を毒害し給ふ事、此の人の御業なれば、其の御憤り深くして、此の如く亡び給ふか。災患本種なし悪事を以て種とすといへり。實なるかな、武勇の家に生れ弓矢を専らにすとも、慈悲を先とし業報を恐るべし。我が威勢のある時は、冥の照覽をも憚らず、人の辛苦をも痛まず、思ふ様に振舞ひぬれば、樂しみ盡きて悲しみ來り、我と身を責むる事、哀れにおろかなる事どもなり。

吉野殿相公羽林と御和睦の事附住吉の松折る、事

足利宰相中將義詮朝臣は、將軍鎌倉へ下り給ひし時京都守護の爲に殘され坐しけるが、關東の合戦の左右は未だ聞かず、京都は以ての外に無勢なり。斯くては如何様、和田楠に寄せられて、いふかひなく京を落されぬと思しければ、一旦事を謀つて、暫く洛中を無爲ならしめん爲に、吉野殿へ使者を立てて、「今より以後は、御治世の御事と、國衛の郷保、竝に本家領家、年來進止の地に於ては、武家一向其の綺ひを止むべきにて候。唯承久以後新補の率法竝に國々の守護職、地頭御家人の所帯を武家の成敗に許されて、君臣和睦の恩恵を施され候はば、武臣七德の干戈を戢めて、聖主萬歳の寶祚を仰ぎ奉るべし。」と、頻りに奏聞をぞ經られける。之に依つて諸卿會議あつて、先に直義入道和睦の由を申して、言

○再往 再三。

○良基 道平の子。

○非參議 前に參議
むつた者又は參議で
なくても二位三位の
參議たるべき資格の
ある者。
○七辨 左右の大中
少辨と權官を合は
せて云ふ。
○八座 左右の六衛
府及び左右馬寮の官
人を云ふ。

の下に變じぬ。これも亦僞つて申す條仔細なく覺ゆれども、謀の一途たれば、先づ義詮が申す旨に任せられ、帝都還幸の儀を催し、而して後に、義詮をば畿内近國の勢を以て退治し、尊氏をば義貞が子供に仰せつけて、即ち追討せられんに何の仔細かあるべきとて、御問答再往にも及ばず、御合體の事仔細あらじとぞ仰せ出されける。兩方互に僞り給へる趣誰かは知るべきなれば、此の間持明院殿方に拜趨せられたる諸卿、皆賀名生殿へ參らる。先づ當職の公卿には二條關白太政大臣良基公、近衛右大臣道嗣公、久我内大臣右大將通相公、葉室大納言長光、鷹司大納言左大將冬通、洞院大納言實夏、三條大納言公忠、三條大納言實繼、松殿大納言忠嗣、今小路大納言良冬、西園寺大納言實俊、裏築地大納言忠季、大炊御門中納言家信、四條中納言隆持、菊亭中納言公直、二條中納言師良、華山院中納言兼定、葉室中納言長顯、萬里小路中納言仲房、徳大寺中納言實時、二條宰相爲明、勘解由小路左大辨宰相兼綱、堀河宰相中將家賢、三條宰相公豐、坊城右大辨宰相經方、日野宰相教光、中御門宰相宣明、殿上人には日野左中辨時光、四條左中將隆家、日野右中辨保光、權右中辨親顯、日野左少辨忠光、右少辨平信兼、勘解由次官行知、右兵衛佐嗣房等なり。此の外先官の公卿、非參議、七辨八座、五位六位、乃至山門園城の僧綱、三門跡の貫首、諸院家の僧綱、竝に禪律の長老、寺社の別當神主に至るまで我先にと馳せ參りける間、さしも淺ましく賤しけなりし賀名生の山中、花の如く隠映して、如何なる辻堂温室風呂まで

○超涯 過分。
○不次 順序によらぬこと。
○北畠入道 親房。

○嚴君 父君。
○華族 清華の族。
朝臣に攝家、清華、名家といふ階級がある

も、幔幕引かぬ所もなかりけり。今參候する所の諸卿の敘位轉任は、悉く持明院殿よりなされたる官途なればとて各一級一階を貶されけるに、三條坊門大納言通冬卿と、御子左大納言爲定卿と許りは、本の官位に復せられけり。これは内々吉野殿へ申し通ぜられける故なり。京都より参り仕へられたる月卿雲客をば、降参人として官職を貶され、山中伺候の公卿殿上人をば、多年の勞功ありとて、超涯不次の賞を行はれける間、窮達忽ちに地を易へたり。故三位殿御局と申ししは、今天子の母后にて坐せば、院號蒙らせ給ひて、新待賢門院とぞ申しける。北畠入道源大納言は、准后の宣旨を蒙つて華つけたる大童子を召し具し、輦に駕して宮中へ出入す。其の粧ひ天下の耳目を驚かせり。此の人は故奥州の國司顯家卿の父、今皇后の嚴君にて坐すれば、武功といひ華族といひ、申すに及ばぬ所なれども、竹園攝家の外に未だ准后の宣旨を下されたる例なし。平相國清盛入道出家の後、准后の宣旨をかうむりたりしは、皇后の父たるのみにあらず、安徳天皇の外祖たり。また忠盛が子とは名づけながら、正しく白河院の御子なりしかは、華族も榮達も今の列には引きがたし。日野護持院僧正頼意は、東寺の長者醍醐の座主に補せられて、仁和寺諸院家をかねたり。大塔僧正忠雲は、梨本大塔の兩門跡を兼ねて、鎌倉の大御堂、天王寺の別當職に補せらる。此の外山中伺候の人々、名家は清花を超え庶子は嫡家を越えて、官職我意に任せたり。若し今の如くにて天下定まらば、歎く人は多くして悦ぶ者は少なかるべし。元

○瑤輿 玉の輿。

○宗房 定房の子。
○あり難し 容易ならぬことだ。

弘一統の政道此くの如くにて亂れしを、取つて誠めとせざりける心の程こそ愚かなれ。憂かりし正平六年の歲晩れて、新王の春立ちぬれども、皇居は猶も山中なれば、白馬踏歌の節會などは行はれず。寅の時の四方拜、三日の月奏ばかりあつて、後七日の御修法は文觀僧正承つて、帝都の眞言院にて行はる。十五日過ぎければ、武家より貢馬十四、沙金三千兩之を奏進す。其の外別進の貢馬三十四、卷絹三百匹、沙金五百兩、女院皇后三公九卿、漏るゝ方なく引進らす。二月二十六日、主上已に山中を御出であつて、瑤輿を先づ東條へ促さる。劍璽の役人許り衣冠正しくして供奉せらる。其の外月卿、雲客、衛府、諸司の尉は皆甲冑を帶して、前騎後乘に相隨ふ。東條に一夜御逗留あつて、翌日頼て住吉へ行幸なれば、和田楠以下、眞木野、三輪、湯淺入道、山本判官、熊野の八莊司、吉野十八郷の兵七千餘騎、路次を警固仕る。皇居は當社の神主津守國夏が宿所を俄に造り替へて臨幸なし奉りけり。國夏上階して從三位になさる。先例未だなき殿上の交はり、時に取つての面目なり。住吉に臨幸成つて三日に當りける日、社頭に一の不思議あり。敕使神馬を獻つて奉幣を捧げたりける時、風も吹かざるに、瑞籬の前なる大きな松一本中より折れて、南に向つて倒れにけり。敕使驚いて仔細を奏聞しければ、傳奏吉田中納言宗房卿「妖は徳に勝たず」と宣ひてさまでも驚き給はず。伊達三位有雅が武者所に在りけるが、此の事を聞きて、「あな淺ましや、此の度の臨幸成らせ給はん事はあり難し。其の故は昔殷の帝

○嗚呼の者 悟越の者。

○古歌 古今集に、「君が代の久しかるべきためしには兼ねてぞ植ゑしすみよしの松。」

○顯能 北畠親房の子。

大戊の時、世の傾かんずる兆を呈はして、庭に桑穀の木一夜に生ひて二十餘丈に蔓れり。帝大戊懼れて伊陟に問ひ給ふ。伊陟が申さく、「臣聞く妖は徳に勝たず、君の政の闕くる事あるに依つて、天此の兆を降すものなり。君早く徳を修め給へ。」と申しければ、帝則ち諫めに従ひて政を正し民を撫で賢を招き佞を退け給ひしかば、此の桑穀の木又一夜の中に枯れて、霜露の如くに消え失せたりき。かやうの聖徳を行はれてこそ、妖をば除く事なるに、今の御政道に於て其の徳何事なれば、妖は徳に勝たずとは、傳奏の申さるゝやらん。返すも心得難き才學かな。」と、眉を顰めてぞ申しける。其の夜如何なる嗚呼の者かしたりけん。此の松を削りて一首の古歌を翻案してぞ書きたりける。

君が代のみじかかるべきためしにはかねてぞ折れしすみよしの松

と落書にぞしたりける。住吉に十八日御逗留あつて、閏二月十五日天王寺へ行幸なる。此の時伊勢の國司中院右衛門督顯能、伊賀伊勢の勢三千餘騎を率して馳せ参られけり。同じき十九日八幡へ行幸成つて、田中法印が坊を皇居になされ、赤井大渡に關を居ゑて、兵山上山下に充滿ちたるは、一向合戦の御用意なりと、洛中の聞え穩かならず。之に依つて義詮朝臣、法勝寺の慧鎮上人を使にて、「臣不臣の罪を謝して、救免を蒙るべき由申し入るる處に、照臨已に下情を恤まれ、上下和睦の議、事定まり候ひぬる上は何事の用心か候べきに、和田楠以下の官軍等一向合戦の企てある由承り及び候。如何様の仔細にて候やらん。」

○直に 直接に。

○旗の手を解き 忍んで寄せる時は敵に知られぬやうに旗を巻くもの故こゝにこの旗の手を解くと云ふのである。

○侍所 諸侍の進退を司る所。その役の所司を侍所所司といふが所司を畧して侍所と云ふ。

と申されたり、主上直に上人に御對面あつて、「天下未だ恐懼を懐く間、唯非常を警めん爲に、官軍を召し具せらるといへども、君臣已に和睦の上は更に異變の議あるべからず。縱令讒者の説ありとも、胡越の心を存せずば太平の基たるべし。」と、救答あつてぞ返されける。綸言已に此の如し。士女の説何ぞ用ふるに足らんとて、義詮朝臣を始めとして、京都の軍勢、曾て今出し抜かるゝとは夢にも知らず、油斷して居たる處に、同じき二十七日の辰の刻に、中院右衛門督顯能、三千餘騎にて鳥羽より推寄せて、東寺の南、羅城門の東西にして、旗の手を解き、千種少將顯經五百餘騎にて、丹波路唐櫃越より推寄せて、西の七條に火を揚ぐる。和田、楠、三輪、越知、眞木、神宮寺、其の勢都合五千餘騎、宵より桂川を打ちわたつて、まだ篠晨の明けぬ間に、七條大宮の南北七八町に羣立つて、鬨の聲をぞ揚げたりける。東寺大宮の鬨の聲、七條口の煙を見て、「すはや楠寄せたり。」と、京中の貴賤上下遽て騒ぐ事なゝめならず。細川陸奥守顯氏は、千本に宿して居たりけるが、遙かに西七條の煙を見て、先づ東寺へ馳せ寄らんと、僅かに百四五十騎にて、西朱雀を下りに打ちけるが、七條大宮に控へたる楠が勢に取籠められ、陸奥守の甥、細川八郎矢庭に討たれければ、顯氏主従八騎になつて、若狭を指してぞ落ち行きける。細川讃岐守頼春は、時の侍所なりければ、東寺邊へ打出でて勢を集めんとて、手勢三百餘騎ばかりにて、これも大宮を下りに打ちけるが、六條邊にて敵の旗を見て、「著到も勢汰へも今はいらぬ所な

り。何様まづこれなる敵を一散らしちらさずでは、何處へか行くべき。」とて、三千餘騎控へたる和田楠が勢に相向ふ。楠が兵かねての巧みあつて、一板楯の裏に算を繁く打つて、階の如くに拵へたりければ、在家の垣に打懸け、究竟の射手三百餘人、家の上に登りて目の下なる敵を直下して射ける間、面を向くべき様もなく進みかねたる處を見て、和田楠五百餘騎轡を雙べてぞ懸けたりける。讃岐守が三百餘騎、左右へ颯と懸け阻てられ又取つて返さんとする處に、讃岐守が乗つたる馬、敵の打つ太刀に驚きて、弓杖三杖許りぞ飛んだりける。飛ぶ時鞍にあまされ眞倒にどうと落つ。落つると均しく敵三騎落ち合つて、起しも立てず斬りけるを、讃岐守寝ながら二人の敵の諸膝難ぎて切り居る、起き揚らんとする處を、和田が中間走り懸つて、槍の柄をとり延べて、喉吭を突きて突き倒す。倒る、處に落ち合つて首をば和田に取られにけり。

相公江州落ちの事

細川讃岐守は討たれぬ。陸奥守は何地とも知れず落ち行きぬ。今は重ねて戦ふべき兵なかりければ、宰相中將義詮朝臣、僅かに百四五十騎にて、近江をさして落ち給ふ。下賀高山の源氏共、かねて相圖を定めて、勢多橋をば焼き落しぬ。船はこなたに一艘もなし。山門へも、大慈院法印を天王寺より遣はされて、山徒皆君の御方になりぬと聞えつれば、

○外都の土 都外の土。

○腰刀 短刀。

○四十九院 大和國 豊郷村。

○吉野の帝 後村上 天皇。

落ち行く處を幸ひと、勢多へも定めて懸るらん。唯都にて討死すべかりつるものを、逢くこれまで落ちて、屍を湖水の底に沈め、名を外都の土に埋めん事、心憂かるべき恥辱かなと後悔せぬ人もなかりけり。敵の旗の見える腹切らんとて、義詮朝臣を始めとして、鎧をば皆脱ぎ置いて、腰刀許りにて、白沙の上に並び居給ふ。爰に相摸國の住人に曾我左衛門といひける者、水練の達者なりければ、向うの岸に遊び著いて、小舟のありけるを一艘領して、自ら櫓を推して漕ぎ寄する。則ち大將を始めとして、宗徒の人々二十餘人一艘に込み乗つて、先づ向うの岸に著き給ふ。其の後又小舟三艘求め出して、百五十騎の兵共皆渡してけり、これまでも猶敵の追つて懸る事なかりければ、棄てたる馬も物具も次第々々に渡し終て、船踏み返し突き流して、「今こそ活きたる命なれ」と、手を拍つて咄とぞ笑はれける。大將軍事故なく、近江の四十九院におはする由聞えければ、土岐大高伊豫守、東坂本へ落ちたりけるが、船に乗つて馳せ参る。佐々木の一黨は申すに及ばず、美濃、尾張、伊勢、遠江の勢共、我もくと馳せ参る程に、宰相中將又大勢をつけて、山陽山陰に牒じ合はせ、都を攻めんと議し給ふ。

持明院殿吉野遷幸の事 附 梶井宮の事

去る程に敵は都を落ちたれども、吉野の帝は洛中へ臨幸もならず、唯北畠入道准后顯能

○具忠 通清の子。

○三度大嘗會 三度は二度の誤りか。
○清暑堂の御神樂 十一月辰の日に行はる。

○兩院 本院と新院

卿父子ばかり京都に坐して、諸事の成敗を司り給ひて、其の外の月卿雲客は、皆主上の坐すについて、八幡にぞ伺候し給ひける。同じき二十三日、中院中將具忠を救使にて、都の内裏に坐す三種の神器を吉野の主上へ渡し奉る。これは先帝山門より武家へ御出でありし時、ありもあらぬものを取替へて、持明院殿へ渡されたりしものなればとて、聖の御箱をば棄てられ、寶劔と内侍所とをば、近習の雲客に下されて、衛府の太刀、装束の鏡にぞなされける。實にも誠の三種の神器にてはなけれども、已に三度大嘗會に會ひて、毎日の御神拜、清暑堂の御神樂、二十餘年になりぬれば、神靈もなどかなかるべきに、餘りに恐れなく凡俗の器物になされける事、如何あるべからんと、申す族も多かりけり。同じき二十七日北畠右衛門督顯能、兵五百餘騎を率して持明院殿へ参り、先づ其の邊の辻々門々を固めさせければ、「すはや武士共が参りて、院内を失ひ進らせんとするは。」とて女院皇后御心を迷はして伏し沈ませ給ふ。内侍、上童、上臈、女房などは、向後も知らず逃げふためいて此處彼處に立ちさまよふ。されども顯能卿、穩やかに西の小門より参りて、四條大納言隆蔭卿を以て、「世の鎮まり候はん程は、皇居を南山に移し進らすべしとの敕定にて候。」と奏せられければ、兩院、主上、東宮あきれさせ給へる許りにて、冤角の御言にも及ばず、唯御涙にのみしをれさせ給ひて、羅穀の御袂絞る許りにになりけり。良暫くあつて、新院御涙を抑へて仰せられけるは、「天下亂に向ふ後、僅かに帝位を踐むと雖も、叡

○椿嶺の陰にも寄り 隠居すること。椿嶺は男山を云ふ。
○花山の跡 花山院の御出家あつた事跡
○釋門 僧侶。

○本院 光嚴天皇。
○新院 光明天皇。
○主上 崇光天皇。
○春宮 直仁親王。
○馬道 家と家との間の通ひ廊下。

○篤直 丹波長直の子。

慮より起りたる事にあらざれば一事も世の政を御心に任せず。北辰光消えて、中夏道闇き時なれば、共に椿嶺の陰にも寄り、遠く花山の跡をも追はばやとこそ思召しつれども、其れも叶はぬ折節の憂さ豈叡察なからんや。今天運圖に膺り萬人望みを達する時至れり。乾臨曲けて恩免を蒙らば、速かに釋門の徒となつて、邊鄙に幽居を卜めんと思ふ。此の一事具に奏達あるべし。」と仰せ出されけれども、顯能再往の救答に及ばず、「已に綸命を蒙る上は、押へては如何か奏聞を経候べき。」とて、御車を二輛差寄せ、「あまりに時刻移り候。」と急げば、本院、新院、主上、春宮、御同車あつて、南の門より出御なる。さらでだに霞める花の木の間の月、これやかぎりの御涙に、常よりもなほ靡なり。女院皇后は、御簾の内几帳の陰に伏し沈ませ給へば、此處の馬道、彼處の局には、聲もつゝ、まず泣き悲しむ。御車を曉の月に輓つて、東洞院を下りに過ぎければ、故郷の梢漸く幽にして、東嶺に響く鐘の聲、明け行く雲に横はる。東寺までは、月卿雲客數多供奉せられたりけれども、叶ふまじき由を顯能申されければ、三條中將實春、典藥頭篤直ばかりを召し具せられて、見馴れぬ兵に打圍まれ、鳥羽まで御幸なりたれば、夜は早若々と明けはてぬ。此處にて御車を駐めて、怪しげなる網代輿に召し替へさせ進らせ、日を経て吉野の奥賀名生といふ所へ御幸成し奉る。此の邊の民どもが、吾が君とて仰ぎ奉る吉野の帝の皇居だにも、黒木の柱竹椽、圍ふ垣ほのしばしだにも、柄みぬべくもなきやどりなり。況んや敵の爲に囚はれ、

○衆頂 風が起つて
岩穴枯木にあたる響

○梶井二品親王 尊
胤親王。後伏見院の
御子。

○慈覺大師 名は圓
仁。下野の人。

○三千の貴頂 延暦
寺三千の衆僧の頭領
貴頂は貴首に同じ。
○あままし 豫定。

配所の如くなる御栖居なれば、年経て頹れける庵室の、軒を受けたる杉の板屋の、目もあはぬ夜の寥しさを、こと問ふ雨の音までも、御袖を濕す便りなり。衆籟曉寒くして月庭前の松にかゝり、羣猿暮に叫んで風洞庭の雲をおくる。外にて聞きし住み憂さは、數にもあらぬ深山かなと、主上、上皇、いつとなく仰せ出さる、度毎に、御涙の乾く隙もなし。梶井二品親王は、此の時天台座主にておはしけるが、同じく召捕られさせ給ひて、金剛山の麓にぞおはしける。此の宮は本院の御弟、慈覺大師の嫡流にて、三度天台座主にならせ給ひしかば、門跡の富貴ならびなく、御門徒の羣集雲の如し。獅子田樂を召され、日夜に舞ひ歌はせ、茶飲連歌師を集めて、朝夕遊び興せさせ給ひしかば、世の譏り山門の訟へは止む時なかりしかども、御心の中の樂しみは、類あらじと見えたりしに、今引替へたる配所の如くなる御栖居、山深く里遠くして、鳥の聲だにもかすかなるに、御力者一人より外は召仕はる、人もなし。隙あらはなる柴の庵に、袖を片敷く菩提、露は枕に結べども、都に歸る夢はなしと、御心を傷ましめ給ふについても、佛種は縁より起る事なれば、よしや世の中かくても遂にはてなば、三千の貴頂の名を捨てて、一向桑門の客とならんと、思召しけるこそ哀れなれ。天下若し皇統に定まつて世も閑かならば、御遁世の御あましも末通りぬべし。若し又武家強くして、南方の官軍打負けば、失ひ奉る事も何様ありぬべしと思召し續くる時にこそ、さしも浮世を此の儘にて、頓てもさらばしづまれかすと、卻つ

て御祈念も深かりけり。

卷第三十一

新田義兵を起す事

○吉野殿 後村上帝
 ○關許堅固 佛涅槃の翌日より五百年を解脫堅固、次の五百年を禪定堅固、次の五百年を多聞堅固、次の五百年を關許堅固といふ。
 ○釣臺 嚴子陵が釣を垂れた處。
 ○山嶮し 山は鄭大尉が薪をまつた白鶴山。
 ○一業所感 善惡の業によつて過去未來の善惡の生ずるを感得すること。
 ○餓鬼道 地下で閻魔界の邊。常に飢餓を受ける故に云ふ。
 ○修羅道 須彌山の北大海の底又は橋岸等にある云ふ。

吉野殿武家に御合體ありつる程こそ、都鄙暫く靜かなりつれ。御合體忽ちに破れて、合戰に及びし後、畿内洛中は僅かに王化に隨ふと雖も、四夷八蠻猶武威に屬する者多かりけり。これに依つて諸國七道の兵彼を討ちこれを従へんと互に威を立つる間、合戰の止む時もなし。已に關許堅固になりぬれば、これならずとも靜かなるまじき理なり。元弘建武の後より、天下久しく亂れて、一日も未だ治まらず。心あるも心なきも、如何なる山の奥もがなと、身の隱家を求めぬ方もなけれど、何處も同じうき世なれば、嚴子陵が釣臺も脚を伸ぶるに水冷じく、鄭太尉が幽栖も薪を擔ふに山嶮し。如何なる一業所感にか、斯かる亂世に生れ逢ひて、或は餓鬼道の苦しみを生きながら受け、或は修羅道の奴と死せざる前になりぬらんと、歎かぬ人はなかりけり。此の時、故新田左中將義貞の次男左兵衛佐義興、三男少將義宗、従父兄弟左衛門佐義治三人、武藏、上野、信濃、越後の間に、在所を定めず身を匿して、時を得ば義兵を起さんと企て居たりける處へ、吉野殿未だ住吉に御座ありし時、由良新左衛門入道信阿を救使にて、「南方と義詮と御合體の事は暫時の智謀なり

○我々は かが身自らでは。
 ○内狀 内密の書狀
 ○關戸 多摩川の邊の一驛。
 ○入間河 川越の傍を流れる川。
 ○馬廻り 將軍の馬側。

と聞ゆる處なり。乃ち節に迷ひ時を過すべからず、早く義兵を起して、將軍を追討し、宸襟を休め奉るべし。」とぞ仰せ下されける。信阿急ぎ東國に下つて、三人の人々に逢ひて事の仔細を相觸れける間、さらば聽て勢を相催せとて、廻文を以て東八箇國を觸れ廻るに、同心の一族八百人に及べり。中にも石堂四郎入道は、近年高倉殿に屬して、薩埵山の合戰に打負けて、甲斐なき命ばかりを助けられ、鎌倉にありけるが、大將に憑まれたる高倉禪門は毒害せられぬ。我とは事を起し得ず、哀れ謀叛を起す人のあれかし、與力せんと思ひける處に、新田左兵衛佐、同少將の許より内狀を通じて、事のよしを知らせたりければ、流れに棹と悦びて、聽て同心してけり。又三浦介、葦名判官、二階堂下野二郎、小俣宮内少輔も高倉殿方にて、薩埵山の合戰に打負けしかば、降人になつて命をば續ぎたれども、人の見る處世の間く處口惜しきものかな。哀れ謀叛を起さばやと思ひける處に、新田武藏守、同左衛門佐の方より、憑み思ふ由を申したりければ、願ふ處の幸ひかなと悦びて、則ち與力してけり。此の人々密に扇谷に寄り合ひて評定しけるは、「新田の人々旗を擧げて上野國に起り、武藏國へ打越ゆると聞えば、將軍は定めて鎌倉にてはよも待ち給はじ、關戸入間河の邊に出で合ひてぞ防ぎ給はんすらん。我等五六人が勢何となくとも、三千騎はあらんすらん。將軍戰場に打出で給はんする時、態と馬廻りに控へて、合戰已に半ばならんする最中、將軍を真中に取籠め奉り、一人も残らず討ち取つて、後に御陣へは參り候

○櫛の齒を引くが如し 後からくさ使者が續いて行く貌。○ござんなれ にごあるなれ。○開かせ給ひて 退却なされて。

べし。」と、新田の人々の方へ相圖を堅く定めて、石堂入道、三浦介、小俣、葦名は、はたらかで鎌倉にこそ居たりけれ。諸方の相圖事定まりければ、新田武藏守義宗、左兵衛佐義治、閏二月八日、まづ手勢八百餘騎にて、西上野に打出でらる。これを聞きて國々より馳せ参りける當家他門の人々、先一族には、江田、大館、堀口、篠塚、羽川、岩松、田中、青龍寺、小幡、大井田、一井、世良田、籠澤、外様には宇都宮三河三郎、天野民部大輔政貞、三浦近江守、南木十郎、西木七郎、酒勾左衛門、小畑左衛門、中金、松田、河村、大森、葛山、勝代、蓮沼、小磯、大磯、酒間、山下、鎌倉、玉繩、梶原、四宮、三宮、南西高田、中村、兒玉黨には淺羽、四方田、庄、櫻井、若兒玉、丹の黨には安保信濃守、子息修理亮、舍弟六郎左衛門、加治豊後守、同丹内左衛門、救使河原丹七郎、西黨、東黨、熊谷、太田、平山、私市、村山、横山、猪俣黨、都合其の勢十萬餘騎、所々に火をかけて、武藏國へ打越ゆる。之に依つて武藏上野より早馬を打つて鎌倉へ急を告ぐる事、櫛の齒を引くが如し。」さて敵の勢は何程あるぞ。」と問へば、使者共皆、「二十萬騎には劣り候はじ。」とぞ答へける。仁木細川の人々これを聞きて、さてはゆ、しき大事ござんなれ。鎌倉中の勢千騎にまさらじと覺ゆるなり。國々の軍勢は縦令参るとも、今の用には立ち難し。千騎に足らぬ御勢を以て、敵の二十萬騎を防がん事は、叶ふべしとも覺え候はず。唯先づ安房上總へ開かせ給ひて、御勢をつけて御合戦こそ候はめ。」と申されけるを、將軍つくづくと

聞き給ひて、一軍の習ひ落ちて後利ある事千に一つの事なり。勢を催さんために、安房上總へ落ちなば、武藏、相摸、上野、下野の者共は、縦令尊氏に志ありとも、敵に隔てられて御方になる事あるべからず。又尊氏鎌倉を落ちたりと聞かば、諸國に敵になる者多かるべし。今度に於ては、縦令小勢なりとも、鎌倉を打出でて敵を道に待ちて、戦ひを決せんにはしかじ。」とて、十六日の早旦に、將軍僅かに五百餘騎の勢を率し、敵の行き合はんずる所までと武藏國へ下り給ふ。鎌倉より追ひ著き奉る人々には、畠山上野介、子息伊豆守、畠山左京大夫、舍弟尾張守、舍弟大夫將監、其次式部大輔、仁木左京大夫、舍弟越後守、三男修理亮、岩松式部大輔、大島讃岐守、石堂左馬頭、今川五郎入道、同式部大輔、田中三郎、大高伊豫守、同土佐修理亮、太平安藝守、同出羽守、宇津木平三、穴戸安藝守、山城判官、曾我兵庫助、梶原彈正忠、二階堂丹後守、同三郎左衛門、饗庭命鶴、和田筑前守、長井大膳大夫、同備前守、同治部少輔、子息右近將監等なり。元より隠謀ありしかば、石堂入道、三浦介、小俣宮内少輔、葦名判官、二階堂下野次郎、其の勢三千餘騎は、他の勢を交へず、將軍の御馬の前後に透間もなくぞ打つたりける。久米河に一日逗留し給へば、河越彈正少弼、同上野守、同唐戸十郎左衛門、江戸遠江守、同下野守、同修理亮、高坂兵部大輔、同下野守、同下總守、同掃部助、豊島彈正左衛門、同兵庫助、土屋備前守、同修理亮、同出雲守、同肥後守、土肥次郎兵衛入道、子息掃部助、舍弟甲斐守、同三郎左衛門

○久米河 武藏國狭山の近所。

○呼びのけて 人々の無い場所に呼びよせて。

○一定 きつこ。

○相構へて 必ず。

二宮但馬守、同伊豆守、同近江守、同河内守、曾我周防守、同三河守、同上野守、子息兵庫助、澀谷木工左衛門、同石見守、海老名四郎左衛門、子息信濃守、舍弟修理亮、小早川刑部大輔、同勘解由左衛門、豊田因幡守、狩野介、那須遠江守、本間四郎左衛門、鹿島越前守、島田備前守、淨法寺右近大夫、白鹽下總守、高山越前守、小林右馬助、瓦葺出雲守見田常陸守、古尾谷民部大輔、長峯石見守都合其の勢八萬餘騎、將軍の御陣へ馳せ参る。已に明日矢合とさだめられたりける夜、石堂四郎入道、三浦介を呼びのけて宣ひけるは、「合戦已に明日と定められたり。此の間相謀りつる事を、子息にて候右馬頭に、嘗て知らせ候はぬ間、此の者一定一人残り止まつて、將軍に討たれ進らせんと覚え候。一家の中を引分けて、義卒に與し、老年の頭に兜を戴くも、若し望み達せば、後榮を子孫に残さんと存する故なり。されば此の事を告げ知らせて、心得させばやと存するは如何候べき。」と問ひ給ひければ、三浦「實にもこれ程のことを告げ進らせられざらんは、後悔あるべく覚え候。急ぎ知らせ進らせ給へ。」と申しける間、石堂禪門、子息右馬頭を呼んで、「我薩埵山の合戦に打負けて、今降人の如くなれば、仁木、細川等に押しすゑられて、人数ならぬ有様御邊も定めて遺恨にぞ思ふらん。明日の合戦に、三浦介、葦名判官、二階堂の人々と引合つて、合戦の最中將軍を討ち奉り、家運を一戦の間に開かんと思ふなり。相構へて其の旨を心得て、我が旗の趣に従はるべし。」といはれければ、右馬頭大きに氣色を損じて、「弓

○えこそ申すまじけれ 申されまじまい

○いざさせ給へ 支度し給へ。

矢の道貳心あるを以て恥とす。人の事は知らず、某に於ては將軍に深く恐まれ進らせたる身にて候へば、後矢射て名を後代に失はんとは、えこそ申すまじけれ。兄弟父子の合戦古より今に至るまでなき事にて候はず。何様三浦介、葦名判官、隠謀の事を將軍に告げ申さずば大きな不忠なるべし。父子の恩義已に絶え候ひぬる上は、今生の見參は之を限りと思召し候へ。」と、顔を赤め腹を立てて、將軍の御陣へぞ参られける。父の禪門大きに興を醒して、急ぎ三浦が許に行きて、「父の子を思ふ如く、子は父を思はぬ者にて候ひけり。此の事右馬頭に知らせず、敵のうちに残つて討たれもやせんすらんと思ふ悲しさに、告げ知らせて候へば、以ての外に氣色を損じて、此の事將軍に告げ申さずは叶ふまじきとて、歸り候ひつるは、如何にこの者が氣色、よも告げ申さぬ事は候はじ、如何様聽て討手を向けられんと覚え候。いざさせ給へ。今夜我等が勢を引分けて、關戸より武藏野へ廻つて、新田の人々と一つになり、明日の合戦を致し候はん。」と宣ひければ、多日の謀忽ちに顯はれて、卻つて身の禍ひになりぬと恐怖して、三浦、葦名、二階堂手勢三千餘騎を引分け、寄手の勢に加はらんと關戸を廻つて落ち行く。これぞ早將軍の御運盡きざる所なる。

武藏野の合戦の事

三浦が相圖相違したるをば、新田武藏守夢にも知らず、時刻よくなりぬと急ぎ、明くれ

○小手差原 川越の西北方に在る。
○一揆 軍人の一團

○驅手 騎馬武者。
○小手の袋 兩の腕を被ふ所謂臂鏡。
○四幅袴 布四幅を以て縫つた袴で前後各二幅づつである。
○中間小者等の著けたもの。

ば閏二月二十日の辰の刻に、武藏野の小手差原へ打臨み給ふ。一方の大將には、新田武藏守義宗五萬餘騎、白旗、中黒、頭黒、團扇の旗は兒玉黨、坂東の八平氏、赤印一揆を五手に引分けて、五所に陣をぞ取りたりける。一方には新田左兵衛佐義興を大將にて、其の勢都合二萬餘騎、かたばみ、鷹の羽、一文字、十五夜の月弓一揆、引きては一人も歸らじとこれも五手に一揆して四方六里に控へたり。一方には脇屋左衛門佐義治を大將にて、二萬餘騎、大旗、小旗、下濃の旗、鉞形一揆、母衣一揆、これも五箇所に陣を張り、射手をば左右に進ませて驅手は後に控へたり。敵小手差原にありと聞えければ、將軍十萬餘騎を五手に分けて、中道よりぞ寄せられける。先陣は平一揆三萬餘騎、小手の袋、四幅袴、笠符に至るまで、一色に皆赤かりければ、殊更耀いてぞ見えたりける。二陣には白旗一揆二萬餘騎、白葦毛、白瓦毛、白佐目、鴛毛なる馬に乗つて、練員の笠符に白旗を差したりけるが、敵にも白旗ありと聞きて俄に短くぞ切つたりける。三陣には花一揆、命鶴丸を大將として六千餘騎、萌黄、緋緋、紫絲、卯の花のづまとりたる鎧に、薄紅の笠符をつけ、梅の花一枝折つて、兜の眞向に差したれば、四方の嵐吹く度に鎧の袖や勻ふらん。四陣は御所一揆とて三萬餘騎、二引兩の旗の下に將軍を守護し奉りて、御内の長者、國大名、閑かに馬を控へたり。五陣に仁木左京大夫頼章、舍弟越後守義長、三男修理亮義氏、其の勢三千餘騎、笠符をもつけず旗をも差さず、遙かの外に引きのけて、馬より下りてぞ居たり

○三十三天 四天、初利、兜傘などの諸天。
○金輪際 世界を載せた須彌山の根のころ。
○相懸りにかゝつて 總攻めに攻めて。

ける。これは兩方大勢の合戦なれば、十度二十度懸け合ひく戦はんには、敵も御方も氣を屈し、力疲れぬ事あるべからず。其の時新手に代はりて、敵の大將の控へたらん所を見澄して、夜討にせんが爲なりけり。去る程に新田足利兩家の軍勢二十萬騎、小手差原に打臨んで、敵三聲鬨を作れば御方も三度鬨の聲を合はす。上は三十三天までも響き下は金輪際までも聞ゆらんとおびたし。先づ一番に新田左兵衛佐が二萬餘騎と、平一揆三萬餘騎と懸け合ひて、追つつ返しつ合ひつ分れつ、半時許り相戦つて、左右へ颯と引退きたれば、兩方に討たる、兵八百餘人、創を被る者は未だ計ふるに違あらず。二番に脇屋左衛門の門佐が二萬餘騎と、白旗一揆が二萬七千餘騎と、東西より相懸りにかゝつて、一所に颯と入り亂れ、火を散らして戦ふに、汗馬の馳せ違ふ音太刀の鏗音、天に光り地に響く。或は引組んで首を取るもあり取らるゝもあり、或は弓手妻手に相附けて、切つて落すもあり落さるゝもあり。血は馬蹄に蹴懸けられ紅葉に洒ぐ雨の如く、屍は野徑に横はつて尺寸の地も餘さず、追ひ靡け懸け立てられ、七八度が程戦つて東西へ颯と別れたれば、敵御方に討たる、者又五百人に及べり。三番に饗庭命鶴生年十八歳、容貌當代無雙の兒なるが、今日花一揆の大將なれば、殊更花を折つて出で立ち、花一揆六千餘騎が眞前に懸け出でたり。新田武藏守これを見て、「花一揆を散らさん爲に兒玉黨を向くべし。團扇の旗は風を含めるものなり。」とて、兒玉黨七千餘騎を差向けらる。花一揆皆若武者なれば思慮もなく敵にか

○軍立陣の備へ。

○引くも策を擧げ伊云
云 退却する者も追
ふ者も互に馬脚を早
めたので。

○石濱 武藏國橋場
町の邊。

○高紐 鎧の肩の部
分にあつて前胸と後
胸とを結びつけたも
の。

○酉の下り 今の午
後六時過ぎ。

かりて、一戦ひ戦ふとぞ見えし。兒玉黨七千餘騎に揉み立てられ、一返しも返さずばつと引く。自餘の一揆は、懸る時は一手になつて懸り引く時は左右へ颯と別れて、新手を入れ替へさすればこそ、後陣は騒がで懸け違ひたれ。これは其の軍立かひなくして、將軍の後に控へておはする陣の中へ、こほれ落ちて引く間、新手はこれに蹴立てられ進み得ず、敵は氣に乗つて勝鬨を作り懸け、攻め附けて追ひかくる。斯くては叶ふまじ、些し引退きて一度に返せといふ程こそありけれ、將軍の十萬餘騎、混引きにひき立つて、曾て後を顧みず。新田武藏守義宗、旗より先に進んで、「天下の爲には朝敵なり。我が爲には親の敵なり。唯今尊氏が首を取つて、軍門に曝さずんば、何時の時をか期すべき。」とて、自餘の敵共の南北へ分れて引くをば少しも目につかぬ、唯二引兩の大旗の引くにつきて、何處までも追ひ驅け給ふ。引くも策を擧げ、追ふも逸足を出せば、小手差原より石濱まで坂東道已に四十六里を片時が間にぞ追ひつきたる。將軍石濱を打渡り給ひける時は、已に腹を切らんとて、鎧の上帯切つて投げすてて高紐を放さんとし給ひけるを、近習の侍共二十餘騎返し合はせて、追ひ驅くる敵の河中まで渡りかけたると、引組みく討死しける其の間に、將軍急を遁れて向うの岸へかけ上り給ふ。落ち行く敵は三萬餘騎、追つ懸くる敵は五百餘騎、河の向ひの岸高うして、屏風を立てたる如くなるに、數萬騎の敵返し合はせて、此を先途と支へたり。日已に酉の下りになつて河の淵瀬も見分かざれば、新田武藏守義宗

○渡すに及ばず
すこども出來ず。

○色代 會釋。

續いて渡すに及ばず、跡より續く御方はなし。安からぬものかなと牙を嚙みて本陣へと引返さる。又將軍の御運の強きところなり。新田兵衛佐と脇屋左衛門佐とは一所になつて、白旗一揆が二三萬騎北に分れて引きけるを、これぞ將軍にておはすらん。何處までも追つ攻めて討たんとて、五十餘町まで追つ懸けて行く處に、降參の者共が馬より下り、各對面して色代しける程に、是に會釋せんと、所々にて馬を控へ會釋し給ひける間、軍勢は皆逃ぐるを追つて東西へ隔たりぬ。義興と義治と僅かに三百餘騎になつてぞおはしける。仁木左京大夫頼章、舍弟越後守義長は、元來かやうの所を伺つて未だ一戦もせず、馬を休めて葦原の中に隠れて居られたりけるが、これを見て、「未々の源氏國々の附勢をば、何千騎討つても何かせん。あはれ幸ひや、天の與へたる所かな。」と悦んで、其の勢三千餘騎、たゞ一手になつて押寄せたり。敵大勢なれば、定めて鶴翼に開いて、取籠めんすらんと推量して、義興義治魚鱗に連なつて、轡を並べて、敵の中を破らんと見繕ふ處に、仁木越後守義長これを屹と見て、「敵の馬の立て様、軍立、尋常の葉武者にあらず。小勢なればとて、侮つて中を破らるな。一所に馬を打寄せて、敵懸るとも懸け合はずな。前後に常に目を賦つて、大將と思しき敵あらば組んで落ちて首をとれ。葉武者懸らば射落せ。敵に力を盡させて御方少しも漂はずんば、無勢に多勢勝たざらんや。」と、委細に手立を成敗して一所に勢をぞ圍みたる。案に違はず義興義治、目の前に控へて欺く敵にこらへかねて、三百餘騎

○手立を成敗して
戰畧を定めて。
○欺く 嘲る。

○些しも轟かず
しも動揺せず。少

○袖の三の板 袖の
三枚目の板。
○草摺の横縫 草摺
の最下の板に編しの
糸を横に縫ったもの

○已下 以下。

を一手になし、敵の真中を懸け破つて、脚手十文字に懸け立てんと喚いて懸りけれども、仁木越後守些しも轟かず。「真中を破らるな。敵に氣を盡させよ。」と下知して、彌馬を立て寄せ、透き間もなく控へたれば、面にある兵許り互に討たれて颯と引きけれども、追つても更に懸らず、裏へ通りて戦へども、面は些しも騒がず。東へ廻れども西は閑かなり。北へ廻れども南は曾て轟かず。懸け寄せれば打違へ、組んで落つれば落ち重なる、千度百度懸くれども、強陣勢堅くして大將退く事なければ、義興義治氣疲れて東をさして落ちて行く。二十餘町落ち延びて、誰々討たれたると計ふるに、三百餘騎ありつる兵ども、百餘騎討たれて二百餘騎ぞ残りける。義興兜の鏝、袖の三の板切り落されて、小手のあまり、膝當のはづれに、薄手三所負はれたり。義治は太刀かけ、草摺の横縫、皆突き切られて、威毛許り續きたるに、鉞形兩方切り折られ、星も少々削られたり。太刀は鑢木打折れぬ。中間に持たせたる長刀を持たれたりけるが、峯はさゝらの子の如く切られて、刃は鋸の様にぞ折れたりける。馬は三所まで切られたりけるが、下りて乗替に乗りたまへば、倒れて廳て死ににけり。兩大將斯くの如く、自ら戦つて創を被る上は其の已下の兵共痛手を負ひ、切創の二三箇所負はぬ者は希なり。新田武藏守、將軍をば討ち漏らしぬ。今日は日に暮れぬれば、勢を集めて明日石濱へ寄せんとて小手差原へ打歸る。「兵衛佐殿何處にか控へ給ひぬる。」と、行き合ふ兵共に問ひ給へば、「兵衛佐殿と脇屋殿とは、一所に控へて御渡

○笛吹峠 碓氷峠。

○浪にも著かず云々
寄る邊ないさまを
船の漂へるに譬へ云
ふ。
○足利左馬頭 基氏

り候ひつるが、仁木殿に打負けて、東の方へ落ちさせ給ひつるなり。」とぞ答へける。さて爰に見えたる箒は、敵か御方かと問ひ給へば、「此の邊に御方は一騎も候まじ。これは仁木殿兄弟の勢か、白旗一揆の者どもが、焼いたる箒にてぞ候らん。小勢にて此の邊に御座候はん事は如何と覚え候へば、夜に紛れて急ぎ笛吹峠の方へ打越えさせ給ひ候て、越後信濃の勢を待ち調へられ候て、重ねて御合戦候へかし。」と申しければ、武藏守暫く思案して、「實にも此の議然るべし。」とて、「笛吹峠は何處ぞ。」と、問ひく夜中に落ち給ふ。

鎌倉合戦の事

新田左兵衛佐脇屋左衛門門佐の二人は、纔かに二百餘騎に打ちなされ、武藏守に離れぬ、御方の勢共は何地へか引きぬらん、浪にも著かず磯にも離れたる心地して、皆馬より下り居て休まれけるが、「此の勢にては上野へも歸り得まじ。落ちて行くべき方もなし。討死すべき命なれば、鎌倉へ打入つて、足利左馬頭に逢ひて、命を失はばや。」とのたまへば、諸人皆此の議に同じて、一向討死せんと志し、思ひくの母衣懸けて、鎌倉へとぞ赴かれける。夜半過ぐる程に關戸を過ぎ給ひけるに、勢の程五六千騎もあるらんと覺えて、西を指して下る勢に行き合ひ給ひて、これは搦手に廻る勢にてぞあるらん。さては鎌倉までも行き著かずして、關戸にてぞ骸をば曝すべきにてありけりと、面々に思ひ定めて一處に馬を

○魯陽云々 淮南子に「魯陽公與韓遼戰酣日暮、援戈搗之、日爲反三舍。」

○ひつ勝つて ひつは接頭語。勝つては選り抜いて。

かけ寄せ、「これは誰殿の勢にて御渡り候ぞ。」と問はれければ、「これは石堂入道、三浦介、新田殿へ御参り候なり。」とぞ答へける。義興義治手を拍つて、こはいかにと悦び給ふ事限りなし。唯魯陽が朽骨二度連なつて韓遼難と戦ひを致せし時、日を三舍に返し悦びも、之には過ぎじとぞ覺えける。馳て此の勢と打連れて、神奈川に著きて鎌倉の様を問ひ給へば、「鎌倉には將軍の御息左馬頭基氏を警固し奉つて、南遠江守、安房上總の勢三千餘騎にて、けはひ坂、巨福呂坂を切り塞ぎて用心厳しく見え候ひしが、昨日の朝敵三浦にありと聞いて、打散らさんとて向はれ候ひしかども、虚言にてありけり」とて、唯今鎌倉へ打歸らせ給ひて候よ。」とぞ語りける。「さては唯今の合戦ござんなれ、爰にて軍の用意をせよ。」とて、兵糧をつかひ馬に糠かはせて、三千餘騎二手に分かれて、鶴岡へ旗差少々差遣はして、大御堂の上より真下りにぞ押寄せたる。鎌倉勢は唯今三浦より打歸つて、未だ馬の鞍をも下さず鎧の上帯をも解かぬ程なれば、若宮小路へ打出でて、唯一處に控へたり。小俣小次郎をば、今日の軍奉行と今朝より定められたりければ、手勢七十餘騎ひつ勝つて、敵の羣立つて控へたる中へつと驅け入り、火を散らして切り亂す。三浦、葦名、二階堂の兵共、案内は知つたり、人馬は未だ疲れず、此處の谷彼處の小路より、どつと喚いては懸け入り、さつと懸け破つては裏へ抜け、谷々小路々々に入り亂れてぞ戦ひたる。兵衛佐義興は、濱面の在家のはづれにて、敵三騎切つて落し、大勢の中をつと懸け抜けける處にて、

○總角著 鎧の後で總角をつける所。
○鞍坪 鞍の橋の所

○成敗 支配。

○將軍の御運に云々 尊氏の運命が強いので自然遅延して。

小手の手覆を切りながさる、太刀にて、手綱のまがりをつんど切られて、弓手の片手綱土に下り馬の足に踏まれけるを、太刀をば左の脇に挟み、鎧の鼻に落ちさがり、左右の手綱を取合はせて結ばれけるを、敵三騎能き隙かなと馳せ寄つて、兜の鉢と總角著とを三打四打した、かに切りけれども、義興些しも騒がず、閑かに手綱を結んで鞍坪に直り給へば、三騎の敵はつと馬を懸けのけて、「あはれ大剛の武者や。」と、高聲に二聲三聲感じて御方の勢にぞ馳せつきたる。塔辻の合戦難儀なりと見えければ、脇屋左衛門佐と、小俣少輔二郎と一手になつて、二百餘騎喚いて懸られけるに、南遠江守懸け立てられて、旗を巻いて引退くを見て、谷々に戦ひける兵ども、十方へ落ち散りける間、一所に打寄ること叶はずして、百騎二百騎思ひくりに落ちて行く。されども三浦石堂が兵共、あまりに戦ひくたびれ奉つて、石濱を指して落ちられけり。新田左兵衛佐、脇屋左衛門佐、二月十三日の鎌倉の軍に打勝つてこそ、會稽の恥を雪むるのみにあらず、兩大將と仰がれて、暫く八箇國の成敗に居ゑられけり。

笛吹峠軍の事

新田武藏守は、將軍の御運に退緩して、石濱の合戦に本意を達せざりしかば、武藏國を

○上杉民部大輔 憲

○先朝 後醍醐天皇
○上野親王 宗良親王。信濃宮にも上野宮とも稱す。

前になし、越後信濃を後に當てて、笛吹峠に陣を取つてぞおはしける。これを聞いて打寄る人々には、大江田式部大輔、上杉民部大輔、子息兵庫助、中條入道、子息佐渡守、田中修理亮、堀口近江守、羽川越中守、荻野遠江守、酒勾左衛門四郎、屋澤八郎、風間信濃入道、舍弟村岡三郎、堀兵庫助、蒲屋美濃守、長尾右衛門、舍弟彈正忠、仁科兵庫助、高梨越前守、大田瀧口、干屋左衛門大夫、矢倉三郎、藤崎四郎、頼尻十郎、五十嵐文四、同文五、高橋大五郎、同大三郎、友野十郎、滋野八郎、禰津小二郎、舍弟修理亮、神家の一族三十三人、滋野の一族三十一人、都合其の勢二萬餘騎、先朝第二宮上野親王を大將にて、笛吹峠へ打出づる、將軍小手差原の合戦に事故なく、石濱におはするよし聞えければ、馳せ参りける人々には、千葉介、小山判官、小田少將、宇都宮伊豫守、常陸大丞、佐竹右馬助、同刑部大輔、白川權少輔、結城判官、長沼判官、河越彈正少弼、高坂刑部大輔、江戸豊島、古尾谷兵部大輔、見田常陸守、土肥兵衛入道、土屋備前司、同修理亮、同出雲守下條小三郎、二宮近江守、同河内守、同但馬守、同能登守、曾我上野守、海老名四郎左衛門、本間、澀谷、曾我三河守、同周防守、同但馬守、同石見守、石濱上野守、武田陸奥守子息安藝守、同薩摩守、同彈正少弼、小笠原、坂西、一條三郎、板垣三郎左衛門、逸見美濃守、白洲上野守、天野三河守、同和泉守、狩野介、長峯勘解由左衛門、都合其の勢八萬餘騎、將軍の御陣へ馳せ参る。鎌倉には、義興義治七千餘騎にて、著到をつくと聞え、

○案内者 地理に委しい者。

武藏には新田義宗、上杉民部大輔、二萬餘騎にて控へたりと聞ゆ。何處へむかふべきと評定ありけるが、先づ勢の勢せぬ前に、大敵に打勝ちなば、鎌倉の小勢は戦はずとも退散すべしと、衆議一途に定まつて、將軍同じき二月二十五日石濱を立つて、武藏府に著きたまへば、甲斐源氏、武田陸奥守、同刑部大輔、子息修理亮、武田上野守、同甲斐前司、同安藝守、同彈正少弼、舍弟薩摩守、小笠原近江守、同三河守、舍弟越後守、一條四郎、板垣四郎、逸見入道、同美濃守、舍弟下野守、南部常陸守、下山十郎左衛門、都合二千餘騎にて馳せ参る。同じき二十八日將軍笛吹峠へ押寄せて、敵の陣を見給へば、小松生ひ茂つてまへに小川流れたる山の南を陣に取つて、峯には錦の御旗を打立て、麓には白旗、中黒、榜欄の葉、梶の葉の紋書きたる旗共、その數滿々ちたり。先づ一番に新手案内者なればとて、甲斐源氏三千餘騎にて押寄せたり。新田武藏守と戦ふ。之も新手の越後勢、同三千餘騎にて相懸りに懸りて半時許り戦ふに、逸見入道以下宗徒の甲斐源氏百餘騎討たれて引退く。二番に千葉介、宇都宮、小山、佐竹が勢相集まりて七千餘騎、上杉民部大輔が陣へ押寄せて入り亂れく戦ふに、信濃勢二百餘騎討たれば、寄手も三千餘騎討たれて相引に左右へ颯と引く。引けば兩陣入り替つて追つ返しつ、其の日の午の刻より酉の刻の終りまで少しも休む隙なく終日戦ひ暮してけり。夫れ小勢を以て大敵に戦ふに烏雲の陣にしくはなし。烏雲の陣と申すは、先づ後に山をあて、左右に水を境ひて敵を平野に見下し、

○虎賁狼卒 強く逞しい武士。

○氣色はうて 氣色はみて。意氣軒昂として。
○草鹿の的山 草鹿は一種の騎射で草鹿の形を作つて的とするもの。的山は的を置くために作つた假山。

我が勢の程を敵に見せずして、虎賁狼卒替るべく、射手を進めて戦ふものなり。此の陣幸ひに烏雲に當れり。待つて戦はば利あるべかりしを、武藏守若武者なれば、毎度廣みに懸け出でて、大勢に取巻かれける間、百度戦ひ千度懸け破るといへども、敵目にあまる程の大勢なれば、新田上杉遂に打負けて、笛吹峠へぞ引上りける。上杉民部大輔が兵に、長尾彈正、根津小次郎とて、大力の剛の者あり。今日の合戦に打負けること、身一つの恥辱なりと思ひければ、紛れて敵の陣へ馳せ入り、將軍を討ち奉らんと相謀つて、二人ながら俄に二引兩の笠符をつけ替へ、人に見知られじと、長尾は亂髪を顔へ颯と振りかけ、根津は刀を以て己が額を突き切つて、血を面に流しかけ、切つて落したりつる敵の首鋒に貫き、取附に取りつけて、唯二騎將軍の陣へ馳せ入る。數萬の軍勢道に横はつて、「誰が手の人ぞ。」と問ひければ、「これは將軍の御内のものにて候が、新田の一族に、宗徒の人々を組討に討つて候間、首實檢の爲に、將軍の御前へ參り候なり。開いて通され候へ。」と、高らかに呼ばはりて、氣色ばうて打通れば、「めでたう候。」と感ずる人のみあつて、おもひ咎むる人もなし。「將軍は何處に御座候やらん。」と問へば、ある人「あれに控へさせたまひて候なり。」と、指さして教ふ。馬の上よりのびあがり見ければ、相隔たること草鹿の的山ばかりになりけり。「あはれ幸ひや、唯一太刀に切つて落さんするものを。」と、二人屹と目くばせして、中々馬を閑々と歩ませける處に、猶も將軍の御運や強かりけん、見知る人あつ

○矢袋 矢先を揃へて連射すること。

○銀漢 天の川。

て、「そこに紛れて近づく武者は、長尾彈正と根津小次郎とにて候は。近づきてたばからるな。」と呼はりければ、將軍に近づき奉らせじと、武藏相摸の兵ども、三百餘騎中を隔てて左右より颯と馳せ寄する。根津と長尾と、支度相違しぬと思ひければ、鋒に貫きたる首を抛つて、亂髪を振りあげ、大勢の中を破つて通る。彼等二人が鋒に廻る敵、一人として兜の鉢を胸板まで、眞二つに破りつけられ、腰の番ひを切つて落されぬはなかりけり。されども敵は大勢なり。これ等は唯二騎なり、十方より矢袋を作つて散々に射ける間、叶はじと思ひけん、「哀れ運強き足利殿や。」と高らかに欺きて、閑々と本陣へぞ歸りける。夜に入りければ、兩陣共に引退いて陣々に篝を焼きたるに、將軍の御陣を見渡せば、四方五六里に及んで、銀漢高くすめる夜に、星を列ぬるが如くなり。笛吹峠を顧みれば、月に消え行く螢火の山陰に残るに異ならず。義宗これを見給ひて、「終日の合戦に、兵若干討たれぬと雖も、これ程まで陣の透くべしとは覺えぬに、篝の數の餘りに寂しく見ゆるは、如何様勢の落ち行くと覺ゆるぞ。道々に關を居よ。」とて、裁田山と信濃路に、稠しく關を居ゑられたり。「夫れ士卒將を疑ふ時は戦ひ利あらずといふ事あり。前には大敵勝つに乗つて、後は御方の國々なれば、今夜一定越後信濃へ引返さんずらんと、我を疑はぬ軍勢あるべからず。船を沈め糧を捨てて、二度歸らじといふ心を示すは良將の謀なり。皆馬の鞍をおろし鎧を脱ぎて、引くまじき氣色、人に見せよ。」とて、大將鎧を脱ぎ給へば士卒悉く

○究竟の深山 引籠るのに好適な深山。

鞍をおろして馬を休む。宵の程は皆心を取静め居たりけるが、夜半ばかりに續松おびたしく見えて、將軍へ大勢のつゞく勢見えければ、明日の戦ひもかなはじと思はれけん、上杉民部大輔、簀ばかりを焼き棄てて、信濃へ落ちにければ、新田武藏守、其の曉越後へ落ちられけり。斯かりし後は、唯今まで新田上杉に付き従ひつる武藏上野の兵共も、未だ何方へも著かずして、一合戦の勝負を伺ひ見つる上總下總の者共も、我先にと將軍へ馳せ参りけるほどに、其の勢程なく百倍して、八十萬騎になりけり。新田左兵衛佐義興、脇屋左衛門佐義治は、六千餘騎にて尙鎌倉におはしけるが、將軍已に笛吹峠の合戦に打勝つて、八箇國の勢を率して、鎌倉へ寄せ給ふ由聞えければ、義興も義治も、たゞ此處にて討死せんと宣ひけるを、松田河村の者共、一某等が所領の内、相摸河の河上に究竟の深山候へば、唯それへ先づ引籠らせ給ひて、京都の御左右をも聞召し、越御信濃の大將達へも牒じ合はせられ候て、天下の機を得、諸國の兵を集めてこそ重ねて合戦も候はめ」と、より／＼強ひて申しければ、義興義治諸共に、三月四日鎌倉を引きて、石堂、小俣、二階堂、葦名判官、三浦介、松田、河村、酒匂以下、六千餘騎の勢を率して、國府津山の奥にぞ籠りける。

八幡合戦の事 附官軍夜討の事

○九禁 九門。
○野干 狐。
○四神相應の地 左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、一も闕くる所なき地。
○將軍塚 八尺の像に甲冑を著せて埋めた所。

○天台山 比叡山。王城の鬼門にあたる。
○伊祇代 近江國。
○山田矢早瀬 共に近江國にある。
○堅田 近江國。
○高島 近江國。

都には去月二十日の合戦に打負けて、足利宰相中將殿は近江國へ落ちさせ給ひ、持明院の本院、新院、主上、春宮は、皆捕はれさせ給ひて、賀名生に遷幸なりぬ。吉野の主上は猶世を危みて、八幡に御座あり。月卿雲客は、西山、東山、吉峯、鞍馬の奥などに逃げ隠れて坐すれば、帝城の九禁いつしか虎責猛將の備へもなく、朝儀大禮の沙汰もなく、野干の杵處となりけり。桓武の聖代此の四神相應の地を選んで、東山に將軍塚を築かれ、良の方に天台山を立てて、百王萬代の寶祚を修し置かれし勝地なれば、後五百歳未來永に至るまで、荒廢あらじとこそ覺えつるに、こはそも如何になりぬる世の中ぞやと、歎かぬ人もなかりけり。宰相中將殿は、近江の四十九院に、はる／＼と坐しけれども、土岐佐々木が外は、相従ふ勢もなかりしが、東國の合戦に、將軍勝ち給ひぬと聞えて後より、勢の付き奉る事雲霞のごとし。さらば聽て京都へ寄せよとて、三月十一日四十九院を立つて、三萬餘騎先づ伊祇代三大寺にして手を分つ。或は漫々たる湖上に、山田矢早瀬の渡舟に棹さす人もあり。或は渺々たる沙頭に、堅田高島を経て駒に鞭うつ勢もあり。旌旗水煙に翻つて、龍蛇忽ちに天にあがり、甲冑夕陽に耀いて、星斗則ち地に列なる。中院宰相中將具忠卿、千餘騎にて此の勢を防がん爲に、大津邊に控へられたりけるが、敵の大勢なる體を見て、戦ふ事叶はじと思はれけん、敵の未だ近つかざる前に八幡へ引返さる。おなじき十五日宰相中將京都に發向して、東山に陣をめさるれば、宮方の大將北畠右衛門督顯

○宮を一人 護良親王の子陸良親王。
 ○宰相中將殿 義詮
 ○洞峠 男山の南一里許りの處にある。
 ○命を際の合戦 死ぬか生きるかの合戦

能、都を去つて淀赤井に陣を取る。おなじき十七日に宰相中將殿下京に御移りあつて、東寺に御陣を召さるれば、顯能卿淀川を引いて、八幡の山下に陣をとる。いまだ戦はざる前に、宮方の大將陣を去る事三箇度なれば、行末とてもさぞあらんずらんと、憑み少なくぞ見えたりける。さはありながら、八幡は究竟の要害なるに、赤井橋を引きて、畿内の官軍七千餘騎にて楯籠りたり。三方は大河隔たつて橋もなく船もなし。宇治路を後へ廻らば、前後皆敵陣に挟まりて、進退心安かるまじ、如何すべきと評定あつて、東寺には猶國々の勢を待たれける處に、細川陸奥守四國の勢を率して、三千餘騎にて上洛せらる。又赤松律師則祐は、吉野殿より宮を一人申し下し進らせて、今までは宮方を仕る由にてありけるが、これも如何思案したりけん。宮方を背きて京都へ馳せ來りければ、宰相中將殿は龍の水を得、虎の山に靠るが如くになつて、勢ひ京畿を掩へり。同じき三月二十四日、宰相中將殿三萬餘騎の勢を率し、宇治路を廻つて木津河を打渡り、洞峠に陣を取らんとす。これは河内東條の通路を塞ぎて、敵を兵糧に迫めんためなり。八幡より北へは、和田五郎と楠次郎左衛門とを向けられけるが、楠は今年二十三、和田は十六、何れも皆若武者なれば思慮なき合戦をも致さんずらんと、諸卿悉く危み思はれけるに、和田五郎參内して申しけるは、「親類兄弟度々の合戦に、身を捨てて討死仕り候ひ畢んぬ。今日の合戦は又公私の一大事と存ずる事にて候上は、命を際の合戦仕りて、敵の大將を一人討ち取り候はずば、

○惡五郎 康貞。

○射しらまされて射て勢ひを挫かれて
 ○引側め 我が身に引きつけて持ち。
 ○莖短かに取つて長刀の柄の真中より上を持つて。
 ○からごう 鐵胴。鐵の鎧の胴ばかり作つたもの。

生きて再び御前へ歸り參る事候まじ。」と、申し切つて罷り出でければ、列座の諸卿國々の兵、あはれ代々の勇士なりと、感ぜぬ人はなかりけり。去る程に和田、楠、紀伊國の勢三千餘騎、皆荒坂山へ打向つて爰を支へんと挫へたれば、細川相摸守清氏、同陸奥守顯氏、土岐大膳大夫、舍弟惡五郎、六千餘騎にて押寄せたり。山路峻しく、峯高く峙ちたれば、麓より皆馬を踏み放しく、かづき連れてぞ上りたりける。斯かる軍に元來馴れたる大和河内の者共なれば、岩の陰岸の上に走り渡つて散々に射る間、面に立つ土岐と細川が兵ども、射しらまされて進み得ず。土岐惡五郎は、其の頃天下に名を知られたる大力の早わざ打物取つて達者なりければ、卯花威の鎧に鍬形打つて、水色の笠符吹き流させ、五尺六寸の大太刀抜いて引側め、射向の袖を振りかざいて、はるかに遠き山路をたゞ一息に上らんと、猪のかゝる様に、莞爾と笑ひ上りけるを、和田五郎あはれ敵やと打見て、突いたる楯をがばと投げ棄てて、三尺五寸の小長刀、莖短かに取つて渡り合ふ。爰に相摸守が郎從に、關左近將監といひける兵、土岐が脇よりつと走り抜けて、和田五郎に打つてかゝる。和田が中間これを見て、小松の陰より走り出でて、近々と攻め寄せて、十二束三伏暫し堅めて放つ矢、關將監がからどうを、くさめ通しに射抜かれて、小膝をついてぞ伏したりける。惡五郎走り寄つて引起さんとしける處を、又和田が中間二の矢を番ひて、惡五郎が脇楯のつほの板、杵卷せめてぞ射こうだる。關將監之を見て、今は助くべき人なしと思

○つぼ板 脇楯を被ふ板。

○薬研 薬を砕いて粉にする器で其の形細長く深く窪んでゐる。

○高名 功名。

○師氏 時氏人道道淨の子。

ひけるにや、腰の刀を抜いて腹を切らんとしけるを、悪五郎「暫し自害なせそ、助けんずる。」とて、つぼ板に射立てられたる矢をば、脇楯ながら引切つて投げ棄て、かゝる敵を五人切りふせ、關將監を左の小脇に挟み、右の手にて件の太刀を打振りく、近づく敵を打拂ひて、三町許りぞ落ちたりける。跡についで何處までも追つ懸ける和田五郎も討遁しぬ。安からず思ひける處に、悪五郎が運や盡きにけん、夕立に掘れたる片岸のありけるを、ゆらりと越えけるに、岸の額のかた土くわつと崩れて、薬研のやうなる處へ、悪五郎落ちければ、走り寄つて長刀の柄を取延べ、二人の敵をば討つてけり。入り亂れたる軍の最中なれば、首を取るまでもなし。悪五郎が引切つて捨てたりつる、脇楯ばかりを取つて、討ちたる證據に備へ、身に射立てられたる矢ども少々折り懸けて、主上の御前へ参り合戦の體を奏し申せば、「初め申しつる言には少しも違はず、大敵の一將を討ち取つて數箇所の劔を被りながら、恙なくして歸り参る條、前代未聞の高名なり。」と、叡感更に淺からず。悪五郎討たれて、官軍利を得たりといへども、寄手目に餘る程の大勢なれば、始終此の陣には怖へ難しとて、楠次郎左衛門夜に入つて、八幡へ引返せば、翌日朝敵やがて入れ替つて、荒坂山に陣を取る。然れども官軍も懸らず、寄手も攻め上らず、八幡を遠攻めにして四五日を経る處に、山名右衛門佐師氏、出雲、因幡、伯耆、三箇國の勢を率して上洛す。路次の遠きに依つて、荒坂山の合戦にはづれぬ事、無念に思はれる間、直に

○法性寺左兵衛督 親康の子。

○のりたる太刀 そのりたる太刀。

○袖の菱縫 袖の端に菱形を縫つた所。

八幡へ押寄せて一軍せんとて淀より向はれけるが、法性寺左兵衛督、爰に陣を取つて、淀の橋三間引落して、西の橋爪に垣楯搔いて相待ちける間、橋を渡ることかなはず、さらば筏をつくり渡せとて、淀の在家を壊ちて筏を組みたれば、五月の霖に水増りて押流されぬ。數日あつて後、淀の大明神の前に淺瀬ありと聞き出して、二千餘騎を一手になし、流れを截つて打渡すに、法性寺左兵衛督唯一騎、馬のかけあがり控へて、敵三騎切つて落し、のりたる太刀を押直して、閑々と引いて返れば、山名が兵三千餘騎、「大將とこそ見奉るに、逢くも敵に後をば見せられ候ものかな。」とて追つかけたり。「返すに難きことか。」とて、左兵衛督取つて返してはつと追つ散らし、返し合つては切つて落し、淀の橋爪より御山まで、十七度までこそ返されけれ。されども馬をも切られず、我が身も痛手を負はざれば、袖の菱縫吹返しに、立つ處の矢少々折りかけて、御山の陣へぞ歸られける。山名右衛門佐、財園院に陣をとれば、左兵衛督猶守堂口に支へて防がんとす。四月二十五日、四方の寄手同時に牒じ合はせて攻め戦ふ。顯能卿の兵、伊賀伊勢の勢三千餘騎にて、園殿口に支へて戦ふ。和田、楠、湯淺、山本、和泉河内の軍勢は、佐羅科に支へて戦ふ。軍未だ半ばなるに、高橋の在家より神火燃え出でて、魔風十方に吹き懸ける程に、官軍煙に咽んで防がんとするに叶はねば、皆八幡の御山へ引上る。四方の寄手二萬餘騎、則ち洞峠へ打上りて、土岐、佐々木、山名、赤松、松田、飽庭、宮入道、一勢々々數十箇所に陣を

○二三更の程 十時
十二時の頃。

○分内 案内。

○心少し延びたる者
少し々々として
果斷のない者。
○うたてけれ なさ
けない。
○堯の子云々 堯は
聖帝であつたが其の
子の丹朱は不肖であ
つた。舜は至孝であ
つたが其の弟の象は傲
る人だつた。

取り、鹿垣結ひて、八幡山を五重六重にぞ取巻きける。細川陸奥守、同相摸守は、眞木葛葉を打廻つて、八幡の西の尾崎、如法經塚の上に陣を取つて、敵と堀一重を隔ててぞ攻めたりける。五月四日、官軍七千餘騎が中より夜討に馴れたる兵八百人を勝りて、法性寺左兵衛督につけらる。左兵衛督畫程より此の勢を吾が陣へ集めて、笠符を一様に著けさせ、誰ぞと問へば、進むと名のるべしと約束して、夜已に二三更の程なりければ、宿院の後を廻つて如法經塚へ押寄せ、八百人の兵共、同音に鬨をどつと作る。細川が兵三千餘人、暗さは闇し分内はなし、馬放れ人騒いで、太刀をも抜き得ず、弓をも彎き得ざりければ、手負ひ討たる、者数を知らず。遙かなる谷底へ人なだれをつかせて追ひ落されければ、馬物具を捨てたる事幾千萬とも知り難し。一陣破れぬれば殘黨全からじと見る處に、土岐、佐々木、山名、赤松が陣は些しも動かさず、鹿垣密しく結ひて、用心堅く見えたれば、夜討に打つべき様もなく、打散らすべき便りもなかりけり。かくては何時までか怵ふべき、和田楠を河内國へ返して、後攻をせさせよとて、彼等兩人を忍びて城より出して、河内國へぞ遣はされける。八幡には此の後攻を憑みて今や々と待ち給ひける處に、これを我が大事と思ひ入れて引立ちける和田五郎、俄に病み出して、幾程もなく死ににけり。楠は父にも似ず兄にも替りて、心少し延びたる者なりければ、今日よ明日よといふばかりにて、主上の大敵に圍まれて御座あるを、いかゞはせんとも心に懸けざりけるこそうたてけれ。堯

○此の楠 楠正儀。

の子堯の如くならず、舜の弟舜に似すとはいひながら、此の楠は正成の子なり。正行が弟なり。何時の程にか親にも替り、兄にもこれまで劣るらんと、誇らぬ人もなかりけり。

南帝八幡御退失の事

○落ち仕度 逃げ仕度。

三月十五日より軍始まつて、已に五十餘日に及べば、城中には早兵糧を盡し援けの兵を待つ方もなし。かくては如何あるべきと、いひ囁く程こそあれ。聽て人々の氣色替つて、唯落ち支度の外はする態もなし。去る程にこれぞ宗徒の御用にも立ちぬべき伊勢の矢野下野守、熊野の湯川莊司、東西の陣に幕を捨てて、兩勢三百餘騎降人になつて出でにけり。城の案内敵に知られなば、落つるとも落ち得じ。さらば今夜主上を落し進らせよとて、五月十一日の夜半許りに、主上をば寮の御馬に乗せ進らせて、前後に兵共打圍み、大和路へ向つて落ちさせ給へば、數萬の御敵前を要り跡について討ち留め進らせんとす。義に依つて命を輕んずる官軍共、返し合はせては防ぎ、打破つては落し進らするに、劊を被つて腹を切り、蹈み留まつて討死する者三百人に及べり。其の中に宮一人討たれさせ給ひぬ。四條大納言隆資、圓明院大納言、三條中納言雅賢卿も討たれ給ひぬ。主上は軍勢に紛れさせ給はん爲に、山本判官が進らせたりける黄絲の鎧をめして、栗毛なる馬にめされたるを、一宮彈正左衛門有種追ひ懸け進らせて、然るべき大將とこそ見進らせ候。蓬くも敵に追つ

○手柄 てなみ。

○尻居 尻餅。

○裏をぞかざりける 裏にまで貫通しなかつた。

○中黒 新田氏の旗符。

○内侍所 神鏡。

○長生 名和長年の弟。

たてられ、一度も返させ給はぬ者かな。」と呼ばはりかけて、弓杖三杖許り近づきたりけるを、法性寺左兵衛督屹と顧みて、「悪い奴原がいひ様かな。いで己に手柄の程を見せん。」とて、馬より飛んで下り、四尺八寸の太刀を以て、兜の鉢を破れよ碎けよとぞ打たれたる。さしもした、かなる一宮、尻居にどうと打居ゑられて、目くれ膽消えにければ、暫く心を静めんと、目を塞ぎて居たる間に、主上遙かに落ち延びさせたまひにけり。古津川の端を西に傍ひて、御馬を早めらるゝ處に、備前の松田、備後の宮入道が兵共、一三三三騎にて取籠め奉る。十方より雨の降る如く射る矢なれば、遁れ給ふべしとも見えざりけるが、天地神明の御加護もありけるにや、御鎧の袖、草摺に二筋中りける矢も、曾て裏をぞかざりける。法性寺左兵衛督、これまでも尙離れ進らせず、唯一騎供奉したりけるが、跡より敵懸れば引返して追ひ散らし、敵前を遮れば懸け破つて、主上を落し進らせける處に、何處より來るとも知らず、御方の兵百騎ばかり、皆中黒の笠符つけて、御馬の前後に候ひけるが、近づく敵を右往左往に追ひ散らして、かき消す様に失せにければ、主上は玉體恙なくして東條へ落ちさせ給ひにけり。内侍所の櫃をば、初め賜ひて持ちたりける人が田の中に捨てたりけるを、伯耆太郎左衛門長生、著けたる鎧を脱ぎ捨てて、自ら荷擔したりける。跡より追ふ敵共、蒔き捨つる様に射ける矢なれば、御櫃の蓋に中る音板屋を過ぐる村雨の如し。されども身には一筋も立たざりければ、長生兔角か、ぐりつけて、賀名生の御所へ

○志純 高德の入道した名。

○神龍化して云々 天皇を神龍に、武家を釣者に譬ふ。説苑九に「昔白龍下清冷之淵化爲魚、漁者豫其射中其目。」

ぞ参りける。多くの矢ども御櫃に中りつれば、内侍所も矢や立たせ給ひたるらんと、淺ましく御櫃を見進らせたれば、矢の痕は十三までありけるが、纔かに薄き檜木板を射徹す矢の一筋もなかりけるこそ不思議なれ。今度僞つて京都を攻められん爲に、先づ住吉天王寺に行幸なりたりし時、兒島三郎入道志純も召されて参りたりけるを、「これが一大事なれば急ぎ東國北國に下つて、新田義貞が甥子どもに義兵を起させ、小山、宇都宮以下、便宜の大名を語らひて、天下の大功を即時に致す様に、智謀を運らせ。」と仰せ出されければ、志純夜を日に繼いで關東へ下りたれば、東國の合戦早事散じて、新田義興義治は河村城に楯籠り、武藏守義宗は越後國にぞ居たりける。敕使東國北國に行き向ひて、「君已に大敵に圍まれさせ給ひて援けの兵力勞れぬ。若し神龍化して釣者の爲に捕はれさせ給ひなば、天下誰が爲にか争はん。」と、義の重きに依つて命を輕んずべき習ひを申しければ、小山五郎、宇都宮少將入道も、「敕定に隨ふなり。」とて、東國靜謐の計畧を運らすべき由約諾す。義興、義治は尙東國に止まつて將軍と戦ひ、新田武藏守義宗、桃井播磨守直常、上杉民部大輔、吉良三郎満貞、石堂入道、東山、東海、北陸道の勢を率し二手になつて上洛し、八幡の後攻を致して朝敵を千里の外に退くべしと、諸將の相圖を定めて、敕使を先立ててぞ上りける。去る程に新田武藏守義宗は、四月二十七日越後の津張より立つて、七千餘騎越中の放生津に著けば、桃井播磨守直常、三千餘騎にて馳せ参る。都合其の勢一萬餘騎、九

月十一日前陣已に能登國へ發向す。吉良三郎、石堂も、四月二十七日に駿河國を立つて、路次の軍勢を驅り催し、六千餘騎を率して、五月十一日に先陣すでに美濃の垂井赤坂につきしかば、八幡に力を勦せんと遠籌をぞ焼きたりける。これのみならず信濃宮も、神家、滋野、友野、上杉、仁科、禰津以下の軍勢を召し具して、同じき日に信濃を立たせ給ふ。伊豫には土居、得能、兵船七百餘艘に取乗つて、海上より攻め上る。東山、北陸、四國、九州の官軍共、皆我が國々を立ちしかば、路次の遠近に依つて、縱令五日三日の遅速はありとも、後攻の勢こそ近づきたれと、いひたつ程ならば、八幡の寄手は皆退散すべかりしを、今四五日待ちつけずして、主上は八幡を落ちさせ給ひしかば、國々の官軍も力を落しはて、皆己が本國へぞ引返しける。これも唯天運の時到来らず、神慮より事起る故とはいひながら、とすれば違ふ宮方の運のほどこそ計られたり。

○ミすれは違ふ云々
こもすれは所期に
相違する天皇方の運
命の程度。

○信濃宮 宗良親王

卷第三十二

茨宮御位の事

今度吉野殿と將軍と御合體の議破れて合戦におよびし刻、持明院の本院、新院、主上、春宮、梶井二品親王まで、皆南方の敵に囚はれさせ給ひて、或は賀名生の奥、或は金剛山の麓に御座あれば、都には御在位の君も坐さず、山門には時の貫首も渡らせ給はず。此の平安城と比叡山と同じき時に始まりて、已に六百餘歳、一日も未だ斯かる事をば承り及ばず、これぞ末法の世になりぬる驗よと、淺ましかりし事どもなり。されども斯くては如何あるべきとて、天台座主には、梶井二品親王の御弟子、承胤親王をなし奉る。此の宮は前門主の御振舞に様替りて、遊宴奇物をも愛せさせ給はず、行業不退にして唯吾が山の興隆をのみ御心に懸けられたりければ、靡き奉らぬ衆徒もなかりけり。さて御位には誰をか即け進らすべきと尋ね求め奉る處に、本院第二の御子、三條の内大臣公秀の御女、三位殿の御局、後には陽祿門院と申しし御腹に生れさせ給ひたりしが今年十五にならせ給ふを、日野春宮權大進保光に仰せて、南方へ取り奉らんとせられけるが、兔角料理に滞りて、保光京都に捨て置き奉りけるを尋ね出しまるらせて、御位に即け進らせけるなり。此の宮を

○貴首 座主。
○平安城 京都。

○承胤親王 後伏見
天皇の皇子。

○本院 光嚴院。

○陽祿門院 秀子。

○料理に滞りて 處
置に差支へあつて。

○女院 證は實子。正親町大納言實明の子。
○廣義門院 寧子。光嚴院の母。

ば去年御繼母宣光門女院の御計らひとして、妙法院の門跡へ御入室あるべしとて、已に御出家あらんとし給ひけるを、御外祖母廣義門院より、内々北斗堂の實算法印の御占を問はせ給ひたりければ、王位に即かせ給ふべき御果報坐す由を勘へ申したりける間、誠しからずとは思召しながら、御出家の議を止められて、日野右大辨時光に預け置き進らせける。其の翌の年觀應三年八月二十七日に俄に踐祚ありしかば、兆前の勘文更に一事も違はず、實算法印忽ちに若干の叡感抽賞にあづかりけり。

劔璽なくして御即位の例なき事附院の御所炎上の事

○文和 南朝の正平七年。
○織部祭 オホンベノマツリ即ち大嘗祭
○神日本磐余彦尊 神武天皇。
○南山 吉野山。

同じき九月二十七日に改元あつて文和と號す。其の年の十月に河原の御禊あつて、翌の月大嘗會を遂げ行はる。三種の神器おはしまさで、御即位の事は如何あるべからんと、諸卿異議多かりけれども、武家強ひて申沙汰しける上は、たゞ免も角もその議に隨ふべしとて、織部祭をば致されけるとぞ承る。夫れ人代百王のはじめは、鸕鷀草葺不合尊の第四王子、神日本磐余彦尊、大和國畝傍檜原宮にいまして、朝政を聞召したりしより以來、我が君の御宇已に九十九代、三種の神器坐さで、御位を繼がせ給ふ事は、未だ其の例を聞かずと、有職を立つる人々の欺き申さぬはなかりけり。帝都今靜まりて御在位安泰なるにつけても、先皇、兩院、梶井宮南山の奥に御座あれば、さこそ御心を惱まさるらめと、

○國母 天皇(後光嚴帝)の御母。
○椒庭 後宮。

○賴基 大中臣能宣の父。
○中書王 中務卿兼明親王。

主上御心苦しき事に思召されければ、如何にもして南山より盗み出し奉らんと方便を廻らされけれども、主上、兩上皇は南山の警固の兵密しくて御出であるべき様もなかりけり。遙かに程經て梶井宮許りをぞ、免角して盗み出し進らせける。同じき年の十月二十八日に國母陽祿門院隠れさせ給ひければ、天下諒闇の儀にて、洛中に物の音をも鳴らさざる事三月、禁裏椒庭殊更に物哀れなる折節なり。同じき二年二月四日、俄に失火出で來て院の御所持明院殿焼けにけり。回祿は天災にて尋常ある事なれども、近年打續き京中の堂社宮殿残り少なく焼け失せぬる事直事とも覺えず、唯法滅の因縁王城の衰微とぞ見えたりける。元弘建武の亂より以來回祿に逢ぬひる所々を數ふれば、先づ内裏、馬場殿、准後の御所、式部卿親王の常磐井殿、兵部卿宮の二條の御所、宣光門女院の御舊宅、城南離宮の鳥羽殿荒れて久しき伏見殿、十樂院、梨本、青蓮院、妙法院の白河殿、大覺寺殿の御舊跡、洞院左府の亭宅、大炊御門内府の亭、吉田内府の北白河、近衛殿の小坂殿、爲世卿の和歌所、三條大納言の栖み馴れし毘沙門堂、賴基が天の橋立跡舊りて、鹽竈の浦を摸せし河原院、中書王の古を慕ひて立てし花園や、融の大臣の跡を慕ふ千種宰相の新亭、雲客以下の家々は未だ數ふるに違あらず。禁裏、仙洞、竹苑、椒房、三台九卿の曲阜以下都て三百二十餘箇所、此の時に當つて焼けにけり。佛閣靈驗の地には、法城寺、法勝寺、長樂寺、清水寺、六僧房、雙林寺、講堂、慶愛寺、北靈山、西福寺、宇治寶藏、淨住寺、六波羅の地藏堂、

○貝鐘の聲 誦經の聲。

紫野の寺、東福寺、雪村の塔頭大龍庵、夢窓國師の建てられし天龍寺に至るまで、禪院、律院、御祈禱所、三十餘箇所の佛閣も皆此の時に焼けにけり。されば東山西郊、京白河在家も續かず、寺院も稀なれば、盜賊巷に満ちて、往來の道も安からず、貝鐘の聲も幽にして、無明の睡りも覺めがたし。

山名右衛門佐敵となる事 附 武藏將監自害の事

山名右衛門佐師氏は今度八幡の軍に功あつて、抽賞我に勝る人あらじと思はれる間、先年拜領して未だ當知行なかりける若狭國の齋所今積を、本の如く充て給ふべきよし、佐佐木佐渡判官入道道譽に屬して申し達せん爲に、日々に彼の宿所へ行き給ひけれども、「今日ば連歌の御會席にて候。」唯今は茶の會の最中にて候。」とて一度も對面に及ばず、數刻立たせ暮まで待たせて、唯徒らにぞ歸しける。度重なれば右衛門佐大きに腹立して、「周公旦は文王の子武王の弟たりしかども、髪を洗ふ時訴人來れば髪を握つて遇ひ、飯を食する時賓客來れば哺を吐いて對面し給ひけり。才乏しと雖も我大樹の一門に列なる身たり。禮儀を存せば、杵を倒にしても庭に出で迎ひ、袴の腰を結びくも、急ぎてこそ對面すべきに、此の入道斯様に無禮に振舞ふこそ返すくも遺恨なれ。所詮叶はぬ訴訟をすればこそ、詔ふまじき人をも諛へ。今夜の中に都を立つて伯耆へ下り、聽て謀叛を起して天下を

○哺 口中の食物。
○大樹 將軍。

○小目代 身分の卑き目代。目代は守護の代官。
○吉田肥前 嚴覺。
○富田判官 佐渡守師泰の子。

○相圖を指しければ 期を約束したので
○隆俊 隆資の子。
○康長 親康の子。
○氏範 圓心の子。

覆し、無禮なりつる者共に、思ひ知らせんするものを。」と獨言して、我が宿所へ歸ると均しく、郎等共にかくともいはず、唯一騎文和元年八月二十六日の夜半に伯耆を指して落ちて行けば、相從ひし兵共聞き傳へて、七百餘騎跡を追つてぞ下りける。伯耆國に著かれければ、師氏まづ親父左京大夫時氏の許に行きて、「京都の沙汰の次第、面目を失ひつる間、將軍に暇をも申さず罷り下り候。」と語りければ、親父も大きに忿つて、頓て宮方の御旗を揚げ、先づ道譽が小目代にて、吉田肥前が出雲國にありけるを追ひ出し、事の仔細を相觸るゝに、富田判官を始めとして、伊田、波多野、矢部、小幡に至るまで皆同意しければ、出雲、伯耆、隱岐、因幡、四箇國即時に打從へてけり。さらば聽て南方へ牒送せよとて、吉野殿へ奏聞を經るに、山陰道より攻め上らば、南方よりも官軍を出されて、同時に京都を攻めらるべしと仰せ出されければ、時氏大きに悦んで、五月七日伯耆國を立つて、但馬丹後の勢を引具して、三千餘騎丹波路を經て攻めのほる。かねて相圖を指しければ、南方より總大將四條大納言隆俊、法性寺左兵衛督康長、和田、楠、原、蜂屋、赤松彈正小弼氏範、湯淺、貴志、藤波を始めとして、和泉、河内、大和、紀伊國の兵共三千餘騎勝り出しければ、南は淀、鳥羽、赤井、大渡、西は梅津、桂の里、谷堂、峯堂、嵐山までも陣に取らぬ所なければ、焼きつゝけたる篝火の影、幾千萬といふ數を知らず。此の時將軍未だ上洛し給はで、鎌倉におはせしかば、京都餘りに無勢にて、大敵戦ふべき様もなかり

○中々なる軍 なま
なかな戦。

○洛川 加茂川。
○引場の思ひ 敗北
の懸念。

○卯の刻 午前六時

けり。中々なる軍して敵に氣を附けてはかなふまじとて、土岐、佐々木の者ども、頻りに江州へ引退いて、勢多にて敵を相待たんと申しけるを、宰相中將義詮朝臣、「敵大勢なればとて、一軍もせでいか、聞き逃けをばすべき」とて、主上をば先づ山門の東坂本へ行幸なし進らせて、仁木、細川、土岐、佐々木三千餘騎を一處に集め、鹿谷を後に當てて、敵を洛川の西に相待たる。此の陣の様、前に川あつて後に大山峙ちたれば、引場の思ひはなけれど、韓信が兵書を編して背水の陣を張りしに違へり。殊更土岐佐々木の兵、近江と美濃とを後に置いて戦はん、引いて暫く氣を休めばやと思はぬ事やあるべきと、未だ戦はざる前に敵に心をぞはかられける。去る程に文和二年六月九日卯の刻に、南方の官軍、吉良、石堂、和田、楠、原、蜂屋、赤松彈正少弼氏範、三千餘騎、八條九條の在家に火をかけて、相圖の煙を上げたれば、山陰道の寄手、山名伊豆守時氏、子息右衛門佐師氏、伊田、波多野、五千餘騎、梅津、桂、嵯峨、仁和寺、西七條に火をかけて、先づ京中へぞ寄せたりける。洛中には向ふ敵なければ、南方西國の兵共、一所に打寄せて、四條河原に轡を變べて控へたり。此より遙かに敵の陣を見遣れば、鹿谷、神樂岡の南北に、家々の旗二三百旋翻つて、四目結の旗一旋真先に進んで、眞如堂の前に下り合ひたり。敵陣みな山に寄つて木陰に控へたり。勢の多少も見え分かず。和田、楠、法勝寺の西の門を打通つて、河原に控へたりけるが、敵を誘き出して勢の程を見んとて、射手の兵五百人馬より

○つきしどみ 隙なく
楯をつき並べるこ
の。

下し、持楯楯楯、つきしどみく、閑かに田の畦を歩ませて、次第々々に相近づく。爰に佐々木の總領氏頼、其の比遁世にて西山邊に隠れ居たりける間、舍弟五郎右衛門尉世務に代つて國の權柄を執りしが、近江國の地頭御家人、此の手に屬して五百餘騎ありけるが、楠が勢に招かれて、胡箏を敲き鬨の聲を揚げ喚いてかゝる。楠が勢陽に開き陰に圍みて散に射る。射れども佐々木が勢ひるまず、鏝を傾けて袖をかざし、懸け入りけるを見て、山名が執事小林右京亮、七百餘騎にて横合にあふ。佐々木勢餘りに手痛く懸けられて、叶はじとや思ひけん、神樂岡へ引上ぐる。官方手合の軍に打勝つて、氣を揚げ勇みに乗つて東の方を見れば、土岐の桔梗一揆、水色の旗を差上げ、大鍬形を夕陽に輝かし、魚鱗に連なりて六七百騎が程控へたり、小林これを見て人馬に息をも繼がせず、懸て懸け合はせんとしけるを、山名右衛門佐扇を揚げて招き止め、新市の兵千餘騎を引勝つて相近づく。土岐も山名もしづく、と馬を歩ませて、一矢射違ふる程こそあれ。互に諸鎧を合はせて懸け入り、敵御方二千餘騎、一度に颯と入り亂れて、弓手に逢ひ馬手に背き、半時許り切り合ひたるに、馬煙虚空に廻つて、微塵を吹き立てたるに異ならず。太刀の鏝音鬨の聲、大山を崩し大地を動かして、すはや官方打勝ちぬと見えしかば、鞍の上空しき放れ馬四五百匹、河より西へ走り出でて、山名が兵の鋒に首を貫かぬはなかりけり。細川相摸守清氏、これ程御方の打負けたるを見ながら、些しも氣を屈せず、尙勇み進んでぞ見えたり

○懸 つむじかぜ。

○あひ遠になり 互に速く隔たり。

○四明峯 比叡山の諸峯中最高峯。

○打ちこみの軍 他人と共に入り雑つてする合戦。

○洗革 淡紅に染めた革。

○つま取りたる 袖草摺の兩端を別色の糸四條竝べて覆輪したやうに色ざつた鍔

○長山遠江守 頼基

○かはゆけれ 不便だ。

ける。吉良、石堂、原、蜂屋、宇都宮民部少輔、海東、和田、楠、皆新しければ細川と懸り合つて、鴨川を西へ追ひ渡し、眞如堂の前を東へ追ひ立てて、時移るまでぞ戦ひたる。千騎が一騎になるまでも引かじとこそ戦ひけれども、將軍の陣あらけ靡いて後の御方あひ遠になりければ、細川遂に打負けて四明峯へ引上ぐる。赤松彈正少弼氏範は、いつも打ちこみの軍を好まぬ者なりければ、手勢ばかり五六十騎引分けて、返す敵あれば、追つ立て追つ立て切つて落す。名もなき敵どもをば、何百人切つてもよしなし。哀れよからんする敵に逢はばやと願ひて、北白河を今路へ向つて歩ませ行く處に、洗革の鍔のつま取りたるに龍頭の兜の緒を締め、五尺許りなる太刀二振帯いて、齒の徑八寸ばかりなる大鍔を振りかたけて、近づく敵あらば唯一撃に撃ちひしがんと尻目に敵を睨んで閑かに落ち行く武者あり。赤松遙かにこれを見て、これは聞ゆる長山遠江守ごさんなれ。それならば組んで討たばやと思ひければ、諸鎧合はせて跡に追ひつき、「洗革の鍔は長山殿と見るは僻目か、蓬くも敵に後を見せらるゝものかな。」と、言をかけて恥ぢしめければ、長山屹とふり返つてからくと打笑ひ、「問ふは誰とよ。」「赤松彈正少弼氏範よ。」「さてはよい敵。但し汝を唯一撃に失はんずるこそかはゆけれ。念佛申して西に向へ。」とて、件の鍔を以て開き、兜の鉢を破れよ碎けよと思ふ様に打ちける處を、氏範太刀を平めて打背け、鍔の柄を左の小脇に挟みて、片手にてえいやとぞ引きたりける。引かれて二匹の馬あひ近になりければ、

互に太刀にては切らず、鍔を奪はん奪はれじと引き合ひける程に、蛭巻したる櫛木の柄を、中よりづんと引切つて、手本は長山が手に残り、鍔の方は赤松が左の小脇にぞ留まりける。長山今までは我に増る大力あらじと思ひけるに、赤松に勢力を碎かれて、叶はじとや思ひけん、馬を早めて落ち延びぬ。氏範大きに牙を嚼みて、「詮なき力わざ故に、組んで討つべかりつる長山を、打漏らしつる事の無念さよ。よし、敵は何れも同じ事、一人も亡ほすにしかじ。」とて、奪ひ取つたる鍔にて、逃ぐる敵を追つ攻め、切りけるに、兜の鉢を眞向まで破り附けられずといふ者なし。流るゝ血には、鍔の柄も朽つるばかりになりけり。美濃勢には、土岐七郎を始めとして、桔梗一揆の衆九十七騎まで討たれぬ。近江勢には、伊庭八郎、蒲生將監、川曲三郎、蜂屋將監、多賀中務、平井孫八郎、儀俄五郎知秀以下、三十八騎討たれぬ。此の外栗飯原下野守、匹田能登守も討死しつ。後藤筑後守貞重も生虜られぬ。打殘されたる者とても、或は創を被り或は矢種射盡して、重ねて戦ふべしとも覺えざりければ、大將義詮朝臣も、日暮れて東坂本へ落ち給ふ。これまでも猶細川相摸守清氏は元の陣を引退かず、人馬に息を繼がせて、我に同する御方あらば、今一度快く挑み戦ひて、雌雄を爰に決せんとて、西坂本へ控へて其の夜は遂に落ち給はず。夜明けければ、宰相中將殿より使者を立てて、「重ねて合戦の評定あるべし。まづ東坂本へ打越えられ候へ。」と仰せられければ、此の上は清氏一人留まつても甲斐なしとて、翌日早

○栗飯原下野守 下野守は下總守の誤か
○貞重 守重の子。

○武藏將監 師詮。

且に東坂本へ參られける。此の時故武藏守師直が思ひ者の腹に出来たりとて、武藏將監といふ者、片田舎に隠れて居たりけるを、阿保肥前守忠實、荻野尾張守朝忠等、俄に取立てて大將になし、丹波、丹後、但馬三箇國の勢、三千餘騎を集めて、宰相中將殿に力を合はせん爲に、西山の吉峯に陣を取つてぞ居たりける。京都の大敵にだに輒く打勝つて勇み勇みたる山名が兵共なれば、なじかは少しも猶豫ふべき、十一日の曙に吉峯へ押寄せ、矢一つも射させず、抜き連れて切つて上る。阿保、荻野が兵共餘りに強く攻められて、一支へも支へず谷底へ懸け落されければ、久下五郎を始めとして討たる、者四十餘人、創を被る者數を知らず。希有にして逃げ延びたる者共も、弓矢太刀長刀を取捨てて、赤裸にて落ちて行く。見苦しかりし有様なり。武藏將監は、二町許り落ち延びたりけるを、阿保と荻野と遙かに顧みて、「今は叶はぬ所にて候。御自害候へ。」と勧めける間、馬上にて腹掻き切り、倒に落ちて死ににけり。此の首を取らんとて、敵一所に打寄つて薙きけるを、沼田小太郎唯一騎返し合はせて戦ひけるが、敵は大勢なり御方はつゝかず、叶ふまじとや思ひけん、同じく腹掻き切つて、武藏將監が死骸を枕にしてぞ伏したりける。其の間に阿保と荻野は落ち延びて、甲斐なき命を助かりけり。

主上義詮没落の事附佐々木秀綱討死の事

義詮朝臣は、かねて佐々木近江守秀綱を警固に備ふれば、東坂本の事心安かるべし。爰にて國々の勢をも催さんと議せられけるが、吉野殿より大慈院の法印を大將の爲に山門へ呼び寄せたりと沙汰しける間、坂本を皇居になされんこと悪しかるべしとて、同じき六月十三日、義詮朝臣龍駕を守護し奉つて、東近江へ落ち給ふ。行幸の供奉には、二條前關白左大臣、三條大納言實繼、西園寺大納言實俊、裏築地大納言忠秀、松殿大納言忠嗣、大炊御門中納言家信、四條中納言隆持、菊亭中納言公直、花山院中納言兼定、左大辨俊冬、右大辨經方、左中辨時光、勘解由次官知行、梶井二品親王至にらせ給ふまで出世坊官一人も残らず召し具せられ、龍駕の次に御輿を早めらる。武士には足利宰相中將義詮を大將にて、細川相摸守清氏、尾張民部少輔、舍弟左京權大夫、同左近將監、今川駿河守頼貞、同兵部大輔助時、同左近藏人、土岐大膳大夫頼康、熊谷備中守直鎮、佐々木、山内五郎左衛門信詮、これ等を宗徒の人々として、都合其の勢三千餘騎、和仁堅田の濱道に駒を早めてぞ落ちられける。爰に故堀口美濃守貞満の子息掃部助貞祐が、此の四五年堅田に隠れて居たりけるが、其の邊の溢者共を語りひて、五百餘人真野浦に出で合つて、落ち行く敵を打止めんとす。真前には主上を擁護し奉りて、梶井二品親王御門徒の大家、濟々と召し具して落ちさせ給へば、門主に所を置き奉りて弓を引かず矢を放たず。此の間坂本の警固にて居たりける佐々木近江守秀綱、三百餘騎にて遙かの後陣に通りけるを、之は山門の故敵、

○俊冬 藤原俊實の子。
 ○助時 僧玄基の子。
 ○直鎮 忠重の子。
 ○信詮 氏頼の弟。
 ○溢者 無頼の者。
 ○濟々 威儀の盛んなさま。
 ○所を置き奉りて 遠慮申し上げて。

○子推が云々 韓詩外傳に「晋重耳之亡也、重耳無所依、能行、介子推割股肉以食之乃能行。」
 ○趙盾が云々 趙盾は晉の靈公の侍者で靈公を諫めて殺されんとし片輪車に乗つて逃れた故事。左傳宣公傳に見ゆ。
 ○巴猿一たび叫んで云々 和漢朗詠集に見ゆ。巴猿は巴峽の猿。明月峽は巴峽と峽を合はせて唐土の三峽とす。胡馬は胡國の馬。黃沙磧は胡の地にある。

時の侍所なれば、これを討ち留めよ。」とて、堀口が兵五百餘人東西より引裏んで、足輕の射手山に添ひ澤を阻てて散々に射ける間、佐々木三郎左衛門、箕浦次郎左衛門、寺田八郎左衛門、今村五郎一所にて皆討たれにけり。秀綱は憑み切つたる一族若黨共が、跡に蹈み止まつて討死しけるを見て、心憂き事にや思ひけん、高尾四郎左衛門入道と、二騎馬の鼻を引返して、敵の中へ懸け入つて、共に歩立の敵に馬の諸膝ながれて、落つる處にて討たれにければ、遙かに落ち延びたる若黨共三十七人、返し合はせく、所々にて討たれにけり。其の夜は鹽津に瑤輿を昇き留め奉りて、供奉の人々をも些し休め奉らんとせられけるを、鹽津海津の地下人共、軍勢此に一夜も逗留せば、事に觸れて煩ひあるべしと思ひける間、此の道辻彼の岡山に取上りて、鐘を鳴らし関を作りけるほどに、暫くの御逗留も叶はで、主上又瑤輿に召されたれども、昇き進らすべき駕輿丁も、皆逃げ失せて一人もなれば、細川相摸守清氏、馬より飛んで下り徒立になり、鎧の上に主上を負ひ進らせて、鹽津山をぞ越えられける。子推が股の肉を切り、趙盾が車の片輪を扶けしも、此の忠には過ぎとぞ見えし。月卿雲客、或は長汀の月に策をあけ、或は曲浦の浪に棹さし給へば、巴猿一たび叫んで船を明月峽の邊に停め、胡馬忽ちに嘶えて路を黃沙磧の裏に失ふ。」と、古人の書きし征路篇も、今こそ思ひ知られたれ。これより東は路次の煩ひもなかりしかば、美濃の垂井宿の長者が家を皇居にして、義詮朝臣以下の官軍皆四邊の在家に宿をとつて、

皇居を警固し奉りけり。

山名伊豆守時氏京落ちの事

○心中の憤り一時に解散しぬ 日比の勢價が一時に散じて胸がすがく、こした。
 ○勢著かば 軍勢が集まつたならば。

去る程に山名右衛門佐師氏は、都の敵を輒く攻め落して心中の憤り一時に解散しぬる心地して、喜悅の眉を開く事なり。勢著かば馳て濃州へ發向して、宰相中將殿を攻め奉らんと議せられけれども、降參する敵もなし催促に應ずる兵も稀なり。剩へ洛中には吉野殿より四條少將を成敗の體にて置かれたりける間、毎事山名が計らひにも非ず、又知行の所領も近邊になかりければ、出雲伯耆より上り集まりたりし勢共も、在京に勞れて漸々に落ち行ける程に、日を経て無勢になりにけり。かくては如何せん、卻つて敵に寄せられなば、我も都を落されぬと、内々仰天せられける處に、義詮朝臣、東山、東海、北陸道の勢を率して、宇治勢多より攻め上らるとも聞え、又赤松律師則祐が、中國より勢を率して上洛すとも聞えければ、四方の敵の近づかぬ先に早く引退けとて、數日の大功徒らに、天下に時を得ざりしかば、四條少將は官軍を率して南方に歸り、山名は父子諸共に道を追ひ拂つて、伯耆國へぞ下りける。

直冬吉野殿と合體の事 附 天竺震旦物語の事

○翌年 文和二年。

翌年の春、新田左兵衛佐義興、脇屋左衛門佐義治、共に相摸の河村城を落ちて、何にも聞えざりしかば、東國心やすくなつて、將軍尊氏卿上洛し給へば京都又大勢になりけり。さらば馳て山名を攻めらるべしとて、宰相中將義詮朝臣をまづ播磨國へ下さる。山名伊豆守これを聞きて、此の度は然るべき大將を一人取立て合戦をせずば、我に勢の著く事はあるまじと思はれる間、足利右兵衛佐直冬筑紫九國の者共に背き出され、安藝周防の間に漂泊し給ひけるを招き請じ奉り、總大將とぞ仰ぎける。但しこれも將軍に敵すれば、子として父を謹むる咎あり。天子に對すれば臣として君を蔑にし奉る恐れあり。さらば吉野殿へ奏聞を経て救免を蒙り、宣旨に任せて都を傾け、將軍を攻め奉らんは、天の忿り人の譏りもあるまじとて、直冬潛に使を吉野殿へ進らせて、「尊氏卿、義詮朝臣以下の逆徒を退治すべき由の綸旨を下し賜はりて、宸襟を休め奉るべし。」とぞ申されける。傳奏洞院右大將頻りに執し申されければ、再往の御沙汰までもなく直冬が申し請ひ奉るに任せ、即ち綸旨をぞ成されける。これを聞きて遊和軒朴翁難じ申しけるは、「天下の治亂興滅皆天の理に依らずといふ事なし。されば直冬朝臣を以て大將として京都を攻めらる、事、一旦謀あるに似たりと雖も事成すべからず。其の故は昔天竺に獅子國といふ國あり。此の國の帝他國より后を迎へ給ひけるに、輕軒香車數百乘、侍衛官兵十萬人、前後四五十里に支へて道をぞ送り進らせける。日暮れて或深山を通りける處に、勇猛奮迅の獅子ども

○洞院右大將 實也か。

○獅子國 此の故事は西域記第十一卷に見える。

○輕軒 輕車。

二三百匹走り出で、追ひつめ、人を喰ひける間、輕軒軸折れて馳すれども遁れず、官軍矢射盡して防けども叶はず、大臣公卿武士僕從、上下三萬人、一人も残らず喰ひ殺されけり。其の中に王たる獅子、彼の后を口にくはへて、深山幽谷の巖の中に置き奉つて、此の獅子容顏美麗なる男の形に變じければ、后此の妻となり給ひて、思はぬ山の岩の陰に、年月をぞ送らせ給ひける。始めの程は后、かかる荒き獸の中に交はりぬれば、我さへ畜類の身となりぬる事の心憂さ、何に命の存へて、一日片時も過すべしと覺えず、消えぬを露の身の憂さに思召し沈ませ給ひけるが、昔深き巖は變じて玉樓金殿となり、虎狼野干は化けて卿相雲客となり、獅子は化して萬乗の君となつて、玉宸の座に粧ひを堆くして、衰龍の御衣に薰香を散らせしかば、后早憂かりし御思ひも消え果てて、連理の枝の上に、心の花の移ろはん色を悲しみ、偕老の枕の下に、夜の隔てつる程をだにかこたれぬべく思召す。斯くて三年を過ぎ給ひける程に、后たゞならずなり給ひて男子を産み給へり。慈みの懐の中に長つて歳十五になりければ、貌形世に勝れたるのみにあらず、筋力人に超えて、如何なる大山を挟んで北海を飛び越ゆるとも、容易かるべしとぞ見えたりける。或時此の子母の后に向つて申しけるは、「適人界の生を受けながら、后は畜類の妻とならせ給ひ、我は子となつて候事、過去の宿業とは申しながら、心憂き事にて候はずや。然るべき隙を求めて、后此の山を逃げ出でさせ給へ。我負ひ奉つて獅子國の王宮へ逃げ籠り、母

○玉宸 宸は屏風。

○衰龍の御衣 天子の禮服。

○偕老 共に老いること。夫婦のこと。

○大山を挟んで云々 孟子梁惠王篇「挟泰山以越北海」

○君が爲に云々 白
 氏文集第三卷行路難
 に見えた文句。
 ○眼の裏の荆棘云々
 掌上の花は愛醜措
 く能はざる意で新人
 に喻へ眼裏の荆棘は
 近づくべからざる意
 で舊人に喻ふ。

○刹利 梵語で印度
 の四姓の一たる武士
 階級を云ふ。
 ○居士 朝に居る士

を后妃の位に昇せ奉り、我も朝列の臣と仕へて、畜類の果を離れ候はん。』と勧め申しければ、母の后限りなく喜んで、獅子の他の山へ行きたりける隙に、后此の子に負はれて、獅子國の王宮へぞ参り給ひける。帝斜ならず喜び思召して、君恩類ひなかりければ、後宮綺羅の三千、君が爲に衣裳を薰すれども、君蘭麝を聞きて馨香ならずとなす。君が爲に容色を事とすれども、君金翠を見て顔色無しと爲す。新しき人來つて舊き人棄てられぬ。眼の裏の荆棘、掌の上の花の如し。去る程に獅子外の山より歸り來つて后を尋ね求むるに、后も坐さず、我が子もなし。こは如何なることぞと驚き周章て、ばけたる貌もとの容になつて、山を崩し木を掘り倒し求むれども得ず。さては人の栖む里にぞ坐すらんとて、獅子國へ走り出でて、奮迅の力を出して吠え怒るに、如何なる鐵の城なりとも破れぬべくぞ聞えける。野人村老懼れ倒れ死する者幾千萬といふ數を知らず。又近つかざる所も、家を捨て財寶を捨て逃げ去りける間、獅子國十萬里の中には、一人もなかりけり。されども、此の獅子王位にや恐れけん、都の中へは未だ入らず、唯王宮近き邊に來つて、夜な夜な地を揺かして吠え踊り、天に飛揚して啼き叫びける間、大臣公卿刹利居士、皆宮中に逃げこもる。時に公卿僉議あつて、此の獅子を退治して進らせたらんする者には、大國を一州下さるべしと法を出して、道々に札を書きてぞ立てられける。彼の獅子の子此の札を見て、さらば我が父の獅子を殺して一國を賜はらんと思ひければ、尋常の人ならば、百人

○ありがたし 二度
 さない。

○人倫 人間。

しても引きはたらかすまじかりける。鐵の弓、鐵の矢を拵へ、鐵に毒を塗りて、父の獅子をぞ相待ちける。獅子今は王宮へ飛び入つて、國王大臣を喰ひ殺さんとて、禁門の前を過ぎけるが、我が子の毒矢をはけて立向ひたるを見て、涙を流し地に伏して申しけるは、『我年久しく相馴れし后と、二人ともなき汝を失うて、戀ひ悲しく思ふ故に、若干の人を失ひ多くの國土を亡ぼしつ。然るにこの様を尋ねきけば、后は王宮におはすなれば、今生にて再び相見んことありがたし。せめて汝をだに一目見たらば、縱令我命を失ふとも悲しむ處にあらずと思ひき。道々に立てられたる札を見れば、我が命を以て一國の抽賞に報ぜられたり。然れども我を一箭にも射殺さんする者は、天下に汝より外はあるべからず。命を惜しむも子の爲なり。汝一國の主となつて榮花を子孫に及ぼさば、我が命全く惜しむべからず。早く其の弓を引き其の矢を放ちて我を射殺し、報國の賞に預れ。』とて、黄なる涙を流しつ、『爰を射よ。』とて自ら口をあきてぞ伏したりける。獅子は畜類なれども子を思ふ心猶深く、子は人倫の身なれども親を思ふ道なかりければ、飽くまで引きて放つ矢に、獅子喉を射抜かれて、地に伏して忽ちに死ににけり。子、獅子の首を取つて天子にこれを奉る。一人萬民悦び合へる事限りなし。已に宣旨を下して其の賞を定められし上は仔細に及ばず、獅子の子に一國を下し給ふべかりしを、重ねて公卿僉議あつて、敕宣に隨ふ處は忠ありと雖も父を殺す罪輕からず。但し忠賞の事は法を定められしかば、綸言今更變じ難し

○正税 租税。
○鰥寡孤獨 孟子梁
惠王篇に「老而無妻
曰鰥、老而無夫曰
寡、老而無子曰獨、
幼而無父曰孤。」

とて、恩賞に擬せられける一國の正税官物、百年が間を勘へて、天下の鰥寡孤獨の施行に引かれぬ。彼を以てこれを思ふに、縦令一旦利を得たりとも終には諸天の御答めあるべし。又漢朝の古、帝堯と申しけるいみじき聖徳の帝、坐しけり。天子の位に在す事七十年、御年已に老いぬ。『誰にか天下を譲るべき。』と御尋ねありければ、大臣皆諛ひて『幸ひに皇太子にて御波り候へば丹朱にこそ御譲り候はめ。』と申しけるを、帝堯、『天下はこれ一人の天下に非ず、何を以てか太子なればとて、天下を授くるに、政足らざらん者に位を譲りて、四海の民を苦しましむべき。』とて丹朱に世を授け給はず。さても何處にか賢人ありと、隱遁の者までも尋ね求め給ひける處に、箕山といふ所に許由と申しける賢人、世を捨て光を頼みて、唯苦深く松やせたる岩の上に一瓢を懸けて、瀝々たる風の音に人間迷情の夢を覺してぞ居たりける。帝堯これを聞召して即ち敕使を立てられ、御位を譲るべき由を仰せられけるに、許由遂に敕答を申さず。剩へ松風溪水の清き音を聞きて爽やかなる耳の、富貴榮花の賤しき事を聞きて汗れたる心地しければ、潁川の水に耳を洗ぎける程に、同じ山中に身を捨て隠居したりける巢父といふ賢人、牛を引きてこの川にて水を飼はんとしけるが、許由が耳を洗ふを見て、『何事に今耳をば洗ふぞ。』と問ひければ、許由、『帝堯の我に天下を譲らんと仰せられつるを聞きて、耳汗れたる心地して候間洗ふなり。』とぞ答へける。巢父首を振つて、『さればこそ此の水例よりも濁つて見えつるを、何故やらんと覺束

○何事に 何事にて

○頑詰 左傳に「不道、忠信之言爲頑、心不則、德義之經爲頑。」

○倉廩 倉は穀藏、廩は米藏。
○絺衣 細葛布の衣

なく思ひたれば、此の事にてありけり。左様に汗れたる耳を洗ひたる水の流れをば、牛にも飲ふべき様なし。』とて徒らに牛を引きてぞ歸りける。帝堯さては誰にか世を授くべきとて、到らぬ隈もなく尋ね求め給ふに、冀州に虞舜といふ賤しき人あり。その父瞽叟は盲ひて母は頑詰なり。弟の象は驕り戻る。虞舜は孝行の心深くして、父母を養はん爲に歷山に行きて耕すに、其の地の人畔を譲り、雷澤に下つて漁るに、其の浦の人居を譲る。河濱に陶するに、器皆苦窳あらず。虞舜の行きて居る處に、二年あれば邑をなし、三年あれば都をなす。萬人其の徳を慕ひて來り集まりし故なり。舜年二十にして孝行天下に聞えしかば、帝堯これに天下を譲らんと覺す心あり。まづ内外について其の行ひを御覽せんと覺して、娥皇女英と申しける姫宮を二人舜に妻はせ給ふ。又堯の御子九人を舜の臣となして、其の左右にぞ慎み隨はせられける。堯の二女己が高きを以て夫に驕らざれば、舜の母に嬪する事甚だ違はず。九男同じく舜に臣として事ふる事禮敬更に懈らず。帝堯彌悦びて、舜に又、倉廩、牛羊、絺衣、琴一張をたまふ。舜斯くの如く聲譽上に達し、父母に孝ありしども、繼母我が子の象を世に立てばやと猜む心深くありしかば、瞽叟と象と三人相謀つて舜を殺さんとする事度々なり。舜之を知れども父をも恨みず母をも嗔らず、孝悌の心彌慎みて、唯父母の意に違へる事をのみ天に仰いてぞ悲しみける。或時瞽叟舜を廩の上に登せて屋を葺かせけるに、母下より火を放つて舜を焼き殺さんとす。舜始

○堅牢地神 大地神

めより推したりしかば、かねて持つたる二つの唐笠を張りて、其の柄に取附いて飛び下りにけり。瞽叟安からず思ひければ、又象と相謀つて舜に井をぞ掘らせける。これは井已に深くなりたらん時、上より土を下して舜を生きたが埋めん爲なり。堅牢地神も孝行の子を哀れにや覺しけん、井の底より上げける土の中に半ばは金ぞ交りたりける。瞽叟弟の象と共に慾心に萬事を忘れければ、土を揚げける度毎にこれを争ふ事限りなし。其の間に舜傍に匿穴をぞ掘つたりける。井已に深くなりぬる時、瞽叟と象と共に土を下し大石を落して舜を埋めければ、舜潛にかねて掘りし匿穴より連れ出でて己が家へぞ歸りける。舜斯くの如くして生きたりとは弟の象夢にも知らず、帝堯より舜に賜はりし財共を面々に分ち領しけるに、牛羊倉廩をば父母に與へ二女と琴一張とをば象我が物にすべしと相計らふ。象則ち琴を弾じて二女を愛せん爲に、舜の宮に行きたれば、舜敢て死せず、二女は瑟を調べ、舜は琴を弾じて、優然としてぞ居たりける。象大きに愕いて曰く、「我舜を已に殺しつと思ひて鬱陶しつ。」といひて、誠に忸怩ぢたる氣色なれば、舜琴を闇いて、其の弟たる言を聞くが嬉しさに、「汝さぞ悲しく思ひつらん。」とてそるに涙をぞ流しける。斯かりし後も舜彌孝あつて父母に事ふる道も懈らず、弟を愛する心も淺からざりければ、忠孝の徳天下に顯はれて、帝堯遂に帝位を譲り給ひにけり。舜天子の位を踐んで世を治め給ふ事天に叶ひ地に隨ひしかば、五日の風枝を鳴らさず十日の雨壤を破る事なし。國富み民豊に

○鬱陶しつ 哀れに思つて心が結ばれた

○孔子 孔安國を指す。
○震且 支那。

して、四海其の恩を仰ぎ、萬歳其の徳を頌せり。されば孔子も、忠臣を求むるは必ず孝子の門に於てすといへり。父の爲に不孝ならん人、豈君の爲に忠あらんや。天竺震旦の舊き跡を尋ぬるに、親の爲に道なければ忠あれども罪せらる。獅子國の例これなり。父の爲に孝あれば賤しけれども賞せらる。虞舜の徳これなり。然るに右兵衛佐直冬は父を亡ぼさん爲に君の命を假らんとす。君これを御許容あつて大將の號を許さる、事旁以て道にあらず。山名伊豆守若し此の人を取立てて大將とせば天下の大功を致さん事あるべからず。」と昨木の隠士林翁が眉を擧めて申しけるが、果して實にもと思ひ知らる、世になりにけり。

直冬上洛の事 附 鬼丸鬼切の事

南方に再往の評定あつて、足利右兵衛佐直冬を大將として京都を攻むべきよし諭旨をなされければ、山名伊豆守時氏、子息右衛門佐師氏、五千餘騎の勢を率して、文和二年十二月十三日伯耆國を立ち給ふ。山陰道悉く從ひ附きて兵七千騎に及びしかば、但馬國より杉原越に播磨へ打つて出で、まづ宰相中將義詮の鵬宿におはするをや打散らす、又直に丹波へ懸つて、仁木左京大夫頼章が佐野城に楯籠つて、我等を支へんとするをや打落すと、評定しけるところへ、越中の桃井播磨守直常、越前の修理大夫高經の許より飛脚同時に到來して、たゞ急ぎ京都へ攻め上られ候へ。北國の勢を引き、同時に攻め上るべ

○文和三年 南朝の正平九年。

○天下の口遊み 世人の嘲哂の種。

○塾懐 胸中にむすほれた思ひ。

○故高倉禪門 直義

き由を牒せられける間、さらば夜を日に繼いで上らんとて、山名父子七千六百餘騎、前後十里に支へて丹波國を打通るに、仁木左京大夫頼章當國の守護として敵を支へん爲に在國したる上、今は將軍の執事として勢ひ人に超えたれば、丹波國にて定めて火を散らす程の合戦五度も十度もあらんずらんと覺えけるに、敵の勇銳を見て戦つては中々叶はじと思ひけん、遂に矢の一つをも射懸けずして城の籠をのさくくと通しければ、敵の嘲のみならず天下の口遊みとぞなりにける。都にありとある程の兵をば義詮朝臣に附けて播磨へ下され、遠國の勢は未だ上らず。將軍僅かなる小勢にて京中の合戦は中々悪しかりぬと、思慮旁深かりければ、直冬已に大江山を越ゆると聞えしかば、正月十二日の暮程に、將軍主上を取り奉つて江州の武佐寺へ落ち給ふ。抑此の君御位に即かせ給ひて後未だ三年を過ぎず、二度都を落ちさせ給ひ、百官皆他郷の雲に吟ひ給ふ、淺ましかりし世の中なり。去る程に同じき十三日、直冬都に入り給へば、越中の桃井、越前の修理大夫、三千餘騎にて上洛す。直冬朝臣此の七八箇年、繼母の讒に依つて那邊這邊漂泊し給ひつるが、多年の塾懐一時に開けて今天下の武士に仰がれ給へば、唯年に再び花さく木の、其の根かる、は未だ知らず、春風三月一城の人皆狂するに異ならず。抑山名伊豆守は、若狭の所領の事に附いて宰相中將殿に恨みあり。桃井播磨守は、故高倉禪門に屬して望みを達せざる憤りあれば、此の兩人の敵になり給ひぬる事は少しその謂れあるべし。尾張の修理大夫高經は

○朝敵の大將 持明院の方から見れば義貞は朝敵である。

忠戦自餘の一門に超えしに依つて、將軍も抽賞他に異にして世其の仁を重くせしかば、何事に恨みあるべしとも覺えぬに、俄に今敵になつて將軍の世を傾けんとし給ふ事、何の遺恨ぞと事の起りを尋ねれば、先年越前の足羽の合戦の時、此の高經朝敵の大將新田左中將義貞を討つて、源平累代の重寶に鬼丸鬼切といふ二振の太刀を取り給ひたりしを、將軍使者を以て、「これは未々の源氏など持つべきものにあらず、急ぎこれをわたされ候へ。當家の重寶として嫡流相傳すべし。」と度々仰せられけるを、高經堅く惜しみて、「此の二振の太刀をば長崎の道場に預け置いて候ひしを、彼の道場炎上の時焼けて候。」とて、同じ寸の太刀を二振取替へて、焼き損じてぞ出されける。此の事ありの儘に京都へ聞えければ、將軍大きに忿つて、朝敵の大將を討ちたりつる忠功拔羣なりと雖もさまでの恩賞をも行はれず、事に觸れて面目なき事ども多かりける間、高經これを憤りて、故高倉禪門の謀叛の時もこれに與し、今直冬の上洛にも力を合はせて、攻め上りたまひたりとぞ聞えける。抑此の鬼丸と申す太刀は、北條四郎時政天下を執つて四海を鎮めし後、長一尺許りなる小鬼夜なく時政が跡枕に来て、夢ともなく現ともなく侵さんとする事度々なり。修験の行者加持すれども休まず。陰陽寮封すれども立去らず。剩へこれ故に時政病を受けて、身心苦しむ事隙なし。或夜の夢に、此の太刀一人の老翁に變じて告げて曰く、「我常に汝を擁護する故に彼の妖怪の者を退けんとすれば、汗れたる人の手を持つて劍を探りたりしに

○面影ある心地 見
覺えある心地。
○守り居たる處に
視つめてゐた所に。

○相摸入道 北條高
時。

依つて、鏝身より出でて抜かんとすれども叶はず。早く彼の妖怪を退けんとならば、清淨ならん人をして我が身の鏝を拭ふべし。」と委しく教へて、老翁は又元の太刀になりぬとぞ見えたりける。時政風に起きて、老翁の夢に示しつる如く、或侍に水を浴せて此の太刀の鏝を拭はせ、未だ鞘にはささで、臥したる傍の柱にぞ立て掛けたりける。冬の事なれば暖氣を内に籠めんとて火鉢を近く取寄せたるに、居るたる臺を見れば、銀を以て長一尺ばかりなる小鬼を鑄て、眼には水晶を入れ、齒には金をぞ沈めたる。時政これを見るに、此の閒夜なく夢に來て我を惱ましつる鬼形の者は、さもこれに似たりつる者かなと、面影ある心地して守り居たる處に、抜いて立てたりつる太刀俄に倒れ懸りて、此の火鉢の臺なる小鬼の頭をかけず切つてぞ落したる。誠に此の鬼や化して人を惱ましけん、時政忽ちに心地直りて、其の後よりは鬼形の者夢にも曾て見えざりけり。さてこそ此の太刀を鬼丸と名づけて、高時の代に至るまで身を放さず守となして平氏の嫡家に傳はりける。相摸入道鎌倉の東勝寺にて自害に及びける時、此の太刀を相摸入道の次男少名龜壽に家の重寶なればとて取らせて、信濃國へ祝部を憑みて落ち行く。建武二年八月に鎌倉の合戦に打負けて、諏訪三河守を始めとして宗徒の大名四十餘人大御堂の内に走り入り、顔の皮をはぎ自害したりし中に此の太刀ありければ、定めて相摸次郎時行も此の中に腹切つてぞあらんと人皆哀れに思ひ合へり。其の時此の太刀を取つて新田殿に奉る。義貞斜ならず悦んで、「こ

○三眞國 大原安守の子。
○頼光 滿仲の子。
○六畜 馬、牛、羊、犬、家、鶏の六。
○たびたりける 賜ひたりける。

れぞ聞ゆる平氏の家に傳へたる鬼丸といふ重寶なり。」と秘藏して持たれける劍なり。これは奥州宮城郡の府に、三眞國といふ鍛冶、三年精進潔齋して七重に注連を引き、鍛うたる劍なり。又鬼切と申すは、元は清和源氏の先祖攝津守頼光の太刀にてぞありける。其の昔大和國宇多郡に大森あり。この陰に夜なく妖物あつて、往來の人を取食ひ、牛馬六畜を掴み裂く。頼光これを聞きて、郎等に渡邊源吾綱といひける者に、彼の妖物を討つて參れとて、秘藏の太刀をぞたびたりける。綱則ち宇多郡に行き甲冑を帶して、夜なく件の森の陰にぞ待ちたりける。此の妖者綱が勢ひにや恐れたりけん、敢て眼に遮る事なし。さらば形を替へて謀らんと思ひて、髪を解き亂して掩ひ、鬘をかけ、鐵漿黒に大眉を作り、薄衣を打被きて女の如くに出で立つて、臘月夜の曙に、森の下をぞ通りける。俄に空掻き曇りて、森の上に物の立ち翔る様に見えるが、虚空より綱が髪を掴んで中に提けてぞ騰つたりける。綱、頼光の許より賜はりたる太刀を抜いて、虚空を拂斬にぞ切つたりける。雲の上に啞といふ聲して、血の颯と顔に懸りけるが、毛の黒く生ひたる手の指三つありて爪の鉤りたるを、二の腕よりかけず切つてぞ落しける。綱此の手を取つて頼光に奉る。頼光これを秘して、朱の唐櫃に收めて置かれける後、夜なく恐ろしき夢を見給ひける間、占夢の博士に夢を問ひ給ひければ、七日が間の重き御愼みとぞ占ひ申しける。これに依つて堅く門戸を閉ちて、七重に注連を引き四門に十二人の番衆を居ゑて、毎夜宿直臺目をぞ

○宿直臺目 夜番の武士をして用心の爲に臺目矢を射させること。

○中に 宙に。
 ○破風 屋脊の兩端
 山形をなす部分。
 ○俱利伽羅 不動明
 王の三摩耶形。
 ○多田滿仲 滿仲は
 頼光の父であるから
 頼光から滿仲に傳ふ
 とするは當らない

射させける。齋する事已に七日に満じける夜、河内國高安里より、頼光の母儀おはして門をぞ敲かせける。齋の最中なれども、正しき老母の對面の爲とて、遙々と來り給ひたれば、力なく門を開いて、内へいざなひ入れ奉つて、終夜の酒宴にぞ及びける。頼光酔に和して此の事を語り出されたるに、老母持つたる杯を前に聞き、「あなおそろしや、我があたるの人も此の化物に取られて、子は親に先立ち、婦は夫に別れたる者多く候ぞや。さても如何なるものにて候ぞ。あはれ其の手を見ばや。」と所望せられければ、頼光、「安き程の事にて候。」とて、櫃の中より件の手を取り出して老母の前にぞ聞きける。母これを取つて、暫く見るよししけるが、我が右の手の臂より切られたるを差出して、「これは我が手にて候ひける。」といひて差合はせ、忽ちに長二丈ばかりなる牛鬼となつて、酌に立つたりける綱を左の手に提げながら、頼光に走り懸りける。頼光件の太刀を抜いて、牛鬼の頭をかけず斬つて落す。其の頭中に飛び揚り、太刀の鋒を五寸喰ひ切つて口に含みながら、半時許り跳り上りく、吠え怒りけるが、遂には地に落ちて死ににけり。其の軀は尙破風より飛び出でて、遙かの天に上りけり。今に至るまで渡邊黨の家作に破風をせざるは此の故なり。其の頃修験清淨の横川の僧都覺蓮を請じ奉つて、壇上に此の太刀を立て注連を引き、七日加持し給ひければ、鋒五寸折れたりける劍に、天井より俱利伽羅下り懸りて鋒を口に含みければ、忽ちに元の如く生ひ出でにけり。其の後此の太刀多田滿仲が手に渡つて、信

濃國戸藏山にて又鬼を切つたる事あり。是に依て其の名を鬼切といふなり。此の太刀は、伯耆國會見郡に大原五郎大夫安綱といふ鍛冶、一心清淨の誠を致し、鍛ひ出したる劍なり。時の武將田村將軍にこれを奉る。これは鈴鹿御前、田村將軍と、鈴鹿山にて劍合の劍これなり。其の後田村磨、伊勢大神宮へ參詣の時、大神宮より夢の告を以て、「御所望あつて御殿へ納めらる。其の後攝津守頼光、大神宮參詣の時夢想あり。「汝に此の劍を與ふる。これを以て子孫代々の家嫡に傳へ、天下の守たるべしと。」示し給ひける太刀なり。されば源家に執せらるゝも理なり。

神南合戦の事

去る程に、將軍は持明院の主上を守護し奉りて、近江國四十九院に落ち止まり、宰相中將義詮朝臣は西國より上洛せんずる敵を支へんために、播磨の鰯に豫て在莊し給ひたりと聞えしかば、土岐、佐々木、仁木右京大夫義長、三千餘騎にて四十九院へ馳せ參る。四國西國の兵二萬餘騎、鰯へ馳せ參る。畠山尾張守も東八箇國の勢を率して、今日明日のほどに參著仕るべしと、飛脚度々に及ぶ由申されければ、將軍父子の御勢ひ、唯龍の天に翔つて雲を起し、虎の山に靠つて風を生ずるが如し。東西の牒使相圖の日を定めければ、將軍は三萬餘騎の勢にて、二月四日東坂本に著きたまふ。義詮朝臣は七千餘騎にて、

○畠山尾張守 義深
 か。
 ○東坂本 比叡山の
 東麓。

○子息兵部少輔 氏
經か。

○赤松彈正少弼 天
正本に載せず。

○二の尾 第二の峯

同じき日の早旦に、山崎の西、神南の北なる峯に陣を取り給ふ。右兵衛佐直冬も始めは天津松本の邊に馳せ向つて合戦を致さんと議せられけるが、山門三井寺の衆徒、皆將軍に志を通ずる由聞えければ、唯洛中にして東西に敵を受けて見繕うて合戦すべしとて、一手は右兵衛佐直冬を大將にて、尾張修理大夫高經、子息兵部少輔、桃井播磨守直常、其の勢都合六千餘騎、東寺を攻の城に構へて、七條より下九條まで家々小路々々に充満ちたり。一手は山名伊豆守時氏、子息右衛門佐師氏を大將にて、伊田、波多野、石原、足立、河村、久世、土屋、福依、野田、藤澤、淺沼、大庭、福岡、宇多川、海老名和泉守、吉岡安藝守、小幡出羽守、楯又太郎、加地三郎、後藤壹岐四郎、倭久修理亮、長門山城守、土師右京亮、毛利因幡守、佐治但馬守、鹽見源太以下其の勢合はせて五千餘騎、前に深田をあて、左に河をさかひて、淀、鳥羽、赤井、大渡に引分け陣を取る。河より南には、四條中納言隆俊、法性寺右衛門督康長を大將として、吉良、石堂、原、蜂屋、赤松彈正少弼、和田、楠、眞木、佐和、秋山、酒邊、宇野、崎山、佐美、陶器、岩郡、河野邊、福塚、橋本を始めとして、吉野の軍兵三千餘騎、八幡の山下に陣を取る。山名右衛門佐師氏、始めの程は待つて戦はんとて議したりけるが、神南の敵さまでの大勢ならずと見すかして、日來の議をひるがへして、八幡に控へたる南方の勢と一つになつて、先づ神南宿に打寄り、楯の板をしめし、馬の腹帯を堅めて二の尾よりあけたりけり。此の陣始めより三所に分れて、

○尾崎 峯の端の突出した處。

○二千一本「一千。」

○頼之 頼春の子。

○基明 基信の子。
○白うてぞ見えたりける 白うては白みて。しらけての意。
○江見勘解由左衛門尉 信直。

西の尾崎をば、赤松律師則祐、子息彌次郎師範、五郎直頼、彦五郎範實、肥前權守朝範、並に佐々木佐渡判官入道道譽が手の者、黄旗一揆、彼是合はせて二千餘騎にて堅めたり。南の尾崎をば、細川右馬頭頼之、同式部大輔、西國中國の勢相共に、二千餘騎にて堅めたり。北に當りたる峯には、大將義詮朝臣の陣なれば、道譽、則祐以下の老武者、頭人、評定衆、奉行人、其の勢三千餘騎、油幕の内に布皮を敷き並べ、袖を連ねて並み居たり。嶮しき山の習ひとして、餘所は見えて麓は見えず。何れの陣へか敵はまづ懸らんと、遠目仕うて守り居たる所に、山名右衛門佐を始めとして、出雲伯耆の勢二千餘騎、西の尾崎へ唯一息に驅け上つて、一度に鬨をどつと作る。分内狭き兩方の峯に馬人身を側むる程に打寄せたれば、互に射違ふる込矢の外る、は一つもなし。爰に播磨國の住人後藤三郎左衛門尉基明といひける強弓の手垂、一段高き岩の上に走り上つて、三人張に十四束三伏、飽くまで引いて放ちけるに、楯も物具もたまらねば、山名が兵共進みかねて、少し白うてぞ見えたりける。これを利にして、佐々木が黄旗一揆の中より、大鍛形に一樣の母衣かけたる武者三人、己が結ひたる鹿垣切つて押破り、「日本一の大剛の者、近江國の住人江見勘解由左衛門尉、箕浦四郎左衛門、馬淵新左衛門、眞前懸けて討死仕るぞ。死に残る人あらば語つて子孫に名を傳へよ。」と聲々に名乗り呼ばはりて、斬死にこそ死にけれ。後藤三郎左衛門尉基明、一宮彈正左衛門有種、粟飯原彦五郎、海老名新左衛門四人、高聲に名がつて

○廣み 廣場。

○たび候へ 賜ひ候へ。

○鉦突 矢が裏まで貫通せぬやうに鉦をつき動かすこと。

○秋間 一本「秋庭」。

川を渡し城へ切つて入る。合戦こそ先懸は一人に定まれ。かやうの廣みの軍には、敵と一番に打違へたるを以て先懸とは申すぞ。御方に一人も死に殘る人あらば、證據に立つてたび候へ。」と呼ばはりて、寄手數萬の中へ唯四人切つて入る。右衛門佐大音聲を揚げて、「前陣戦ひ勞れて見ゆるぞ。後陣入り替つてかの敵討て。」と下知すれば、伊田、波多野の早雄の若武者共、二十餘人馬より飛び下り、勇み勇んで抜き連れて渡り合ふ。後には數萬の敵、御方續くぞ引くな。」と力を合はせて喚き叫ぶ。前には五十餘人の者共颯と入り亂れて切り合ふ。太刀の鏗音鏗突、山彦に響き暫しも休む時なければ、山嶽崩れて川谷を埋むかところ聞えけれ。此の時後藤三郎左衛門已下、面に立つ程の兵五十餘人討たれにけり。二陣の南尾をば、細川右馬頭、同式部大輔大將にて、四國中國の兵共が二千餘騎にて固めたりけるが、之は殊更地僻り谷深く切れて、敵の上るべき便りなしと思ひける處に、山名伊豆守を先として小林民部丞小幡、淺沼、和田、楠、和泉、河内、但馬、丹後、因幡の兵共三千餘騎にて、さしも岨しき山路を盤折にぞ上りたりける。此の陣には未だ鹿垣の一重も結はざれば、兩方鬨の聲を并せて矢一筋射進ふる程こそありけれ。聽て打物になつて亂れ合ふ。先づ一番に進んで戦ひける四國勢の中に、秋間兵庫助兄弟三人、生稻四郎左衛門一族十二人一足も引かて討たれにけり。これを見て坂東、坂西、藤家、橋家の者共少し飽んで見えけるを、備前國の住人須々木三郎左衛門父子兄弟六人入り替つて戦ひけるが、

○たびら廣 刀のかさね厚く幅廣なのを云ふ。
○輪齒 刀に未だ刃を合はせぬを云ふ。
○三鉞形 山字のやうに常の鉞形に鉤頭形の立てあるもの。
○延び得ず 逃げ延び得ない。

續く御方なければ之も一所に討たれにけり。之より一陣二陣共に色めき、兵しどろに見えけるを、小林民部丞得たり賢しと、勝つに乗つて短兵急に拉がんと、揉みに揉んで攻めける間、四國中國の三千餘騎、山より北へ捲り落されて、遙かに深き谷底へ、人雪類をつかせて落ち重なれば、敵に逢ひて討死する者は少なしと雖も、己が太刀長刀に貫かれて死する兵數を知らず。これを見て山名右衛門佐、彌氣に乗つて真前に進む上は、相隨ふ兵共誰かは少しも擬議すべき、我先に敵に合はんと争ひ前まずといふ者なし。中にも山名が郎等、因播國の住人に福間三郎とて、世に名を知られたる大力のありけるが、七尺三寸の太刀たびら廣に作りたるを、鏢本三尺ばかり置いて蛤齒に搔き合はせ、伏繩目の鎧に、三鉞形打つたる兜を猪頸に著なし、小跳りして片手打の拂切りに切つて上りけるに、太刀の齒に當る敵は、胴中諸膝かけて切つて落され、太刀の峯にあたる兵は、或は中にづんど打上けられ、或は尻居にどうと打倒されて、血を吐いてこそ死ににけれ。兩陣已に破れし後、兵皆亂れて、總大將の御勢と一所にならんと、崩れ落ちて引きける間、伊田、波多野の者共、「餘すな洩すな。」と喚き叫んで追つ懸けたり。石巖滑かにして荆棘道を塞ぎたれば、引く者も延び得ず返す兵敢て討たれずといふ事なし。赤松彌次郎、舍弟五郎、同彦五郎三人引き留りて、「此を返さで引く程ならば、誰かは一人生き残るべき。命惜しくば返せや殿原、返せや一揆の人々。」と恥しめて匂りけれども、踏み留まる者なかりければ、

○所々にて 夫れぞ
れ別の所で。

○河原太郎 高直。

○ためさせずして
留めさせずして。

○若黨三人 天正本
「山名郎等關次郎左
衛門加地三郎伊達又
太郎三人」ミす。

小國播磨守、伊勢左衛門太郎、匹壇藤六、魚角大夫房、佐々木彈正忠、同能登權守、新谷入道、薦田彈正左衛門、河勾彌七、瓶尻兵庫助、粟生田左衛門次郎、返し合はせく所々にて討たれにけり。河原兵庫助重行は、今度の軍に打負けば、必ず討死せんとかねてより思ひ儲けけるにや、敵の已に押寄せんと方々より打寄するを見て申しけるは、「今日の合戦は我が身一人の喜びかな。元暦のいにしへ、平家一谷に籠りしを攻めし時、一の城戸生田森の前にて、某が先祖河原太郎、河原次郎二人、城の木戸を乗り越えて討死したりしも二月なり。國も替らず月日も違はず、重行同じく討死して彌先祖の高名を顯はさば、冥途黄泉の道の岐に行き合ひて、其の尊靈さこそ悦び給はんすらめ。」と、涙を流して申しけるが、云ひつる言少しも違はず、數萬人の敵の中へ唯一騎懸け入つて、終に討死しけるこそ哀れなれ。赤松肥前權守朝範は、此の陣を一番に破られぬ事、身一人の恥と思ひければ、袖につけたる笠符を引隠して、敵の中へ交つて、よき敵に逢はば打違へて死なんと伺ひ見ける處に、山名右衛門佐が引く敵を追つ立てて、敵を少しも足をためさせずして、唯何處までも追ひ攻めく討つて、前へ通れと兵を下知して、弓手の方を通りけるを、朝範屹と打見て、「哀れ敵や。」といふ儘に、走り懸つて追つ様に、右衛門佐が兜を破れよ碎けよとした、かにちやうと打つ。打たれて屹と振り返れば、山名が若黨二人中に隔てて、肥前守が兜を重ね打ちに打つて打落す。落ちたる兜を取つて著んとて、差しうつぶく處に、

○大居 犬の蹲るや
うに四つ這ひになる
こと。

○羽林公 足利義詮

小鬘の外れ小耳の上、三太刀まで切られければ、流る、血に目昏れて、朝範大居にとつと伏せば、敵押へてとめを刺してぞ捨てたりける。されども此の人死業や來らざりけん、敵首をも取らず。軍散じて後、草の陰より生き出でて助かりけるこそ不思議なれ。一陣二陣忽ちに攻め破られて、山名彌勝つに乗りければ、峯々に控へたる國々の集め勢共、未だ戦はざる先に捨鞭を打ちて落ち行ける程に、大將羽林公の陣の邊には僅かに勢百騎許りぞ残りける。これまでもなほ佐々木判官入道譽、赤松律師則祐二人、少しも氣を屈せず、敷皮の上に居直りて、「何へか一足も引き候べき。唯我等が討死仕つて候はんするを御覽ぜられて後、御自害候へ。」と、大將を置き奉つて、彌勇みてぞ見えたりける。大將の陣無勢になりて、しかも四目結の旗一旒ありと見えければ、山名大きに悦びてまうしけるは、「抑我此の亂を起す事、天下を傾け將軍を滅ほし奉らんと思ふにあらず、唯道譽が我に無禮なりし振舞を憎しと思ふ許りなり。此に四目結の旗は道譽にてぞあるらん。これ天の與へたる處の幸ひなり。自餘の敵に目なかけそ。あの首取つて我に見せよ。」と、齒嚼をし進まれければ、六千餘騎の兵共、我先にと勇み進んで大將の陣へ打つて懸る。敵の近づく事二町許りになりければ、赤松律師則祐、帷幕を颯と打擧げて、「天下の勝負此の軍にあらずや。何時の爲にか命を惜しむべき。名將の御前にて紛れもなく討死して、後記にとどめよや。」と下知しければ、「承り候。」とて、平塚次郎、内藤與次、近藤大藏丞、今村宗五

○後記 後世の記録

○かさに敵をうけたる高所から落すやうに敵を受けた。

○何さいふ儀もなく何の譯もなく。

○追ひすがうて追ひすがうて。

郎、湯淺新兵衛尉、大鹽次郎、曾禰四郎左衛門七人、大將の御前をばら／＼と抜けてか、敵に射手は一人もなし。向ふ敵を御方の射手に射すくめさせて、七人の者共鎧の射向の袖汰り合はせ、跳り懸り／＼、鐔本に火を散らし、鋒に血を淋いで切つて廻りけるに、山名が先懸の兵、四人目の前に討たれて、三十人深手を負ひければ、跡に續ける三百餘人進みかねてぞ見えたりける。これを見て平井新左衛門景範、櫛橋三郎左衛門尉、櫻田左衛門俊秀、大野彈正忠氏永、聲々に「續くぞ引くな。」と、御方の兵に力をつけて、喚いてぞかけたりける。かさに敵をうけたる徒立の勢なれば、新子の馬武者に中を懸け破られて足をもためず、兩方の谷へなだれ下りて引くを見て、初め一陣二陣にて打散らされつる四國中國の兵、此彼より馳せ來つて、忽ちに千餘騎になりにけり。山名右衛門佐、跡なる勢を靡いて、猶懸け入らんと四方を見廻す處に、南方の官軍共、跡に千餘騎にて控へたりけるが、何といふ儀もなく、崩れ落ちて引きける間、矢種盡き氣疲れたる山名が勢、心は猛く思へども叶はず、心ならず御方に引立てられて、山崎を指して引退く。敵卻つて勝つに乗りしかば、嶺々谷々より、五百騎三百騎道を要へ前を遮つて、蜘蛛十文字に懸けたり附け行けるが、鐔本より太刀をば打折りぬ。馬は疲れぬ。徒立になつてぞ立つたりける。弓手の方を屹と見たれば、さも爽やかに鎧うたる武者一騎、三引兩の笠符著けて馳せ

○草脇 馬の前胸部
○馬廻り 馬側。
○七寸 承鞍。手綱の端を承ける轡の孔の稱。

通りけるを、哀れ敵やと打見て、馬の三頭にゆらりと飛び乗り、敵と二人馬にぞ乗つたりける。敵これを御方ぞと心得て、「誰にておはするぞ。手負ならば我が腰に強く抱き附きたまへ。助け奉らん」といひければ、「悦び入つて候。」といひもはてず、刀を抜いて前なる敵の首を掻き落し、懸て其の馬に打乗つて、落ち行く敵を追つて行く。山名右衛門佐が兵共始め因幡を立ちしより、今度は必ず都にて骸を曝さんと思ひ儲けし事なれば、伊田、波多野、多賀谷、浅沼、藤山、土屋、福依、石原、久世、竹中、足立、河村、首藤、大庭、福塚、佐野、火作、宇多、河澤、敷美以下、宗徒の侍八十四人、其の一族郎従二百六十三人、返し合はせ／＼四五町が中にて討たれにけり。右衛門佐は小林民部丞が跡に踏み止まつて防ぎ矢射けるを、討たせじと七騎にて又取つて返し、大勢の中へ懸け入つて面も振らず戦はれる程に、左の眼を小耳の根へ射附けられて目くれ肝消えければ、太刀を倒に突いて、少し心地を取直さんとせられける處に、敵の雨の降る如く射る矢、馬の太腹草脇に五筋まで立ちければ、小膝を折つてどうと伏す。馬より下りたちて、鎧の草摺疊み上げて、腰の刀を抜いて自害せんとし給ひけるを、河村彈正馳せ寄つて己が馬に掻き寄せ、福間三郎が戦ひ疲れて、とある岩の上に休みて居たりけるを招いて、右衛門佐の馬の口を引かせ、河村は徒立になつて、追つて懸る敵に走り懸り／＼、切死にこそ死ににけれ。右衛門佐は乗替の馬に乗つて、些と人心はつきたれども、流るゝ血目に入つて東西更に見え

○人は 御身は。
 ○末の露云々 新古今集に僧正遍昭の歌「末の露本のしづくや世の中の後れ先立つためしなるらむ。」
 ○聖僧。
 ○血を含み云々 貞觀政要に「太宗征遼東攻白巖城、右衛門大將軍李思摩爲流矢所中、帝親爲吮血、將士莫不感動。」
 ○亡卒の遺骸を云々 絹布を人々に與へて死骸を取收めさせたり。右の書に「太宗征高麗、決定州及大軍回次柳城、詔集前後戰亡人骸骨、設太平親臨哭之、盡哀、軍人無不灑泣。」

ざりければ、「馬廻りに誰かある。此の馬の口を敵の方へ引向けよ。馳せ入り、河村彈正が死骸の上にて討死せん。」といさみけるを、福間三郎「此方が敵の方にて候。」とて、馬の口を下り頭に引向け、自ら馬手の七寸に附きて、小砂まじりの小篠原を、三町許り馳せ落ち、御方の勢にぞ加はりける。爰までは追つてかゝる敵もなし。其の後軍は休みにけり。右衛門佐は淀へ打歸つて、此の軍に討たれる者共の名字を一々に書き註して、因幡の岩常谷の道場へ送り、亡卒の後世菩提を弔はせられける。中にも河村彈正は我が命に代つて討たれたる者なればとて、懸けたる首を敵に乞ひ受けて、空しき顔を一目見て涙を流し、てくどかれけるは、「我此の亂を起して天下を覆さんとせし始のより、御邊が我を以て父の如く憑み、我は御邊を子の如くに思ひき。されば戰場に臨む度毎に、御邊生きば我も生き、御邊討死せば我も死なるところを契りしに、人は義に依つて我が爲に死し、我は命を助けられて人の跡に生き残りたる恥かしさよ。昔の下草の陰にても、さこそいふかひなく思ひ給ふらめ。末の露と先立ち本の滴と後る、とも、再會は必ず九品淨土の臺にあるべし。」と泣くく鬢を掻き撫でて、聖一人請じ寄せて、今まで秘藏して乗られたる白瓦毛の馬に白鞍置きて葬馬に引かせ、白太刀一振聖に與へて、討死しつる河村が後生菩提を弔はれける、情の程こそあり難けれ。昔唐の太宗戦ひに臨みて、戰士を重くせしに、血を含み劍を吮ふのみにあらず、亡卒の遺骸をば帛を散じて收めしも、かくやと覺えてあはれなり。

卷第三十三

京軍の事

昨日神南の合戦に山名打負けて、本陣へ引返しぬと聞えしかば、將軍比叡山をおり下つて、三萬餘騎の勢を率し、東山に陣をとる。仁木左京大夫頼章は、丹後丹波の勢三千餘騎を従へて、嵐山に取上る。京より南、淀、鳥羽、赤井、八幡に至るまでは、宮方の陣となり、東山、西山、山崎、西岡は、皆將軍方の陣となる。其の中にありとあらゆる神社佛閣は役所の垣楯のために毀たれ、山林竹木は薪槽の料に剪り盡さる。京中をば敵横合に懸くる時、見透す様になせとて、東山より寄せて日々夜々に焼き拂ふ。白河をば敵を雨露に侵させて、人馬に氣を盡させよとて、東寺より寄せて焼き拂ふ。僅かに残る竹苑、椒庭、里内裏、三台九棘の宿所々々、皆門戸を閉ぢて人もななければ、野干の柵となりはて、荆棘扉を掩へり。去る程に二月八日、細川相摸守清氏千餘騎にて、四條大宮へ押寄せ、北陸道の敵八百餘騎に懸け合つて、追つ返しつ終日戦ひ暮して、左右へ颯と引退くところに、紺糸の鎧に紫の母衣懸けて、黒瓦毛なる馬に厚總懸けて乗つたる武者、年の程四十ばかりに見えたるが、唯一騎馬を閑々と歩ませ寄せて、「今日の合戦に、進む時は士卒に先だつて

○三台九棘 三台九棘、卿に同じ。公卿の事。
 ○野干 狐。

○擬議 躊躇。

○綿嚼 鎧の肩の革で作つた處。

○さもや さもあるべしの意。

進み、引く時は士卒に殿れて引かれ候ひつるは、如何様細川相摸守殿にてぞおはすらん。聲を聞きても、我を誰とは知り給はんずれども、日已に夕陽になりぬれば分明に見分くる人もなくて、あはぬ敵にや逢はんずらんと存する間、事新しく名のり申すなり。これは今度北陸道を打從へて罷り上りて候桃井播磨守直常にて候ぞ。あはれ相摸殿に参り會ひて、日来承り及びし力の程をも見奉り、直常が太刀の金をも御覽候へかし。」と、高聲に名のりかけて、馬を北頭に立ててぞ控へたる。相摸守は元來敵に少しも言を懸けられて、たまらぬ氣の人なりければ、桃井と名のりたるを聞きて、少しも擬議せず、これも唯一騎馬を引返して歩ませ寄する。あひ近になりければ、互に哀れ敵や、天下の勝負唯我と彼とが死生にあるべし。馬を懸け合はせ、組んで勝負をせんと、鎧の綿嚼を攔んで引きつけたるに、言には似ず桃井が力弱く覺えければ、兜を引切つて抛け捨て、鞍の前輪に押當てて、首掻き切つてぞ差擧げたる。廳て相摸守の郎從十四五騎來りたるに、此の首と母衣とを持たせて將軍の御前へ参り、「清氏こそ桃井播磨守を討つて候へ。」とて軍の様を申されければ、蠟燭を明らかに燃しこれを見給ふに、年の程はさもやと覺えながらさすがそれとは見え、田舎に住んで早多年になりぬれば面變りしけるにやと不審して、昨日降人に出でたりける八田左衛門太郎といひける者を召され、「之をば誰が首とか見知りたる。」と問はれければ、八田此の首を一目見て、涙をはらくと流し、「これは越中國の住人に二宮兵庫助と申す者

○無間の業 無間地獄に墮ちる業報。

○朝倉下野守 正盛。廣景の子。

○あなづり 悔り。

の首にて候。去月に越前の敦賀に著きて候ひし時、此の二宮、氣比大明神の御前にて、今度京都の合戦に、仁木細川の人々と見る程ならば、我桃井と名のつて組んで勝負を仕るべし。これ若し僞り申さば、今生にては永く弓矢の名を失ひ後生にては無間の業を受くべしと、一紙の起請を書きて寶殿の柱に押し候ひしが、果して討死仕りけるにこそ。」と申しければ、其の母衣を取寄せて見給ふに、實にも、「越中國の住人二宮兵庫助、骸を戰場に曝し名を末代に留む。」とぞ書きたりける。昔の實盛は鬚鬚を染めて敵にあひ、今の二宮は名字を替へて命をすつ。時代隔たると雖も其の志相同じ。あはれ剛の者かなと惜しまぬこそなかりけれ。二月十五日の朝は、東山の勢共上京へ打入つて、兵糧を取るよし聞えければ、蹴散らかさんとて、苦桃兵部大輔、尾張左衛門佐、五百餘騎にて東寺を打出で、一條二條の間を二手になつて打廻る。これを見て細川相摸守清氏、佐々木黒田判官、七百餘騎にて東山よりおり下る。尾張左衛門佐が後陣に、朝倉下野守が五十騎ばかりにて通りけるを、追つ攻めて討たんと、六條河原より京中へ懸け入る。朝倉少しも騒がず、馬を東頭に立直して、閑かに敵を待ちかけたり。細川、黒田が大勢これを見て、あなづりにくしとや思ひけん。あはひ半町ばかりになつて、馬を一足に颯とかけ居ゑて、同音に鬨を咄と作る。朝倉少しも擬議せず大勢の中へ懸け入つて、馬煙を立てて切り合ふ。左衛門佐これを見て、「朝倉討たすな、つゞけ。」とて、三百餘騎にて取つて返し、六條東洞院を東へ烏丸を

○手番うたる 打揃
ひたる。

○築地 土塼。

○引敷 鎧の後の革
掘で引敷の板を云ふ

西へ、追つ返しつ七八度までぞ揉み合ひたる。細川度毎に追つ立てらる、體に見えけるに、南部六郎とて世に勝れたる兵ありけるが、唯一騎踏み止まつては戦ひ返し合うては切つて落し、八方を捲りて戦ひけるに、左衛門佐の兵共、篋白になつてぞ見えたりける。左衛門佐の兵の中に、三村首藤左衛門、後藤掃部助、西塔金乗坊とて、手番うたる勇士五騎あり。互に屹と合眼して、南部に組まんと相近づく。南部尻目に見て、からくと打笑ひ、「物々しの人々かな。いで胴切つて太刀の金の程見せん。」とて、五尺六寸の太刀を以て開いて、片手打にしと打つ。金乗坊透間なく、つと懸け寄つてむすと組む。南部元來大力なれば、金乗を取つて中に差上げたれども、人飛礫に打つまではさすが叶はず、太刀の寸延びたれば、手本近うしてさけ切にもせられず、たゞ押し殺さんとや思ひけん、築地の腹に推當てて、えいやくと壓しけるに、己が乗つたる馬尻居にどうと倒れければ、馬は南部が引敷の下に在りながら、二人引組んで伏したり。四騎の兵馳せ寄りて、遂に南部を討つてければ、金乗南部が首を取つて鋒に貫きて馳せ返る。これにて軍は止みて敵御方相引に京白川へぞ歸りにける。又同じき日の晩景に、仁木右京大夫義長、土岐大膳大夫頼康、其の勢三千餘騎にて七條河原へ押寄せ、桃井播磨守直常、赤松彈正少弼氏範、原、蜂屋が勢二千餘騎と寄り合はせて、河原三町を東西へ追つ返しつ、煙塵を捲いて戦ふ事二十餘度に及べり。中にも桃井播磨守が兵共、半ば過ぎて劊を被りければ、新手を

○瓜切 瓜を切るや
うに二つ割りにする

替へて相助けん爲に、東寺へ引返しける程に、土岐の桔梗一揆百餘騎に攻め立てられ、返し合はする者は切つて落され、城へ引籠る者は城戸逆茂木にせかれ入り得ず。城中騒ぎあわてて、すはや唯今此の城攻め落されぬとぞ見えたりける。赤松彈正少弼氏範は、郎等小牧五郎左衛門が痛手を負ひて引きかねたるを助けんと、馬の上より手を引立てて歩ませけるを、大將直冬朝臣、高櫓の上より遙かに見給ひて、「返して御方を助けよ。」と、扇を揚げて二三度まで招かれける間、氏範、小牧五郎左衛門をかい攔んで城戸の内へ投げ入れ、五尺七寸の太刀の鐔本取延べて、唯一騎返し合はせく、馳せ竝べく切りけるに、或は兜の鉢を立破に胸板まで破りつけられ、或は胴中を瓜切に斬つて落されける程に、さしも勇める桔梗一揆かなはじと思ひけん、七條河原へ引退いて、其の日の軍は止みにけり。三月十三日、仁木、細川、土岐、佐々木、佐竹、武田、小笠原相集まつて七千餘騎、七條西洞院へ推寄せ、一手は但馬丹後の敵と戦ひ、一手は尾張修理大夫高經と戦ふ。此の陣の寄手動もすれば懸け立てらる、體に見えければ、將軍より使者を立てられて、「那須五郎を罷り向はすべし。」と仰せられける。那須は此の合戦に打出でける始め、故郷の老母の許へ人を下して、「今度の合戦に若し討死仕らば、親に先立つ身となつて、草の陰苔の下までも御歎きあらんを見奉らんすることこそ、想像るも悲しく存じ候へ。」と、申し遣はしたりければ、老母泣くく委細に返事を書いて申し送りけるは、古より今に至るまで、武士の家

○身體髮膚を云々
孝經に「身體髮膚受
之父母、不_レ敢毀傷、
孝之始也、立身行
道揚_二名於後世、以顯
父母、孝之終也。」
○資高 平家物語に
「宗高」云々。

○領狀 承引。
○立つ足もなく 足
の立場もなく。

に生る、人、名を惜しみて命を惜しまず、皆これ妻子に名残を慕ひ父母に別れを悲しむと雖も、家を思ひ嘲りを恥づる故に惜しかるべき命を捨つる者なり。始め身體髮膚を我に受けて毀ひ傷らざりしかば、其の孝已に顯はれぬ。今又身を立て道を行ひて名を後の世に揚ぐるは、これ孝の終りたるべし。されば今度の合戦に相構へて身命を輕んじて先祖の名を失ふべからず。これは元暦の古、曩祖那須與一資高、八島の合戦の時扇を射て名を揚げたりし時の母衣なり。」とて、薄紅の母衣を錦の袋に入れてぞ送たりける。さらでだに戰場に莅みて、いつも命を輕んずる那須五郎が、老母に義を勧められて彌氣を勵ましける處に、將軍より別して使を立てられ、「此の陣の戦ひ難儀に及ぶ。向つて敵を拂へ。」と餘儀なくも仰せられければ、那須曾て一議も申さず畏まりて領狀す。唯今御方の大勢ども立つ足もなくまくり立てられて、敵皆勇み進める真中へ會釋もなく懸け入つて、兄弟三人一族郎從三十六騎、一足も引かず討死しける。那須が討死に、東寺の敵機に乗らば、合戦又難儀になりぬと危く覺える處に、佐々木六角判官入道崇永と相摸守清氏と兩勢一手になつて、七條大宮へ懸け抜け、敵を西にうけ東に顧みて、入り替りく半時許りぞ戦ひたる。東寺の敵も此を先途と思ひけるにや、戒光寺の前に垣楯掻きて打出でく火を散らして戦ひけるに、相摸守薄手數多所に負ひて、すはや討たれぬと見えければ、崇永彌進みて之を討たせじとぞ戦ひける。斯かる處に土岐桔梗一揆五百餘騎にて、新手に替らんと進

○旗差 馬に乗つて
大將の旗を持つ兵。
○堀次郎 時貞。

みけるを見て、敵も新手をや憑みけん、垣楯の陰をはつと捨て半町許りぞ引いたりける。敵に息を繼がせば又立て直す事もこそあれとて、佐々木と土岐と垣楯の内へ入つて、敵の陣に入り替らんとしけるが、廻る程も猶遅くや覺えけん、佐々木が旗差堀次郎、竿ながら旗を内へ投げ入れて、己が身は懸て垣楯を上り越えてぞ入つたりける。其の後相摸守と桔梗一揆と左右より廻つて垣楯の中へ入り、南に楯を突き雙べて、三千餘騎を一所に集め、向城の如くにて踏まへたれば、東寺に籠る敵軍の勢、氣を屈し勢を吞まれて、城戸より外へ出でざりけり。京中の合戦は、此の如く數日に及びて雌雄日々替り、安否今にありと見えけれども、時の管領仁木左京大夫頼章は、一度も桂川より東へ打越えず、唯嵐山より遙かに直下して、御方の勝ちけに見ゆる時は延び上りて悦び、負くるかと思しき時は、色を變じて落ち支度の外は他事なし。同じ陣にありける備中の守護飽庭ばかりぞ、餘りに見かねて、己が手勢ばかりを引分けて、度々の合戦をばしたりける。されども大度は一木の支ふる處にあらず、山陰道をば頼章の勢に塞がれ、山陽道は義詮朝臣に圍まれ、東山、北陸道の兩道は將軍の大勢に塞がれて、僅かに河内路より外はあきたる方なかりければ、兵糧運送の道も絶えぬ。重ねて攻め上るべき援けの兵共もなし。合戦は今まで牛角なれども、將軍の勢日々随つて重なる。かくては始終叶はじとて、三月十三日の夜に入つて右衛門佐直冬朝臣、國々の大將相共に、東寺、淀、鳥羽の陣を引き、八幡、住吉、天王

寺、境浦へぞ落ちられける。

八幡御託宣の事

爰にて落ち集まりたる勢を見れば五萬騎に餘れり。此の上に伊賀、伊勢、和泉、紀伊國の勢共、猶馳せ集るべしと聞えしかば、暫く此の勢を散らさで今一合戦あるべきかと、諸大將の意見區々なりけるを、直冬朝臣、許否凡慮の及ぶ處にあらず。八幡の御寶前にして御神樂を奏し、託宣の言について軍の吉凶を知るべし。とて、様々の奉幣を奉り、蕪蕪を勧めて、則ち神の告をぞ待たれける。社人の打つ鼓の聲、きねが袖ふる鈴の音、深け行く月に神さびて、聞く人信心を傾けたり。託宣の神子、啓白の句、言巧みに玉を連ねて、様様の事どもを申しけるが、

- 蕪蕪 神への供物
- きね 巫女。
- 託宣の神子 神の仰せを告げる巫女。
- 向後 今後。
- 木主 位牌。
- 義帝 楚の懷王。懷王が項羽に弑せられた時高祖は懷王の爲に喪を發して尊敬した故事。

たらちねの親をまもりの神なればこの手向をばうくるものかは
と一首の神歌を繰り返し、二三遍詠じて、其の後御神はあがらせ給ひにけり。諸大將これを聞きて、さては此の兵衛佐殿を大將にて將軍と戦はん事は、向後も叶ふまじかりけりとて、東山、北陸道の勢は、駒に策をうち己が國々へ馳せ下り、山陰、西海の兵は、船に帆を揚げて落ちて行く。誠に征討の法、合戦の體は士卒にありと雖も、雌雄は大將に依るものなり。されば周の武王は木主を作つて殷の世を傾け、漢の高祖は、義帝を尊みて秦

の國を滅ぼせし事、舊記の載する所誰かこれを知らざらん。直冬これ何人ぞや、子として父を攻めん、天豈許す事あらんや。始め遊和軒朴翁が天竺震旦の例を引いて、今度の軍に宮方勝つ事を得難しと、眉を擧めて申ししを、實にも理なりけりとは、今こそ思ひ知られたれ。東寺落ちて翌の日、東寺の門にたつ。
とにかくに取らたてにける石堂も九重よりしてまた落ちにけり
深き海高き山名とたのむなよ昔もさりし人とこそきけ
唐橋や鹽の小路のやけしこそ桃井どのは鬼味噌をすれ

三上皇吉野より御出での事

足利右兵衛佐直冬、尾張修理大夫高經、山名伊豆守時氏、桃井播磨守直常以下の官軍、今度諸國より攻め上つて、東寺、神南度々の合戦に打負けしかば、皆己が國々に逃げ下つて、猶此の素懷を達せんことをはかる。これに依つて洛中は今靜謐の體にて、髪を被り衾を左にする人はなけれども、遠國は猶しづまらで、戈を荷ひ糧を裏む事隙なし。爰に持明院の本院、新院、主上、春宮は皆去々年の春南方へ囚はれさせ給ひて、賀名生の奥に押籠められ坐せしかば、とても都には茨宮已に御位に即かせ給ひぬる上は、山中の御栖居餘りに御痛はしければとて、延文二年の二月に、皆賀名生の山中より出し奉りて、都へ還幸

- 鹽の小路 七條大路の町名。
- 鬼味噌 羊質虎皮の意で俗に弱みそといふ語。
- 衾 おくみ。
- 茨宮 後光嚴天皇

○上皇 光明院。

○新院 光明院。

○悉達太子 釋迦。

○十千の國 仁王經下卷に「閻浮提有十千小國」と見ゆ。

○半間の雲云々 雲に家の一間を借し月に榻を分ち與へる意

なし奉る。上皇は故院の住み荒らさせ給ひし伏見殿に移らせ給ひて御座あれば、参り仕ふる月卿雲客の一人もなし。庭には草生ひ滋りて、梧桐の黄葉を踏み分けたる道もなく、軒には苔深くむして、見る人からに袖ぬらす月さへ疎くなりけり。本院は去る觀應三年八月八日、河内の行宮にして御出家あり。御年四十一、法名勝光智とぞ申しける。御歸洛の後、本院、新院、兩御所共に夢窓國師の御弟子にならせ給ひて、本院は嵯峨の奥小倉の麓に幽なる御庵をむすばれ、新院は伏見の大光明寺にぞ御座ありける。何れも物さびしく人目枯れたる御栖居、申すも中々おろかなり。彼の悉達太子は、淨飯王の宮を出でて檀香山に分け入り、善施太子は、鳩留國の翁に身を與へて檀施の行を修し給ふ。これは皆十千の國を并せたる十六の大國を保ち給ひし王位なれども、捨つるとなれば其の位一塵よりも猶輕し。況んや我が國は粟散邊地の境なり。縱令天下を一統にして無爲の大化に樂しませ給ふとも、彼の大國の王位に比すれば千億にして其の一にも及び難し。かやうの理を思召し知らせ給ひて、憂きを便りに捨てはてさせ給ひぬる世なれば、御身も輕きのみならず御心も又閑かにして、半間の雲一榻の月、禪餘の御友となりければ、中々御心安くぞ渡らせ給ひける。

飢人身を投ぐる事

- 離々 垂れたさま
- 蓮府槐門 大臣
- 朝氣の煙 朝飯を炊ぐ煙。
- 首陽に死する人 伯夷叔齊の首陽山の故事から餓死する人の意。
- 上北面 北面の武士で五位を賜はり昇殿を許されたもの。
- 道路に袖をひろげん事 袖乞乞食などになること。

かくて事の様を見聞くに、天下此の二十餘年の兵亂に、林裏、仙洞、竹苑、椒房を始めとして、公卿、殿上、諸司、百官の宿所々々多く焼け亡びて、今は纔かに十が二三残りたりしを、又今度の東寺合戦の時、地を拂つて、京白川に武士の屋形の外は在家の一字も續かず。離々たる原上の草、累々たる白骨、叢に纏はれて、ありし都の跡とも見えなかりければ、蓮府槐門の貴族、なま上達部、上蔭、女房達に至るまで、或は大井、桂川の波の底の水屑となる人もあり、或は遠國におち下つて田夫野人の賤しきに身を寄せ、或は片田舎に立忍びて、桑の門竹の扉に住み侘び給へば、夜の衣薄くして曉の霜冷たく、朝氣の煙絶えて後、首陽に死する人多し。中にも哀れに聞えしは、或御所の上北面に兵部少輔なにがしとかやいひける者、日來は富み榮えて樂しみ身に餘りけるが、此の亂の後財寶は皆取散らされて、從類眷屬は何地ともなく落ち失せて、唯七歳なる女子、九つになる男子と年頃相馴れし女房と、三人許りぞ身に添ひける。都の内には身を置くべき露のゆかりもなく、道路に袖をひろげん事もさすがなれば、思ひかねて、女房は娘の手を引き、夫は子の手を引き、泣く泣く丹波の方へぞ落ち行きける。誰を憑むとしもなく、何處へ落ち著くべしとも覺えねば、四五町行きては野原の露に袖を片敷きて泣き明し、一足歩んでは木の下草にひれふし泣き暮す。唯夢路をたどる心地して、十日ばかりに丹波國井原の岩屋の前に流れたる思出河といふ所に行き到りぬ。都を出でしより、道に落ちたる栗柿なんど

○さりぬべき 相當の。

○なまほうたる人 怪しき人。

を拾ひて纒かに命を繼ぎしかば、身も餘りにくたびれ足も立たずなりぬとて、母少き者、みな川の端に倒れ伏して居たりければ、夫餘りに見かねて、とある家のさりぬべき人の所と見えたる内へ行きて、中門の前にイみて、つかれ乞をぞしたりける。暫くあつて侍中間十餘人走り出でて、「用心の最中、なまぼうたる人の疲れ乞するは、夜討強盜の案内見るものか。然らずは宮方の廻文持つて廻る人にてぞあるらん。禁しめ置いて拷問せよ。」とて手取り足取り打縛り、上げつ下しつ二時ばかりぞ責めたりける。女房少き者、斯かる事とは思ひ寄らず、川の端に疲れ臥して、今やノと待ち居たりける處に、道を通る人行きやすらひて、「あなあはれや、京家の人かと覺しき人の年四十許りなりつるが、疲れ乞しつるを怪しき者かとて、あれなる家に捕へて、上げつ下しつ責めつるが、今は責め殺してぞあるらん。」と申しけるを聞きて、此の女房少き者、「今は誰に手を牽かれ誰を憑みてか暫くの命をも助かるべき、後れて死なば冥途の旅に獨迷はんも憂かるべし。暫く待つて伴はせたまへ。」と、聲々に泣き悲しみて、母と二人の少き者、互に手に手を取組み、思出河の深き淵に身を投げけるこそ哀れなれ。兵部少輔は、いかに責め問ひけれども、此の者元來咎なければ、落ちざりける間、「さらば許せ。」とて許されぬ。これにもこりず、妻子の飢ゑたるが悲しさに、又とある在家へ行きて、菓などを乞ひ集めて、先の川端へ行きて見るに、母少き者共が著けたる小草鞋杖などはあつて其の人はなし、こは如何になりぬる事

○在家 民家。

ぞやと周章て騒ぎて、彼方此方求めありく程に、渡より少し下なる井堰に、奇しき物のあるを立寄つて見たれば、母と二人の子と手に手を取組みて流れかゝりたり。取上げて泣き悲しめども、身も冷えはてて色もはや變りはててければ、女房と二人の子を抱き拘へて、又本の淵に飛び入り、共に空しくなりにけり。今に至るまで心なき野人村老、縁も知らぬ行客旅人までも、此の川を通る時、哀れなることに聞き傳へて、涙を流さぬ人はなし。誠に悲しかりける有様かなと、思ひやられてあはれなり。

公家武家榮枯地を易ふる事

公家の人はかやうに窮困して、溝壑に墮まり道路に迷ひけれども、武家の族は富貴日來に百倍して、身には錦繡を纏ひ食に八珍を盡せり。前代相摸守の天下を成敗せし時、諸國の守護、大犯三箇條の檢斷の外は綺ふ事なかりしに、今は大小の事共に唯守護の計らひにて、一國の成敗我意に任すれば、地頭御家人を郎従の如く召仕ひ、寺社本所の所領を兵糧料所として押へて管領す。其の權威唯古の六波羅、九州の探題の如し。又都には佐々木佐渡判官入道譽を始めとして在京の大名、衆を結んで茶の會を始め、日々に寄り合ひ活計を盡すに、異國本朝の重寶を集め、百座の粧をして、皆曲衆の上に豹虎の皮を布き、思ひくの緞子金欄を裁ち著て、四主頭の座に列をなして並み居たれば、唯百福莊嚴の床

○八珍 八種の珍味 即ち淳熬、淳母、炮豚、炮脾、炮珍、漬熬、肝膏。
○綺ふ 干渉する。
○押へて 無理に。
○百福莊嚴 福とは功德善根を云ひその善根を百合はせたのを百福と云ふ。莊嚴とは其のいかめしい様。

- 折敷 へぎの類。
- 十番の齋羹 數多くの精進物の汁。
- 點心 間食に供する菓子類。
- 五味 酸、苦、甘、辛、鹹の五つ。
- 百物 百種の品物
- 沈のほた 沈香の木片。
- 麝 麝香は麝の部分中最も香氣あるに云はれる。

○一立 一度の立合

の上に、千佛の光を雙べて坐し給へるに異ならず。異國の諸侯は遊宴をなす時、食膳方丈とて、座の圍り四方一丈に珍物を備ふなれば、其れに劣るべからずとて、面五尺の折敷に十番の齋羹、點心百種、五味の魚鳥、甘酸苦辛の菓子共、色々様々居る雙べたり。飯後は旨酒三獻過ぎて、茶の懸物に百物、百の外に又前引の置物をしけるに、初度の頭人は、奥染物各百づゝ六十三人が前に積む。第二度の頭人は、色々の小袖十重づゝ置く。三番の頭人は、沈のほた百兩づゝ、麝香の臍三つ、副へて置く。四番の頭人は沙金百兩づゝ、金絲花の盆に入れて置く。五番の頭人は、唯今仕立てたる鎧一縮に、鮫懸けたる白太刀、柄鞘皆金にて打ちくゝみたる刀に、虎の皮の火打袋をさけ、一樣にこれを引く。以後の頭人二十餘人、我人に勝れんと、様をかへ數を盡して、山の如く積み重ねぬ。されば其の費え幾千萬と云ふ事を知らず。これをもせめて取つて歸らば、互にこれを以て彼に替へたる物共とすべし。伴につれたる遁世者、見物の爲に集まる田樂、猿樂、傾城、白拍子などに皆取りくれて、手を空しくして歸りしかば、窮民孤獨の飢を資くるにもあらず、又供佛施僧の檀施にもあらず、唯金を泥に捨てて玉を淵に沈めたるに相同じ。此の茶事過ぎて又博奕をして遊びけるに、一立に五貫十貫立てければ、一夜の勝負に五六十貫負くる人のみあつて百貫とも勝つ人はなし。これも田樂、猿樂、傾城、白拍子に賦り捨てける故なり。抑此の人々長者の果報あつて、地より物が涌きけるか、天より財が降りけるか、降るにあらず涌

- 論人 訴訟人。
- 公人 官人。

○法體 僧侶の姿。

- 倉公 支那の名醫
- 華佗 養性の術に通曉した人。
- 君臣佐使の藥 一方劑の中に主とする藥を君とし他の藥を臣とし佐とし使とする意。
- 寅の刻 午後四時
- さらぬ別れ 當然免かれぬ別れ。死別。

くにあらず、唯寺社本所の所領を押し取り、土民百姓の資財を責め取り、論人訴訟の賄賂を取集めたる物どもなり。古の公人たりし人は、賄賂をも取らず勝負をもせず、圍碁雙六をだに酷だ禁ぜしに、萬事の沙汰を闇いて、訴人來れば酒宴茶の會などいひて對面に及ばず、人の歎きをも知らず、嘲りをも顧みず、長時に遊び狂ひけるは、前代未聞の僻事なり。斯かりし程に、延文三年二月十二日、故左兵衛督直義入道慧源、さしも爪牙耳目の武臣たりしかば、從二位の贈爵を昔の下なる遺骸にぞ賜はりける。法體死去の後、此くの如き宣下其の例なしとぞ人皆申し合はれける。

將軍御逝去の事

同じき四月二十日、尊氏卿背に癰瘡出でて、心地例ならず坐しければ、本道外科の醫師數を盡して參り集まり、倉公華佗が術を盡し、君臣佐使の藥を施し奉れども更に驗なし。陰陽頭、有驗の高僧集まつて、鬼見太山府君、星供、冥道供、藥師の十二神將の法、愛染明王、一字文殊、不動慈救延命の法、種々の懇祈を致せども、病日に隨つて重くなり、時を添へて憑み少なく見え給ひしかば、御所中の男女氣を呑み、近習の從者涙を押へて、日夜寢食を忘れてたり。斯かりし程に、身體次第に衰へて、同じき二十九日寅の刻、春秋五十四歳にて遂に逝去し給ひけり。さらぬ別れの悲しさはさる事ながら、國家の柱石摧けぬれ

○衣笠山 山城國衣笠村の西。
 ○龍山和尚 壽福寺寂庵の門弟。
 ○平田和尚 禪光寺玄馬の門弟。
 ○無徳和尚 圓覺寺昭元の門弟。
 ○鑑翁和尚 建長寺土雲の門弟。
 ○下火 火葬の時火をつける僧の役名。

○新千載集 二十卷あつて延文四年藤原爲定の奏した教撰和歌集。

ば、天下今も如何とて、歎き悲しむ事限りなし。さてあるべきにあらざとて、中一日あつて、衣笠山の麓等持院に葬し奉る。鎖籠は天龍寺の龍山和尚、起籠は南禪寺の平田和尚、奠茶は建仁寺の無徳和尚、奠湯は東福寺の鑑翁和尚、下火は等持院の東陵和尚にてぞおはしける。哀れなるかな、武將に備はつて二十五年、向ふ處は必ず従ふと雖も、無常の敵の來るをば防ぐに其の兵なし。悲しいかな、天下を治めて六十餘州、命に隨ふ者多しと雖も、有爲の境を辭するには伴ひて行く人もなし。身は忽ちに化して暮天數片の煙と立ち上り、骨は空しく留まつて卵塔一掬の塵となりけり。別れの涙に搔き暮れて、これさへとまらぬ月日かな。五旬程なく過ぎければ、日野左中辨忠光朝臣を敕使にて、從一位左大臣の官を贈らる。宰相中將義詮朝臣、宣旨を啓いて三度拜せられけるが、涙をおさへて、かへるべき道しなければ位山のほるにつけてぬる、袖かな

新待賢門院 附 梶井宮御隠れの事

同じき四月十八日、吉野の新待賢門女院隠れさせ給ひぬ。一方の國母にておはしけれ

○新待賢門院 河野左中將公廉の女で後村上帝の御母。
 ○椒房、掖庭 共に後宮。
 ○台嶺 比叡山。

ば、一人を始め進らせて、百官皆椒房の月に涙を落し、掖庭の露に思ひを摧く折節、如何にありける事ぞやとて、涙を拭ひける處に、又同じき年五月二日、梶井二品親王御隠れありければ、山門の悲歎、竹苑の御嘆き更に類なし。此等は皆天下の重き歎きなりしかば、知るも知らぬも推並べて、世の中如何あらんずらんと打ちひそめき、洛中、山上、南方、打續きたる哀傷、蘭省露深く、柳營煙暗くして、台嶺の雲の色悲しんで、今年は如何なる歳なれば、高き歎きの花散りて、陰の草葉に懸るらんと、僧俗男女共に押並べて袖をぞしほりける。

崇徳院の御事

○直氏 範氏の子。
 ○畠山治部大輔 國久。
 ○無沙汰にて闇かほ手をつけずに捨ておいたならば。

今年の春、筑紫の探題にて將軍より置かれたりける一色左京大夫直氏、舍弟修理大夫範光は、菊池肥前守武光に打負けて京都へ上られければ、少貳、大友、島津、松浦、阿蘇、草野に至るまで、皆宮方に従ひ靡き、筑紫九國の内には、唯畠山治部大輔が日向の六笠城に籠りたる許りぞ、將軍方とては残りける。これを無沙汰にて闇かば、今將軍の逝去に力を得て、菊池如何様都へ攻め上りぬと覺ゆる、これ天下の一大事なり。急いで討手の大將を下さでは叶ふまじとて、故細川陸奥守顯氏の子息、式部大夫繁氏を伊豫守になして、九國の大將にぞ下されける。此の人先づ讃岐國へ下り、兵船をそろへ軍勢を集むる程に、延

○豊地 地に膝行するさまのぶりの様
○卯の刻 午前六時

文四年六月二日俄に病みついて物狂ひになりたりけるが、自ら口走つて、「我崇徳院の御領を落して、軍勢の兵糧料所に充て行ひしに依つて重病を受けたり。天の譴八萬四千の毛孔に入つて五臟六腑に餘る間、冷じき風に向へども盛んなる炎の如く、冷やかなる水を飲めども沸き返る湯の如し。あら熱や堪へ難や、これ助けてくれよ。」と悲しみ叫びて、悶絶躓地しければ、醫師陰陽師の看病の者ども近づかんとするに、あたり四五間の中は猛火の盛んに燃えたる様に熱して、更に近づく人もなかりけり。病みついて七日に當りける卯の刻に黄なる旗一旒差して、混兎の兵千騎ばかり、三方より同時に鬨の聲を揚げて押寄せたり。誰とは知らず敵寄せたりと心得て、此の間馳せ集まりたる兵共五百餘人、大庭に走り出でて散々に射る。箭種盡きぬれば打物になつて、追つ返しつ半時許りぞ戦ひたる。搦手より寄せける敵かと覺えて、紅の母衣掛けたる兵十餘騎、大將細川伊豫守が首と家人行吉掃部助が首とを取つて、鋒に貫き、「悪しと思ふ者をば皆打取つたるぞ。これ看よや兵共」とて、二つの首を差上げたれば、大手の敵七百餘騎、勝鬨を三聲どつと作つて歸るを見れば、此の寄手天に上り雲に乗じて、白峯の方へぞ飛ひ去りける。變化の兵歸り去れば、これを防ぎつる者共、討たれぬと見えつる人も死せず、手負と見えつるも恙なし。こはいかなる不思議ぞと、互に語り互に問ひて、暫くあれば、伊豫守も行吉も同時にはかなくなりけり。誠に濁悪の末世といひながら、不思議なる事どもなり。

菊池合戦の事

○十一月十七日 延文三年。

○氏時 貞宗人道愚鑑の子。
○宇都宮大和前司 名は宏知。
○軍立 重畧。

少貳、大友は、菊池に九國を打従へられて、其の成敗に従ふ事安からず思ひければ、細川伊豫守の下向を待つて旗を擧げんと企てけるが、伊豫守、崇徳院の御靈に罰せられて、犬死しぬと聞えければ、力を失うて機を呈はさず。斯かる處に畠山治部大輔が、未だ宮方には従はで楯籠りたる六笠城を攻めんとて、菊池肥後守武光四千餘騎にて、十一月十七日肥後國を立つて日向國へぞ向ひける。道四日路が閑、山を越え川を渡つて、行前は嶮岨に跡は難所にてぞありける。少貳、大友、菊池が催促に應じて、豊後國中に打出でて勢汰へをしけるが、これこそよき時分なれと思ひければ、菊池を日向國へ遣り過して後、大友刑部大輔氏時、旗を擧げて豊後の高崎城に取上る。宇都宮大和前司は、河を前にして豊前の路を塞ぎ、肥前刑部大輔は、山を後に當てて筑後の道をぞ塞ぎける。菊池已に前後の大敵に取籠められて何處へか引くべき。唯籠の中の鳥、網代の魚の如しと、憐まぬ人もなかりけり。菊池此の二十餘年が間、筑紫九國の者共が軍立手柄のほどを、敵に受け御方になして、能く知り透したりければ、後には敵旗を上げ道を塞ぎたりと聞えけれども、更に事ともせず、十一月十日より矢合して、畠山治部大輔が子息民部少輔が籠りたる三俣城を晝夜十七日が中に攻め落して、敵を討つこと三百人に及べり。畠山父子憑み切つたる三俣城を

落されて、かなはじとや思ひけん、攻の城にもたまたらず、引いて深山の奥へ逃げ籠りければ、菊池今はこれまでぞとて肥後國へ引返すに、跡を塞ぎし大敵共更に戦ふ事なければ、箭の一つをも射す己が館へぞ歸りける。これまでは未だ大宰少貳、阿蘇大宮司、宮方を背く氣色なかりければ、彼等に牒じ合はせて、菊池五千餘騎を率して大友を退治せん爲に豊後國へ馳せ向ふ。此の時大宰少貳俄に心替りして太宰府にして旗を擧げければ、阿蘇大宮司これに與して菊池が跡を塞がんと、小國といふ處に九箇所の城を構へて、菊池を一人も討ち漏らさじとぞ企てける。菊池兵糧運送の路を止められて豊後へ寄する事も叶はず、又太宰府へ向はん事も難儀なりければ、先づ我が肥後國へ引返してこそ、其の用意をも致さめとて、菊池へ引返しけるが、阿蘇大宮司が構へたる九箇所の城を一々に攻め落して通るに、阿蘇大宮司憑み切つたる手の者共三百餘人討たれければ、敵の通路を止むるまでは思ひよらず、我が身の命を希有にしてこそ落ち行きけれ。去る程に七月に征西將軍宮を大將として、新田の一族、菊池の一族、太宰府へ寄すと聞えしかば、少貳は陣を取つて敵を待たんとて、大將太宰筑後守頼尙、子息筑後新少貳忠資、甥の太宰筑後守頼泰、朝井但馬將監胤信、筑後新左衛門頼信、窪能登太郎泰助、肥後刑部大輔泰親、太宰出雲守頼光山井三郎惟則、饗庭左衛門藏人重高、同左衛門大夫行盛、相馬小太郎、木綿左近將監、西河兵庫助、草壁六郎、牛糞刑部大輔、松浦黨には、佐志將監、田平左衛門藏人、千葉右京

○我が身の命を希有にして 我が命の助かつたのを不思議の事にして。
○征西將軍宮 世良親王。

大夫、草野筑後守、子息肥後守、高木肥前守、綾部修理亮、藤木三郎、幡田次郎、高田筑前前司、三原秋月の一族、島津上總入道、澀谷播磨守、本間十郎、土屋三郎、松田彈正少弼、河尻肥後入道、詮間三郎、鹿子木三郎、此等を宗徒の侍として都合其の勢六萬餘騎杜渡を前に當てて味坂莊に陣を取る。宮方には、先帝第六の皇子征西將軍宮、洞院權大納言、竹林院三位中將、春日中納言、花山院四位少將、土御門少將、坊城三位、葉室左衛門督、日野左少辨、高辻三位、九條大外記、子息主水正、新田一族には、岩松相摸守世良田大膳大夫、田中彈正大弼、桃井左京亮、江田丹波守、山名因幡守、堀口三郎、里見十郎、侍大將には、菊池肥後守武光、子息肥後次郎、甥肥前次郎武信、同孫三郎武明、赤星掃部助武貫、城越前守、賀屋兵部大輔、見參岡三河守、庄美作守、國分二郎、故伯耆守長年が次男名和伯耆權守長秋、三男修理亮、宇都宮刑部丞、千葉刑部大輔、白石三河入道、鹿島刑部大輔、大村彈正少弼、太宰權少貳、宇都宮壹岐守、大野式部大輔、派讚岐守、溝口丹波守、牛糞越前權守、波多野三郎、河野邊次郎、稻佐治部大輔、谷山右馬助、澀谷三河守、同修理亮、島津上總四郎、齋所兵庫助、高山民部大輔、伊藤攝津守、絹脇播磨守、土持十郎、合田筑前守、此等を宗徒の兵として、其の勢都合八千餘騎、高良山、柳坂、水繩山三箇所に陣をぞ取つたりける。同じき七月十九日に、菊池はまづ己が手勢五千餘騎にて筑後河を打渡り、少貳が陣へ押寄す。少貳如何おもひけん戦はず、三十餘町引

○熊野の牛王 熊野
牛王寶印の六字と神
使と云はれる鳥七十
五羽を捺した誓紙
をいふ。

○分内 限界。
○沓の子 沓裏の紙

退き大原に陣を取る。菊池續いて攻めんとしけるが、間に深き沼あつて細道一つありけるを、三所掘り切つて細き橋を渡したりければ、渡るべき様もなかりけり。兩陣僅かに隔て旗の文鮮かに見ゆる程になれば、菊池態と少貳を恥ぢしめんために、金銀にて月日を打つて著けたる旗の蟬本に、一紙の起請文をぞ押ししたりける。これは去年太宰少貳、古浦城にて已に一色宮内大輔に討たれんとせしを、菊池肥後守大勢を以て後攻をして、少貳を助けたりしかば、少貳悦びに堪へず、「今より後子孫七代に至るまで、菊池の人々に向つて弓を引き矢を放つ事あるべからず。」と、熊野の牛王の裏に、血を絞りに書きたりし起請なれば、今情なく心變りしたる處のうたてしさを、且は天に訴へ、且は人に知らしめん爲なりけり。八月十六日の夜半許りに、菊池先づ夜討に馴れたる兵を三百人勝つて、山を越え水を渡つて搦手へ廻す。宗徒の兵七千餘騎をば三手に分けて、筑後河の端に副ひて、河音に紛れて嶮岨へ廻りて押寄す。大手の寄手今は近づかんと覺えける程に、搦手の兵三百人敵の陣へ入つて、三處に鬨の聲を揚げ十方に走り散つて、敵の陣々へ矢を射懸けて、後へ廻つてぞ控へたる。分内狭き所に六萬餘騎の兵、沓の子を打つたる様に役所を作り雙べたれば、鬨の聲に驚き、何れを敵と見分けたる事もなく、此處に寄り合ひ彼處に懸け合つて、喚き叫びて追つ返しつ同士打をする事數刻なりしかば、少貳恐み切つたる兵三百餘人、同士打にこそ討たれけれ。敵陣騒ぎ亂れて、夜已に明けければ、一番菊池次郎、

○父が起請や云々
父が起請に背いた罪
を子に報いし故か。

件の起請の旗を進めて、千餘騎にてかけ入る。少貳が嫡子太宰新少貳忠資、五千餘騎にて戦ひけるが、父が起請や子に負ひけん、忠資忽ちに打負けて、引返し、戦ひけるが、敵に組まれて討たれにけり。これを見て朝井但馬將監胤信、筑後新左衛門、窪能登守、肥前刑部大輔、百餘騎にて取つて返し、近づく敵に引組み、刺し違へて死にければ、菊池孫次郎武明、同越後守、賀屋兵部大輔、見參岡三河守、庄美作守、宇都宮刑部丞、國分次郎以下宗徒の兵八十三人、一所にて皆討たれにけり。少貳が一陣の勢は、大將の新少貳討たれて引退きければ、菊池が前陣の兵、汗馬を伏せて控へたり。二番に菊池が甥肥前次郎武信、赤星掃部助武貫、千餘騎にて進めば、少貳が次男太宰越後守頼泰、竝に太宰出雲守、二萬餘騎にて相向ふ。初めは百騎づゝ出で合ひて戦ひけるが、後には敵御方二萬二千餘騎、颯と入り亂れ、此處に分れ彼處に合ひ、半時ばかり戦ひけるが、組んで落つれば下り重なり、切つて落せば首をとる。戦ひ未だ決せざる前に、少貳方には赤星掃部助武貫を討つて悦び、寄手は引きかへす。菊池が方には太宰越前守を生虜りて、勝鬨を上げてぞ悦びける。此の時宮方に、結城右馬頭、加藤大夫判官、合田筑前入道、熊谷豊後守、三栗屋十郎、太宰修理亮、松田丹後守、同出雲守、熊谷民部大輔以下、宗徒の兵三百餘人討死しければ、將軍方には、饗庭右衛門藏人、同左衛門大夫、山井三郎、相馬小太郎、木綿左近將監、西河兵庫助、草壁六郎以下、恐み切つたる兵ども七百餘人討たれにけり。三番

○結城右馬頭 親照
○加藤大夫判官 名
は宗高。

には、宮の御勢、新田の一族、菊池肥後守一手になつて、三千餘騎、敵の中を破つて、蜘蛛手十文字に懸け散らさんと喚いて蒐る。少貳、松浦、草壁、山賀、島津、澀谷の兵二萬餘騎、左右へ颯と分れて散々に射る。宮方の勢射立てられて引きける時、宮は三所まで深手を負はせ給ひければ日野左少辨、坊城三位、洞院權大納言、花山院四位少將、北山三位中將、北畠源中納言、春日大納言、土御門右少辨、高辻三位、葉室左衛門督に至るまで、宮を落し進らせんと踏み止まつて討たれ給ふ。これを見て新田の一族三十三人、其の勢千餘騎横合に懸りて、兩方の手先を追ひまくり、真中へ會釋もなく懸け入つて、引組んで落ち打違へて死に、命を限りに戦ひけるに、世良田大膳大夫、田中彈正大弼、岩松相摸守、桃井右京亮、堀口三郎、江田丹後守、山名播磨守、敵に組まれて討たれにけり。菊池肥後守武光、子息肥後二郎は、宮の御手を負はせ給ふのみならず、月卿雲客新田一族達若干討たる、を見て、「何の爲に惜しむべき命ぞや。日來の契約違はずば、我に伴ふ兵共、残らず討死せよ。」と勵まされて、真前に懸け入る。敵これを見知りたりければ、射て落さんと、鐵を揃へて雨の降る如く射けれども、菊池が著たる鎧は、此の合戦の爲に三人張の精兵に草摺を一枚づつ、射させて、通らぬさねを一枚まぜに拵へて緘したれば、如何なる強弓か射けれども裏かく矢一つもなかりけり。馬は射られて倒るれども乗手は創を被らねば、乗り替へては懸け入り、十七度まで懸けけるに、菊池兜を落されて、小鬘を二太刀切られ

○三人張の精兵 三人張の強弓を引く程の精兵。

○卯の刻より酉の下りまで 午前六時から午後六時過ぎまで

たり。すはや討たれぬと見えけるが、少貳新左衛門武藤と押雙へて組んで落ち、少貳が首を取つて鋒に貫き、兜を取つて打著て、敵の馬に乗り替へ、敵の中へ破つて入り、今日の卯の刻より酉の下りまで一息をも繼がず相戦ひけるに、新少貳を始めとして一族二十二人、悉み切つたる郎従四百餘人、其の外の軍勢三千二百二十六人まで討たれにければ、少貳今は叶はじとや思ひけん、太宰府へ引退きて、寶萬嶽に引上る。菊池も勝軍はしたれども、討死したる人を數ふれば、千八百餘人と註したりける。續いて敵にも懸らず、且く手負を助けてこそ又合戦を致さめとて、肥後國へ引きかへす。其後は、敵も御方も皆已が領知の國に楯籠りて、中々軍もなかりけり。

新田左兵衛佐義興自害の事

去る程に尊氏卿逝去あつて後、筑紫は斯様に亂れぬと雖も、東國は未だ靜かなり。爰に故新田左中將義貞の子息左兵衛佐義興、其の弟武藏少將義宗、故脇屋刑部卿義助の子息右衛門佐義治三人、この三四年が間越後國に城郭を構へ半國許りを打徒へて居たりけるを、武藏上野の者共の中より、貳心なき由の連署の起請を書いて、「兩三人の御中に一人東國へ御越し候へ。大將にし奉つて義兵を揚げ候はん。」とぞ申したりける。義宗義治二人は思慮深き人なりければ、此の比の人の心左右なく憑み難しとて許容せられず。義興は大早りに

○左右なく 無造作に。

○張本の輩 内通した首謀者達。

○竹澤右京亮 良衡

○左馬頭 足利基氏

して、忠功人に先立たん事をいつも心に懸けて思はれければ、是非の遠慮を廻らさる、までもなく、僅かに郎従百餘人を行きつれたる旅人の様に見せて、竊に武藏國へぞ越えられける。元來張本の輩は申すに及ばず、古新田義貞に忠功ありし族、今畠山入道道誓に恨みを含む兵、竊に音信を通じ、頻りに媚を入れて催促に随ふべき由を申す者多かりければ、義興今は身を寄する所多くなつて、上野武藏兩國の間に其の勢ひ漸く萌せり。天に耳なしと雖もこれを聞くに人を以てする事なれば、互に隠密しけれども、兄は弟に語り子は親に知らせける間、此の事程なく鎌倉の管領足利左馬頭基氏朝臣、畠山入道道誓に聞えてけり。畠山大夫入道これを聞きしより敢て寢食を安くせず、在所を尋ね聞きて大勢を差遣はせば、國內通計して行方を知らず。又五百騎三百騎の勢を以て、道に待つて夜討に寄せて討たんとすれば、義興さらに事ともせず、蹴散らしては道を通り打破つては圍みを出で、千變萬化總て人の業にあらずと申しける間、今はすべき様なしとて、手に餘りてぞ覺えける。さても此の事如何すべきと、畠山入道道誓晝夜案じ居たりけるが、或夜潛に竹澤右京亮を近づけて、「御邊は先年武藏野の合戦の時、彼の義興の手に屬して忠ありしかば、義興も定めて其の舊好を忘れじとぞ思はるらん。されば此の人を僞つて討たんずる事は、御邊に過ぎたる人あるべからず。如何なる謀をも運らして、義興を討つて左馬頭殿の見参に入れ給へ。恩賞は宜しく請ふによるべし。」とぞ語られける。竹澤は元來欲心熾盛にし

○曾て一議をも申さず 少しの異議をも申さず。
○御制法候はんずる事 御禁制となつてゐること。
○勘氣 勘當。

○事々し 仰山だ。
○身一つは過ぎぬか 身一つの生計が出来ぬか。
○新田兵衛佐 義興
○故新田殿 義貞。
○力なく 仕方なく

て、人の嘲りをも顧みず古の好をも思はず情なき者なりければ、曾て一議をも申さず。一さ候はば、兵衛佐殿の疑ひを散じて相近づき候はん爲に、某態と御制法候はんずる事を背いて御勘氣を蒙り、御内を罷り出でたる體にて本國へ罷り下つて後、此の人に取寄り候べし。と、能く／＼相謀つて己が宿所へぞ歸りける。かねて謀りつる事なれば、竹澤翌日より、宿々の傾城共を數十人呼び寄せて、遊び戯れ舞ひ歌ふ。これのみならず、相伴ふ傍輩共二三十人招き集めて、博奕を晝夜十餘日までぞしたりける。或人これを畠山に告げ知らせたりければ、畠山大きに偽り忿りて、「制法を破る罪科一にあらず、凡そ道理を破る法はあれども法を破る道理なし。況んや有道の法をや。一人の科を誡むるは萬人を助けん爲なり。此の時緩々の沙汰致さば、向後の狼藉斷ゆべからず。」とて、則ち竹澤が所帯を没收して其の身を追ひ出されけり。竹澤一言の陳謝にも及ばず、「あな事々し、左馬頭殿に仕はれぬ侍は身一つは過ぎぬか。」と、飽くまで廣言吐き散らして、己が所領へぞ歸りにける。かくて數日あつて竹澤潛に新田兵衛佐殿へ人を奉つて申しけるは、「親にて候ひし入道、故新田殿の御手に屬し、元弘の鎌倉合戦に忠を抽んで候ひき。某又先年武藏野の御合戦の時、御方に参つて忠戦致し候ひし條、定めて思召し忘れ候はじ。其の後世はの轉變度々に及んで、御座所をも更に存知仕らで候ひつる間、力なく暫くの命を助かりて御代を待ち候はん爲に、畠山禪門に屬して候ひつるが、心中の趣氣色に顯はれ候ひけるに依つて、さ

- 兎角　こやかく。
- ひた、けたる式にて　心みだれた體で
- 其の方様の草のゆかりまで　敵方に關係ある末々の者まで
- 褒嶺云々　史記本紀に見える故事。
- 王妃　楊貴妃。
- 引き進らす　引出物として贈った。

したる罪科とも覺えぬ事に一所懸命の地を沒收せらる。結句討つべしななどの沙汰に及び候ひし間、則ち武藏の御陣を逃げ出でて、當時は深山幽谷に隠れ居たる體にて候。某が此の間の不義をだに御免しあるべきにて候はば、御内奉公の身と罷り成り候て、自然の御大事には御命に代り進らせ候べし。」と、念比にぞ申し入れたりける。兵衛佐これを聞きたまひて、暫くは申す所誠しからずとて見參をもし給はずして、密議などを知らせらる、事もなかりければ、竹澤尙も心中の偽らざる處を顯はして近づき奉らん爲、京都へ人を上せ、ある宮の御所より少將殿と申しける上藤女房の、年十六七許りなる容色類なく、心様優にやさしく坐しけるを、兎角申し下して、先づ己が養君にし奉り、御装束女房達に至るまで、様々に立立てて潛に兵衛佐殿の方へぞ出したりける。義興元來好色の心深かりければ、類なく思ひ通はして一夜の程の隔ても千年を経る心地に覺えければ、常に隠家を替へんともし給はず、少しひた、けたる式にて、其の方様の草のゆかりまでも、心置くべき事とは露許りも思ひ給はず。誠に褒嶺一たび笑んで幽王國を傾け、王妃傍に媚びて女宗世を失ひ給ひしも、かくやと思ひ知られたり。されば太公望が、利を好む者には財珍を與へてこれを迷はし、色を好む者には美女を與へてこれを惑はすと、敵を謀る道を教へしを知らざりけるこそ愚かなれ。かくて竹澤奉公の志切なる由を申しけるに、兵衛佐早心打解けて見參し給ふ。聽て鞍置きたる馬三匹、唯今緘し立てたる鎧三領、召替の爲とて引

○佐殿　兵衛佐義興

- 白拍子　遊女。
- 遊びありぬ　遊びありぬべしの意。
- 御事　貴方。
- 夢説　夢の吉凶を判じ説く者。
- 井彈正　直秀。

き進らす。これのみならず、越後より付き纏ひ奉つて此處彼處に隠れ居たる兵共、皆一獻を進め、馬、物具、衣裳、太刀、刀に至るまで、用々に随つて漏らさずこれを引きける間、兵衛佐殿も竹澤を他に異なる思ひを成され、傍輩共も皆これに過ぎたる御要人あるべからずと悦ばぬ者はなかりけり。斯様に朝夕宮仕の勞を積み晝夜無二の志を顯はして、半年許りになりければ、佐殿今は何事につけても心を置き給はず、謀叛の計畧、與力の人數、一事も残らず、心底を盡して知らされけるこそ淺ましけれ。九月十三夜は暮天雲晴れて月も名に負ふ夜を顯はしぬと見えければ、今夜明月の會に事を寄せて佐殿を我が館へ入れ奉り、酒宴の砌にて討ち奉らんと議して、無二の一族若黨三百餘人催し集め、我が館の傍にぞ籠め置きける。日暮れければ竹澤急ぎ佐殿に參つて、「今夜は明月の夜にて候へば、恐れながら私の茅屋へ御入り候て、草深き庭の月をも御覽候へかし。御内の人々をも慰め申し候はんために、白拍子共少々召し寄せて候。」と申しければ、「興ある遊びありぬ。」と面々に皆悦んで、聽て馬に鞍置かせ、郎從共召し集めて、己に打出でんとし給ひける處に、少將の御局よりとて佐殿へ御消息あり。披きて見給へば、「過ぎし夜に御事を悪しき様なる夢に見進らせて候ひつるを、夢説に問ひて候へば、重き御慎みにて候。七日が間は門の内を御出であるべからずと申し候なり。御心得候べし。」とぞ申されたりける。佐殿これを見給ひて、執事井彈正を近づけて、「如何あるべき。」と問ひ給へば、井彈正、「凶を聞きて

○秋の霜 刀。

○打漏らしぬ 打漏らしぬべしの意。

○江戸遠江守 兼寛
○下野守 名は能登

慎ますといふ事や候べき。唯今夜の御遊びをば止めらるべしとこそ存じ候へ。」とぞ申しける。佐殿實にもと思ひ給ひければ、俄に風氣の心地ありとて、竹澤をぞ歸されける。竹澤は今夜の企て案に相違して、安からず思ひけるが、「抑佐殿の少將の御局の文を御覽じて止まり給ひつるは、如何様我が企てを内々推して告げ申されたるものなり。此の女性を生けて置きては叶ふまじ。」とて、翌夜潛に少將の局を門へ呼び出し奉りて、刺し殺して堀の中にぞ沈めける。痛ましいかな、都をば打續きたる世の亂れに、荒れのみ勝る宮の中に、年経て住みし人々も、秋の木の葉の散りふくに、己が様々になりしかば、憑む影なくなりて、身を萍の寄るべとは、此の竹澤をこそ憑み給ひしに、何故と思ひわけたる方もなく、見てだに消えぬべき秋の霜の下に伏して、深き淵に沈められ給ひける今のは尙討様を、思ひ遣るだに哀れにて、外の袖さへ萎れにけり。其の後より竹澤我が力にては尙討ち得じと思ひければ、畠山殿の方へ使を立てて、「兵衛佐殿の隠れ居られて候所をば委細に存知仕つて候へども、小勢にては打漏らしぬと覺え候。急ぎ一族にて候江戸遠江守と下野守とを下され候へ。彼等によく評定して討ち奉り候はん。」とぞ申しける。畠山大夫入道大きに悦んで、聽て江戸遠江守と其の甥下野守とを下されけるが、討手を下す由兵衛佐傳へ聞かば、在所を替へて隠る、事もありとて、江戸伯父甥が所領、稻毛莊十二郷を闕所になして則ち給人をぞつけられける。江戸伯父甥大きに偽り忿つて、聽て稻毛莊へ馳せ下

○故なく 理由なく

○矢口渡 武藏國矢口村。
○のみ 椋。
○混物具 全軍残らず物具を著けたこと。
○究竟の 極くすぐれた。

り、給人を追ひ出し城郭を構へ、一族以下の兵五百餘騎招き集めて、「唯畠山殿に向ひ一矢射て討死せん。」とぞ誓りける。程経て後、江戸遠江守、竹澤右京亮を縁に取つて兵衛佐に申しけるは、「畠山殿故なく懸命の地を没收せられ、伯父甥共に牢浪の身と罷りなる間、力及ばず一族共を引率して、鎌倉殿の御陣に馳せ向ひ、畠山殿に向つて一矢射んずるにて候。但し然るべき大將を仰ぎ奉らでは、勢の附くことあるまじきにて候へば、佐殿を大將に憑み奉らんずるにて候。先づ忍びて鎌倉へ御越し候へ。鎌倉中に當家の一族いかなりとも二三千騎あるべく候。其の勢をつけて相摸國を打従へ、東八箇國を推して天下を覆す謀を運らし候はん。」と、誠に容易けにぞ申したりける。さしも志深き竹澤が執し申すなれば、疑ふ所にあらずと憑まれて、則ち武藏、上野、常陸、下總の間に、内々與力しつる兵どもに、事のよしを相觸れて、十月十日の曉に兵衛佐殿は忍びて先づ鎌倉へとぞ急がれける。江戸、竹澤はかねて支度したる事なれば、矢口渡の船の底を二所舐り貫いて、のみをさし、渡の向うには背より江戸遠江守、同下野守、混物具にて三百餘騎、木の陰岩の下に隠れて、餘る所あらば討ち止めんと用意したり。跡には竹澤右京亮、究竟の射手百五十人勝つて、取つて歸されば遠矢に射殺さんと巧みたり。大勢にて御通り候はば人の見尤め奉る事も候へ。」とて、兵衛佐の郎従共をば、かねて皆抜けくくに鎌倉へ遣はしたり。世良田右馬助、井彈正忠、大島周防守、土肥三郎左衛門、市河五郎、由良兵庫助、

○三毒 貪、瞋、癡。

○岸の額なる云々 和漢朗詠集に「觀身岸額離根草、論命江頭不繫舟。」岸額は岸角。

○黑白二つの月の鼠 云々、命を草の根とし日月を黑白の鼠として世のはかないのを喩ふ。

○欺いて 嘲つて。

○かうづか 髪束。

同新左衛門尉、南瀬口六郎僅かに十三人を打連れて、更に他人をば雜へず、のみをさしたる船に込み乗つて、矢口渡に押出す。これを三途の大河とは、思ひ寄らぬぞあはれなる。情、これを譬ふれば、無常の虎に追はれて煩惱の大河を渡れば、三毒の大蛇浮かび出でてこれを呑まんと舌を伸べ、其の残害を遁れんと岸の額なる草の根に命を係けて取附きたれば、黑白二つの月の鼠が其の草の根をかぶるなる、無常の喩へに異ならず。此の矢口渡と申すは、面四町に餘りて浪嶮しく底深し。渡守已に櫓を押して河の半ばを渡るとき、取外したる由にて、櫓を河に落し入れ、二つののみを同時に抜いて、二人の水手同じ様に河にかばくと飛び入つて、うぶに入つてぞ逃げ去りける。これを見て、向うの岸より兵四五百騎懸け出でて関をどつと作れば、跡より関を合はせて「愚かなる人々かな。詐るとは知らぬか。あれを見よ。」と欺いて、箆を叩いてぞ笑ひける。去る程に水船に涌き入つて腰中許りになりける時、井彈正、兵衛佐殿を抱き奉りて、中に差揚げたれば、佐殿「安からぬものかな。日本一の不道人どもに詐られつることよ。七生まで汝等が爲に恨みを報ずべきものを」と大きに忿つて腰の刀を抜き、左の脇より右のあばら骨まで掻き廻し、二刀まで切り給ふ。井彈正、腸を引切つて河中へがばと投げ入れ、己が喉笛二所刺し切つて、自らかうづかを掴み、己が首を後へ折りつくる音、二町ばかりぞ聞えける。世良田右馬助と大島周防守とは、二人刀を柄口まで突き違へて、引組んで河へ飛び入る。由良兵庫

○水練 水泳の達者

○小俣少輔次郎 名は義弘。

○先帝 後醍醐帝。
○召されける 名付けられた。

助、同新左衛門は船の艦軸に立ちあがり、刀を逆手に取直して、互に己が首を掻き落す。土肥三郎左衛門、南瀬口六郎、市河五郎三人は、各袴の腰引きちぎりて裸になり、太刀を口にくはへ、河中に飛び入りけるが、水の庭を潛りて向うの岸へかけ上り、敵三百騎の中へ走り入り、半時ばかり切り合ひけるが、敵五人討ち取り十三人に手負はせて、同じ枕に討たれにけり。其の後水練を入れて、兵衛佐殿竝に自害討死の首十三求め出し、酒に浸して、江戸遠江守、同下野守、竹澤右京亮五百餘騎にて、左馬頭殿の坐す武藏の入間河の陣へ馳せまゐる。畠山入道斜ならず悦んで、小俣少輔次郎、松田、河村を呼び出してこれを見せらるゝに、「仔細なき兵衛佐殿にて坐し候ひけり。」とて、此の三四年が先に、數日相馴れ奉りし事ども申し出でて皆涙をぞ流しける。見る人悦びの中に哀れを添へて、共に袖をぞぬらしける。此の義興と申すは、故新田左中將義貞の妾の腹に出で來たりしかば、兄越後守義顯が討たれし後も、親父猶これを嫡子には立てず、三男武藏守義宗を六歳の時より昇殿せさせて時めきしかば、義興はあるにもあらず、孤にて上野國に居たりしを、奥州國司顯家卿、陸奥國より鎌倉へ攻め上る時、義貞に志ある武藏上野の兵共、此の義興を大將に取立てて、三萬餘騎にて奥州國司に力を合はせ、鎌倉を攻め落して吉野へ参じたりしかば、先帝叡覽あつて、「誠に武勇の器用たり。尤も義貞が家をも興すべき者なり。」とて、童名徳壽丸と申ししを、御前にて元服させられて、新田左兵衛佐義興とぞ召さ

○唯二三人一本此の二三年とあり。

○鎌倉の左馬頭足利基氏。

○京都の宰相中將足利義詮。

○たびて賜ひて。

れける。器量人にすぐれ謀巧みに心飽くまで早かりしかば、正平七年の武藏野の合戦、鎌倉の軍にも大敵を破り、萬卒に當る事、古今未だ聞かざる處多し。其の後身を側め、唯二三人武藏上野の間に隠れ行き給ひし時、宇都宮の清黨が、三百餘騎にて取籠めたりしも討ち得ず。其の振舞恰も天を翔り地を潛る術ありと、怪しき程の勇者なりしかば、鎌倉の左馬頭殿も、京都の宰相中將殿も、安き心地をばせざりつるに、運命窮まりて短才庸愚の者共に詐られ、水に溺れて討たれ給ふ。斯かりし程に江戸、竹澤が忠功拔羣なりとて、則ち數箇所の恩賞をぞ行はれける、「あはれ弓矢の面目かな。」とこれを羨む人もあり、又一瀆き男の振舞かな。」と爪弾をする人もあり。竹澤をば、猶も謀叛與黨の者どもを委細に尋ねらるべしとて、御陣に留め置かれ、江戸二人には暇たびて恩賞の地へぞ下されける。江戸遠江守喜悅の眉を開きて、則ち拜領の地へ下向しける。十月二十三日の暮程に、矢口渡に下り居て渡の船を待ち居たるに、兵衛佐殿を渡し奉りし時、江戸が語らひを得て、のみを抜いて船を沈めたりし渡守が、江戸が恩賞賜ひて下ると聞きて、種々の酒肴を用意して、迎ひの船をぞ漕ぎ出しける。此の船已に河の中を過ぎける時、俄に天掻き曇りて、雷鳴り水嵐烈しく吹き漲りて、白波船を漂はす、渡守周章て騒いで、漕ぎ戻さんと櫓を押して船を直しけるが、逆巻く浪に打返されて、水手梶取一人も残らず、皆水底に沈みけり。天の怒り直事に非ず、これは如何様義興の怨靈なりと、江戸遠江守懼ぢをの、きて、河端よ

○馬をあをりける馬を驅りたてた。

○弓手のものになし左手に見て。

○わたり直徑。

○かひがね 肩脚骨

○月を隔てず 一月さたさず。

○其妻 家業。

り引返し、餘の處をこそ渡さめとて、これより二十餘町ある上の瀬へ馬を早めて打ちける程に、電行く前に閃きて、雷大きに鳴り霆めく、在家は遠し日は暮れぬ。唯今雷神に蹴殺されぬと思ひければ、「御助け候へ兵衛佐」と、手を合はせ虚空を拜して逃げたりけるが、とある山の麓なる辻堂を目にかけて、あれまでと馬をあをりける處に、黒雲一村江戸が頭の上に落ちさがりて、雷電耳の邊に鳴り閃きける間、餘りの怖ろしさに後を屹と顧みたれば、新田左兵衛佐義興、火絨の鎧に龍頭の五枚兜の緒をしめて、白栗毛なる馬の額に角の生ひたるに乗り、あひの鞭をしとと打つて、江戸を弓手のものになし、鎧の鼻に落ちさがりて、わたり七寸許りなる鷹俣を以て、かひがねより乳の下へ、かけずふつと射通さる、と思ひて、江戸馬より倒に落ちたりけるが、臆て血を吐き悶絶躓地しけるを、輿に乗せて江戸が門へ昇きつけたれば、七日が間足手を跪き、水に溺れたる真似をして、「あら堪へがたやこれ助けよ。」と、叫び死に死ににけり。有爲無常の世の習ひ、明日を知らぬ命の中に、僅かの欲に耽り情なき事どもを巧み出し振舞ひし事、月を隔てず因果歴然乍ちに身に著きぬる事、これ又未來永劫の業障なり。其の家に生れて箕裘を繼ぎ弓箭を取るは、世俗の法なれば力なし。努々人はかやうの思ひの外なる事を好み振舞ふ事あるべからず。又翌夜の夢に、畠山大夫入道殿の見給ひけるは、黒雲の上に太鼓を打つて鬨を作る聲しける間、何者の寄せ來るやらんと怪しくて、音する方を遙かに見遣りたるに、新田左兵衛佐

○牛頭馬頭阿放羅刹
何れも驅鬼。
○禪門 佛門に入つ
た男子。畠山大夫入
道を指す。

○常磐堅磐の祭禮
永久不變の祭事。

義興、長二丈ばかりなる鬼になつて、牛頭馬頭阿放羅刹共十餘人前後に隨へ、火車を引き
て左馬頭殿の坐する陣中へ入ると覺えて、胸打騒いで夢覺めぬ。禪門夙に起きて、斯かる
不思議の夢をこそ見て候へ。と、語り給ひける言の未だ終てざるに、俄に雷火落ち懸り、
入間河の在家三百餘宇、堂舎佛閣數十箇所、一時に灰燼となりにけり。これのみならず義
興討たれし矢口渡に、夜なく、光物出で来て往來の人を惱ましける間、近隣の野人村老集
まつて、義興の亡靈を一社の神に崇めつ、新田大明神とて、常磐堅磐の祭禮、今に絶え
ずとぞ承る。不思議なりし事どもなり。

卷第三十四

宰相中將殿に將軍の宣旨を賜はる事

○あらまほしき天
晴々しくありたい天
○樹を移して云々
移植してまだ十分根
のつかないのに花の
開くのを待つ意。

鎌倉贈左大臣尊氏公薨じたまひし刻、世の危き事、深淵に臨んで薄氷を踏むがごとくに
して、天下今に反覆しぬと見えける處に、これぞ武家の棟梁ともなりぬべき器用と見えし
新田左兵衛佐義興は、武藏國にて討たれぬ。去年まで筑紫九國を打從へたりし菊池肥後守
武光も、少貳大伴が翻つて敵になりし後は勢ひ少なくなりぬと聞えしかば、官方の人々は
月を望むには、曉の雲に逢へるが如く、あらまほしき天に悲しみあつて、意に叶はぬ世の
うさを歎きければ、將軍方の武士共は、樹を移して春の花を看るが如く、危き中にも待つ
事多くして、今は何事かあるべきと悦ばぬ人もなかりけり。去る程に延文三年十二月十八
日、宰相中將義詮朝臣、二十九歳にて征夷將軍になり給ふ。日野左中辨時光を救使にて
宣旨を下されければ、佐々木太郎判官秀詮を以て宣旨を請取り奉る。天下の武功に於ては
申すに及ばずと雖も、相續して二代忽ちに將軍の位に備はり給ふ、めでたかりし世の例な
り。抑も此の比將軍家に於て、我に増したる忠の者あらじと、臂を振ふ輩多き中に、
秀詮宣旨を請取り奉り面目身に餘る。その故を聞けば、祖父佐渡判官入道道譽、去んぬる

○知り 治め。

○高倉禪門 直義。

○秀綱 道譽の嫡男

○新田掃部助 貞祐
堀口貞満の子。

○三浦荒二郎 義澄
義明の子。

○左馬頭 足利基氏

○故左大臣 尊氏。

○連枝 兄弟

元弘の始め、相摸入道が振舞悪逆無道にして武運已に傾くべき時、到りぬとや見たりけん。平家を討ちて代を知り給へと頻りに將軍を勧め申ししが、果して六波羅尊氏卿の爲に亡びにき。然れども四海尚亂れて二十餘年、其の間に名を高くせし武士共、官方に參つては又將軍方に降り、高倉禪門に屬するかと見れば、右兵衛佐直冬に與力し、身を偏に決せず、道譽將軍方にして、親類大畧討死す。中にも秀詮が父、源三判官秀綱、去んぬる文和二年六月に山名伊豆守が謀叛に依つて、主上帝都を去らせ坐して、越路の雲に迷はせ給ふ。爰に新田掃部助、山名が謀叛に節を得て、堅田浦にて君を襲ひ奉りし時、秀綱返し合はせ命を輕んず。其の間に主上延びさせ坐す事、偏に秀綱が武功に依つてなり。其の忠他に異なりとて、秀詮を選び出されけるにこそ。これは建久の古、鎌倉右兵衛佐頼朝朝臣、武將に備はり給ひし時、鶴岡八幡宮にて、三浦荒二郎宣旨を請取り奉りし例とぞ見えし。

畠山道誓上洛の事

思ひの外に世の中靜かなるにつけても、兩雄は必ず争ふといふ習ひなれば、鎌倉の左馬頭殿と宰相中將殿との御中、何様不和なる事出で來ぬと、人皆危み思へり。これを聞きて畠山大夫入道道誓、左馬頭殿に向つて申されけるは、「故左大臣殿の御薨逝の後天下の人皆連枝の御中に、始終如何様御不快の御事候ひぬと、怪しみ思ひて候なる。昔漢の高祖崩御

○已を克め云々 論語顏淵篇に「克己復禮爲仁一日克己復禮天下歸仁焉爲仁由己而由人乎哉。」
○延文四年 南朝の正平十四年。

なつて後、呂氏と劉氏と互に心を置き合つて、世の中又亂れんとしけるを、高祖の舊臣、周勃樊噲等、兵を集め勢を并せて、世を治めたりとこそ承り及び候へ。道誓誠に不肖の身に候へども、且く大將の號を御免あるべきにて候はば、東國の勢を引率して、京都へ罷り上りて南方へ發向し、和田楠を攻め落し天下を一時に定めて、宰相中將殿の御疑ひをも散じ候はばや。」と申されければ、左馬頭、「此の議誠に然るべし。早く東八箇國の勢を催して、南方の敵陣へ發向すべし。」とぞ宣ひける。畠山入道は、元來上に公儀を借つて、下に私の權威を食らんと思へる心ありければ、先づ大名共の許に行き向ひ、未だ功あらずして忠賞の厚からんことを約し、未だ親しまざるに交はりの久しからん事を語り、一日も己を克め禮に復する時は天下の人民仁に歸する習ひなれば、東八箇國の大名小名一人も残らず、皆催促にぞ從ひける。此の上は暫くも猶豫あるべからずとて、延文四年十月八日畠山入道道誓、武藏の入間河を立つて上洛するに、相從ふ人々には、まづ舍弟畠山尾張守其弟式部大輔、外様には、武田刑部大輔、舍弟信濃守、逸見美濃入道、舍弟刑部少輔、同掃部助、武田左京亮、佐竹刑部大輔、河越彈正少弼、豊島因幡入道、土屋修理亮、白鹽入道、土屋備前入道、長井治部少輔入道、結城入道、難波掃部助、小田讚岐守、小山一族十三人、宇都宮芳賀兵衛入道禪可、子息伊賀守、高根澤備中守、同一族十一人、これ等を宗徒の大名として、坂東の八平氏、武藏の七黨、紀清兩黨、伊豆、駿河、三河、遠江の勢馳

○同じ毛 同じい穢し毛。

○孟嘗君が三千云々 春申君の故事である。史記列傳に「趙平原君使_二人於春申君_一春申君舍_三之於上舍_一趙使欲_レ誇_レ楚爲_二璠璫_一刀劍室以_二珠玉_一飾_レ之_二請_二命春申君_一客_二春申客三千餘人_一其上客皆_二騶_一珠履_一以_レ見_二趙使_一趙使大慙_一」

和田、楠軍評定の事附諸卿分散の事

この比吉野の新帝は、河内の天野といふ處を皇居にて御座ありければ、楠左馬頭正儀、和田和泉守正武二人、天野殿に參じて奏聞しけるは、「畠山入道誓東八箇國の勢を牽して二十萬騎、已に京都に著きて候なる。山陽道は播磨を限り、山陰道は丹波を境ひ、東海、

○決定 必ず。

○天の時云々 孟子に「天時不如_二地利_一、地利不如_二人和_一」

○あさまなる 奥ゆかしくない。

東山、南海、北陸道の兵、數を盡して上洛仕り候なれば、敵の勢は定めて雲霞の如くにぞ候らん。但し合戦に於ては、決定御方の勝とこそ料簡仕つて候へ。其の故は、軍に三つの謀候べし。所謂天の時、地の利、人の和にて候。此の内一つも違ふ時は、勢ひありといふとも、勝つ事を得ずとこそ見えて候へ。まづ天の時に附いて勘へ候へば、今年よりは、大將軍西に在つて東よりは三年塞りたり。畠山冬至以前、東國を立てつて罷り上つて候。これ已に天の時に違ひ候はずや。次に地の利について案じ候に、御方の陣、後は深山に連なつて敵案内を知らず、前に大河流れて僅かなる橋一つを路とせり。さ候へば、元弘の千劔破の軍は中々申すに及ばず。其の後建武の亂れより以來、細川帶刀、同陸奥守顯氏、山名伊豆守時氏、高武藏守師直、同越後守師泰、今の畠山入道道誓に至るまで、已に六箇度此の處へ寄せて、猛勢を振ひ戦ひを挑みしに、敵の軍遂に利あらず。或は屍を河南の路に曝し或は名を敗北の陣に失ひ候ひき。これ當山形勝の地、要害の便りを得たる故にて候。次には人の和について思案を廻らし候に、今度畠山が上洛は、唯勢ひを公義に借つて忠賞を私に貪らんと志すにて候なる。仁木細川の一族共も彼が權威を猜み、土岐佐々木が一類も其の忠賞を嫉まぬことや候べき。これ又人の心の和せぬ處にて候はずや。天地人の三徳三つながら違ひ候はば、縦令敵百萬の勢を并せて候とも、恐るゝに足らぬ所にて候。但し、今の皇居は餘りにあさまなる處にて候へば、金剛山の奥、觀心寺と申し候處へ、御座を移

○龍門山 紀伊國勝神村。

○野伏 統率者なく野山にこもり居る兵

○そまろに 徒らに

○護持僧 その人の守護と加持を勤める僧。

○諸苦所因貪欲爲本法華經第二卷の語

しまるらせ候て、正儀正武等は和泉河内の勢を相伴ひ、千劔破金剛山に引籠り、龍山石川の邊に懸け出で、日々夜々に相戦ひ、湯淺、山本、恩地、贄河、野上、山本の兵どもは、紀伊國守護代、鹽治中務について、龍門山最初峯に陣を張らせ、紀伊川禿邊に野伏を出して、開き合はせ攻め合はせ、息をも繼がせず戦はしめば、極めて短氣なる坂東勢共などか退屈せで候べき。退屈して引返す者ならば、勝つに乗つて追つ懸け、敵を千里の外に追ひ散らし、御運を一時に開くべし。これ庶幾する處の合戦なり。」と、事もなげにぞ申しける。主上を始め進らせて近侍の月卿雲客に至るまで、皆憑もしき事にぞ思召しける。さらば懸て觀心寺へ皇居を移し進らすべしとて臨幸なるに、無用ならん人々を、そまろに召し具させ給ふべからずと申しける間、實にもとて傳奏の上卿兩二人、奉行の職事一兩輩、護持僧二人、衛府官四五人許りを召し具せられ、此の外は何地へも暫く落ち忍びて、御敵退散の時を待つべしと仰せ出されければ、攝政關白、太政大臣、左右の大將、大中納言、七辨、八史、五位、六位、後宮の美婦人、青上達部、内侍、更衣、上臈女房、出世坊官に至るまで、或は高野、粉川、天河、吉野、十津河の方に落ち行きて、あさましけなる山賤共に、憂き身を寄する人もあり、或は志賀の古京、奈良の都、京白河に立歸り、敵陣の中に紛れ居て、魂を消す人もあり。諸苦所因貪欲爲本と、如來の金言、今更に思ひ知るこそあはれなれ。

新將軍南方進發の事附軍勢狼藉の事

- 尾張左衛門佐 氏頼。
- 今川上總介 範氏
- 左馬助 氏家。
- 善忠 俗名は頼康
- 美濃入道 俗名は頼忠、法名は眞義。
- 出羽入道 俗名は頼雄、法名は祐禪。
- 宮内少輔 直氏。
- 蜂屋近江守 貞秀
- 今峯駿河守 光政
- 舟木兵庫助 頼尚
- 戸山遠江守 光明
- 赤松筑前入道世貞 俗名は貞範。圓心の子。
- 辰の刻 午前八時

去る程に足利新征夷大將軍義詮朝臣、延文四年十二月二十三日都を立つて、南方の大手へ向ひ給ふ。相従ふ人々にはまづ一族細川相摸の守清氏、舍弟左近大夫將監、同兵部大輔、同掃部助、同兵部少輔、尾張左衛門佐、仁木右京大夫、舍弟彈正少弼、同右馬助、一色左京大夫、今川上總介、子息左馬助、舍弟伊豫守、他家には、土岐大膳大夫入道善忠、舍弟美濃入道、同出羽入道、同宮内少輔、同小宇津美濃守、同高山伊賀守、同小里兵庫助、同猿子右京亮、厚東駿河守、同蜂屋近江守、同左馬助義行、同今峯駿河守、同舟木兵庫助、同明智下野入道、同戸山遠江守、同修理亮頼行、同出羽守頼世、同刑部少輔頼近、同飛驒伊豆入道、佐々木判官信詮、佐々木六角判官入道崇永、舍弟山内判官、河野一族、赤松筑前入道世貞、舍弟帥律師則祐、甥大夫判官光範、舍弟信濃五郎直頼、同彦五郎範實、諏訪信濃守、禰津小次郎、長尾彈正左衛門、朝倉彈正、これ等を始めとして、都合其の勢七萬餘騎、大島、渡邊、尼崎、鳴尾、西宮に居餘つて、堂宮までも充滿ちたり。畠山大夫入道道誓は搦手の大將として、東八箇國の勢二十萬騎引率して、翌日の辰の刻に都を立つて、八幡の山下、眞木、葛葉に陣を取る。これは大手の勢渡邊橋を懸けんととき、敵もし川に支へて戦はば、左良階、伊駒の道を経て、敵を中に籠めんとなり。大手の寄手赤松判官光範

○もやひ 船と船とを繋ぎ合はせる事。
○かぶ木 上に渡し
た横木。

○鞍門 軍門。後世は専ら陣屋の事に云ふ。

○左右なく 無造作に。

は、攝津國の守護にて、敵陣半ばは我が領知を籠めたれば、人より先に渡邊の邊に、五百餘騎にて打寄せたり。河舟百餘艘取寄せて、河の面二町餘に引並べ、柱をのり立て、もやひを入れて、上にかぶ木を敷き並べたれば、人馬打並びて渡れども曾て危からず。和田楠爰に馳せ向ひて、手痛く一合戦せんずらんと、人皆思ひて控へたりけれども、如何なる深き謀かありけん、敢て河を支へんともせざりけり。さる間大手搦手三十萬騎、同じき日に河より南へ打越え、天王寺、安部野、住吉の遠里小野に陣を取る。されども猶大將宰相中將殿は河を越え給はず、尼崎に鞍門を堅くして坐すれば、赤松筑前入道世貞、同帥律師則祐は、大渡に打散つて、斥候の備へを全くし、仁木右京大夫義長は、三千餘騎を一所に集め、西宮に陣を取つて、先陣若し戦ひ負けば、新手になつて入り替り、天下の大功を我一人の高名に稱美せられんとぞ議せられける。南方の兵の軍立、始めは坂東の大勢の程を聞きて、一城に籠つて戦はば、取巻かれて遂に攻め落されずといふ事あるべからず。唯深山幽谷に走り散つて敵に在所を知られず、前にあるかとせば後へ抜け、馬に乗るかと思はば野伏になつて、在々所々に戦はん、敵頻りに懸らば難所に引懸けて返し合はせ、引きつて歸らば跡について追つかけ、野軍に敵を疲らかして、雌雄を勞兵の弊えに決すべし。」と議したりけるが、東國勢の體思ふにも似ず、左右なく敵陣へ懸け入らんとせす、此處に日を経彼處に時をぞ送りける。さらば此方も陣を前に取り、城を後に構へて合戦を致せと

○平石城 河内國白木村。
○八尾城 河内國八尾村。

て、和田楠は、俄に赤坂城を拵へて、三百餘騎にて楯籠る。福塚、川邊、左良階、當木、岩郡、橋本判官以下の兵は、平石城を構へて、五百餘騎にて楯籠る。眞木野、酒邊、古折、野原、宇野、崎山、佐和、秋山以下の兵は、八尾城を取繕ひて、八百餘騎にて楯籠る。此の外大和、河内、宇多、宇智郡の兵千餘人をば、龍泉峯に塀を塗り、櫓を掻かせ、見せ勢になしてぞ置きたりける。去る程に寄手は同じき二月十三日、後陣の勢三萬餘騎を、住吉、天王寺に入れ替へさせて、後を心安く踏まへさせ、先陣の勢二十萬騎は、金剛山の乾に當りたる津々山に打上りて陣を取る。敵御方そのあはひ僅かに五十餘町を隔てたり。互に時を待つて未だ戦はざる處に、丹下、俣野、譽田、酒匂、水速、湯淺太郎、貴志の一族五百餘騎、弓を弛し兜を脱いで、降人になつて出でたりければ、津々山の人々皆勇み寄りて、さればこそ敵はや弱りにけり。和田楠幾程か怵ふべきと、思はぬ人もなかりけり。されども未だ騎馬の兵懸け合つて、勝負をする程の事はなし。唯兩陣互に野伏を出で合はせて、矢軍する事隙なし。元來敵は物馴れて、御方は案内を知らねば、毎度合戦に寄手の手負ひ討たる、事數を知らず。斯くては唯和田楠が、かねて謀る案内に落されたる事よといひながら、止む事を得ざりける。去る程に始めの程こそ禁制をも用ひけれ。兵次第に疲れければ、神社佛閣に亂れ入りて戸帳を下し神寶を奪ひ合ひ、狼藉手に餘つて制止に拘らず、獅子駒犬を打破つて薪とし、佛像經卷を賣りて魚鳥を買ふ。前代未聞

○戸帳 帳臺の入口に垂れた帳。

○鐘子 湯わかし。

○前車の轍云々 説苑の善説篇「公乘不仁曰、周書曰、前車覆、後車戒、蓋言其危。」

○鹽谷伊勢守 異本「伊賀守」又は「中務」に作る。

の悪行なり。先年高越後守師泰が、石川河原に陣を取つて、楠を攻めて居たりし時、無惡不造の兵共が塔の九輪を下して、鐘子に鑄たりし事こそ希代の罪業かなと聞きしに、これは猶それに百倍せり。淺ましといふも疎かなり。不善を顯明の中に爲す者は、人得てこれを誅し、不善を幽暗の中に爲す者は、鬼得てこれを討つ。といへり。師泰已にこれを以て亡びき。前車の轍いまだ遠からず。畠山今これを取つて誠めずんば、後車の危き事近きにあり。今度の軍如何様にもはかしくしからじと、さ、やく人も多かりけり。

紀州龍門山軍の事

四條中納言隆俊は、紀伊國の勢三千餘騎を率して、紀伊國最初峯に陣を取つておはする由聞えければ、同じき四月三日、畠山入道誓が舍弟尾張守義深を大將にて、白旗一揆、平一揆、諏訪祝部、千葉の一族、杉原が一類、彼此都合三萬餘騎、最初峯へ差向けらる。此の勢則ち敵陣に相對したる和佐山に打上りて三日まで進まず、先づ己が陣を堅くして、後に寄せんとする勢に見えて、塀を塗り櫓を掻きける間、これを詐らん爲に宮方の侍大將鹽谷伊勢守、其の兵を引具して、最初峯を引退いて、龍門山にぞ籠りける。畠山が執事、遊佐勘解由左衛門これを見て、「すはや敵は引きけるぞ。何處までも追つ懸けて、打取れ者ども。」とて馳せ向ふ。楯をも用意せず、手分の沙汰もなく、勝つに乗るところは、實

○龍領に重なりて 龍の領の如く段々に積み重なつて。

○引きやする引かである 退却するか退却せずしてあるか
○未だ巳の刻なる 巳の刻は今の午前十時故正午即ち午の刻にはまだ早いこの事から品物のまだ新しいことを云ふ。

にもさる事なれども、事の體餘りに周章してぞ見えたりける。彼の龍門山と申すは、岩龍領に重なりて路羊腸を遶れり。峯は松柏深ければ嵐も鬨の聲をそへ、下には小篠茂りて露に馬蹄を立てかねたり。されども麓までは下り合ふ敵なければ、勇む心を力にて、坂中まで懸け上り、一段平らなる所に馬を休めて、息を繼がんと弓杖に繼り太刀を逆に突く處に、輕々としたる一枚楯に、簀引著けたる野伏共千餘人、東西の尾崎へ立渡り、雨の降るが如く散々に射る。三萬餘騎の兵共が、僅かなる谷底へ沓の子を打つたる様に控へたる中へ、差下して射込む矢なれば、人にはづる、は馬に當り、馬にはづる、は人に當る。一矢に二人は射らるれども、はづる、は更になし。進んで懸け散らさんとすれば、岩石前に差覆ひて、懸け上るべき便りもなし。開いて敵に合はんとすれば、南北の谷深く絶えて、棧ならでは道もなし。如何せんと背をくめて、引きやする引かであるを見る處に、黄瓦毛なる馬の太く逞しきに、紺糸の鎧の未だ巳の刻なるを著たる武者、濃き紅の母衣かけて、四尺ばかりに見えたる長刀の真中拳つて、馬の平頸に引きそばめ、鹽谷伊勢守と名のつて眞前に進めば、野上、山東、貴志、山本、恩地、牲河、志宇津、禿の兵共二千餘騎、大山も崩れ鳴雷の落つるが如く、喚き叫んで懸けたりける。敵を遙かのかさに受けて、引き心地附きたる兵共なれば、なじかは一足も支ふべき、手負を助けんとせず、親子の討たる、をも顧みず、馬物具を脱ぎ捨てて、さしも嶮しき篠原を、滑るともなく轉

○目くれ 目がくらみ。
○内兜を散々にこみければ 兜内即ち顔内に矢を餘す所なく射込んだので。

○金百兩 煉金秤目百兩のこと。

○恐らくは覺えずあるとは多分思はれぬ。

ぶともなく、三十餘町ぞ逃げたりける。鹽谷は餘りに深く長追ひして、馬に箭三筋立ち、槍にて二處つかれければ、馬の足立てかねて、險阻なる處より眞逆様に轉びければ、鹽谷も五丈許り岩崎より下に投げられければ、落ちつくよりして目くれ東西に迷ひ、起き上らんとしける處を、踏み留まる敵餘りに多きに依つて、物具のはづれ内兜を散々にこみければ、續く御方はなし、鹽谷終に討たれにけり。半時許りの合戦に、生虜六十七人、討たる者二百七十三人とぞ聞えし。其の外捨てたる馬、物具、弓矢、太刀、刀、幾千萬といふ數を知らず。其の中に遊佐勘解由左衛門が今度上洛の時、天下の人に目を驚かさせんとて金百兩を以て作りたる三尺八寸の太刀もあり。また日本第一の太刀と聞えたる禰津小次郎が六尺三寸の丸鞘の太刀も捨てたりけり。されば大力も高名も不覺も時の運によるものなり。この禰津小次郎は自讃に常に申しけるは、「坂東八箇國に弓矢を取る人懸け合ひの時、禰津と知らず懸け合はせ、太刀打違へんは知らず、これ禰津よと知りたらん者、我に太刀打せんと思ふ人は、恐らくは覺えず。」と申す程の大力の剛の者なれども、差したる事もせで力のある甲斐には、人より先に逃げたりけり。

二度紀伊國軍の事附住吉の楠折る事

紀伊國の軍に寄手若干討たれて、今は和佐山の陣には御方怵へ難しといひたりければ、

○あつほに入つて笑ひ興じること。

○畠山式部大輔 義熙。

○二の舞 前車の轍をふむ失敗を云ふ。

○庭訓 父の訓へ。○兩 兩方。

津々山の勢も尼崎の大將も、興を醒し色を失ふ。されども仁木右京大夫義長一人は、「あらかしやさてこそよ。哀れ同じくは津々山、天王寺、住吉の勢共も皆追ひ散らされ、裸になつて逃げよかし。興ある見物せん。」とて、ゑつほに入つてぞ笑ひける。これをば御方とやいふべき敵とや申すべき、心得難き所存なり。紀伊路の向陣を追ひ落されなば津々山とても怵ふべからず。さらば敵の懸らぬ前に新手を副へて、尾張守に力をつけよとて、同じき四月十一日、畠山式部大輔、今川伊豫守、細川左近將監、土岐宮内少輔、小原備中守、佐々木山内判官、芳賀伊賀守、土岐桔梗一揆、佐々木黄旗一揆、都合其の勢七千餘騎、重ねて紀伊路へぞ向けられける。中にも芳賀兵衛入道禪可は我が身は天王寺に留められて、嫡子伊賀守公頼を紀伊路へ向けられけるが、二三里がほど打送つて、涙を流して申しけるは、「東國に名ある武士多しと雖も、弓矢の道に於て指をさされぬは唯我等が一黨なり。御方の大勢先度の合戦に打負けて敵に機をつけぬれば、今度の合戦は彌手痛からんと知るべし。若し合戦仕違へて引返しなば、唯少しも違はぬ二の舞にて、敵に力をつくるのみならず、殊に仁木右京大夫に笑はれん事、我一人が恥と存すべし。されば此の軍に敵を追ひ落さずば、生きて二度我に面を向くべからず。これは圓覺寺の長老より持ち奉りし御袈裟なり。これを母衣にかけて、後世の悪業を助かれ。」とて、懷より七條の袈裟を取出して泣くく公頼に與ふ。公頼庭訓を受けて、仔細に及ばずと領掌して兩へ別れけるが、今